
シェールのシュヴァリエ

岩戸 勇太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シエールのシュヴァリエ

【Nコード】

N1437Q

【作者名】

岩戸 勇太

【あらすじ】

山田当一は、さえない中学生である。

突如として現れた、シエールという少女にレイグネンという世界に連れて行かれ、王を廻る戦いに巻き込まれていくことになる。

剣山の騎士

プロローグ

山田 やまだ とあいち

当一は、典型的な冴えない中学生男子であった。学校での成績は真ん中で、補習や追試を受けるような事はないまでも、いい成績とは言えない。

彼は今、枯葉が落ちる道を自転車で走っていた。

街路樹が等間隔に植えられているこの道は、朝の通勤通学の時間帯になると、適度の混みようを見せる。今の当一は歩く人を避けて、自転車用の路側帯を走っていた。

当一は、このまま学校に向って走れば、遅れずに学校に着くはずである。

突然彼の横の木が、いきなり鋭利な刃物で切り裂かれたかのようにして倒れた。周りの人間には、驚いて悲鳴を上げる者もいる中で、「はあ？」

いきなり起こった怪現象に、呆けた声を上げた当一に向けて、声が投げかけられた。

「見つけたわよ。シエールのジェズル！」

そして、ナイフが当一に向って飛んできたのだ。

当一の間の地面が盛り上がって、まるで土囊のようになり、当一の事をかばった。

「気付かれていたのね……」

そこで、当一は土囊の向こう側から発せられる声の方を見る。

ナイフを投げた当人は、見た目は魔術師といった感じである。この時代にそぐわない、まるでファンタジー世界の中から飛び出てきたような、姿をしていたのだ。

木の頂点に当然のように立っているが、細い枝がその魔術師の事を支えられるようには到底見えない。何か仕掛けがあるのだろう。

フードと外套に、何かの模様の刺繍されている服を着て、顔は見

えないが胸のふくらみを見ると女の子なのだろう。

次は、当一の目の前にある土嚢を足場にして飛び上がり、剣を振って魔術師を頭から両断しようとする人影が見えた。

だが、魔術師はすんでの所でその攻撃を避けて、木の頂点から隣の建物の屋上に飛び移る。

魔術師を両断しようとした人影は、これまたファンタジー世界の戦士のような姿をしていた。

無骨な剣を、魔術師に向けて彼女は言う。

「こつちの世界で相手を襲うのはルール違反のはずでしょう！」

魔術師も、それに答えて声を張り上げる。

「今更そんなルールを誰が守るっていうのよ。勝てばいいのよ、勝てば」

その、この世界には場違いな二人は、ルールだの勝てばいいだの、朝の往来で意味不明な会話を大声で始める。

魔術師と会話を始めたのも女の子だった。だが戦士は顔を隠してはおらず、顔を確認する事ができる。

短く揃えた髪に、意志の強そうな鋭い赤い瞳。肩にかかるか、かからないかくらいに伸ばされた髪は、しっとりとした光沢を放っていた。

鎧を着ているが、がちがちに固めた重厚な鎧ではなく、胸当てに手甲と脚絆を装備した軽装である。

「ふん。まあいいわ。今回は引き下がってあげるけど、いつまでもシユヴァリエなんて引っさげていても邪魔になるだけよ。」

今は手を汚してなんぼの時代なんだから
「手の汚れた者が国を手にする事になれば、国そのものが汚れる事になるわ」

「自分の手を汚す覚悟も無い人間が、王の器と言えるのかしら？」

『王だのなんだの……訳が分からない』当一は、この二人の会話を聞いてそう思った。

今は選挙によって決められた国会議員が、総理大臣を決める時代

である。

今の時代に存在している王様は、天皇という形で残り、作られた笑顔で手を振ってればいいだけけの存在だ。

「それじゃあね」

最後にそう言っで魔術師はテレポートをしたかのように姿を消してしまった。

戦士も、飛び回って建物の屋根をつたい当一の視界から消えていく。

「何だっただよ……」

当一は、あまり事に呆然としていた。そこで後ろから肩を叩かれる。

「君。ちよつといいかな？」

自分の肩を叩いた人間は警官であつた。

「これはいつたい何だい？」

そう言っで、倒れた木や盛り上がった地面を指差した。

「俺が知りたいぐらいです」

「君が知らなきゃ、誰が知っっているっというのかな？」

「はい？」

「明らかに君の周りだけで怪現象が起こっているんだよ。知らない関係ないと言われて素直に信じると思ふのかい？」

「……え……？」

そこで当一は自分の状況に気付いた。自分の後ろで木が倒れている。しかも、自分の目の前では土が不自然に盛り上がっている。

この当一でも訳の分からない怪現象は、当一の周りのみで起こっているのだ。

「いや！俺は何も関係……」

「関係ないと言われて素直に信じると思ふのかい？」

警官は、当一の言葉にかぶせるようにして言ってきた。

警官に一度疑われたら、信用をしてもらえるまでとてつもなく時間がかかる事になる。それは今回も例に漏れないらしい。

「どんなトリックを使ったかは知らないが、これは公共物破損だよ。ちよつと署の方まで来てもらおうか」

「ええええ！」

そして当一は、このまま行けば間に合つはずであつた学校に、遅れる事になった。

剣山の騎士（後書き）

どこぞの出版社に送ったものです。
埃をかぶっていても、しょうがないんだここに投稿。

レイゲネン

「警官なんて嫌いだ……」

警察官の事情聴取を受けると、皆一様にそう口にするのだという。警察から出る事ができたのは、学校が昼休みの時間になってからであつた。何を言つても信じてくれない警察は身元のメモを取られ、指紋まで取られてから、証拠不十分だという名目で釈放された。

当一は、警察署からそう遠くない場所にある。自分の通う菜琴中なぐさな学校に、憂鬱な気分で自転車に乗って向つていた。

これからまた別の事で苦勞をする事になるのが、当一にはすでに想像がついている。

「あいつはうるさいだろうな……」

いつも自分にちよつかいをかけてくる奴がいるのだ。あいつは、やたらと正義感が強くて、くそが付くほどの真面目ぶりから、当一にとっては煙たい存在だつた。

学校は徒歩で数分とかからない場所である。今から教室に向つと、まだ昼休みの半ばの時間に教室に着くだろう。

そうなると、残つた休み時間が全てあいつの小言を聞くのに消費されるのは火を見るよりも明らかであつた。

あいつが自分に向つて言う言葉は手に取るように分かる。「一体いままで、どこで何をしていた？」と言われ、警察署にいたと言つてしまうと「お前は一体何をやつたんだ？」と続き、本当の事を言つても「何もしていないのに警察署に呼ばれる訳が無いだろう」となり、最後にはお決まりの言葉である、「修練が足りん！ 鍛え直してやるから放課後に武道場に来い！」となつていく。そして、もし逃げたらさらに手ひどい目に遭わされる。「貴様！ 逃げるとはどういうつもりだ！」という言葉から、地獄のような責め苦が始まるのだ。

「怒られるしかないか……」

逃げて追って来る。その点についてはターミネーターよりも彼女はしつこい。痛い腹があるなら素直にさらけ出してしまおうが、彼女の心象もよく、ダメージも少ないのだ。

憂鬱な顔をして、当一は教室に向かつて行った。

一美^{いちみ}という少し変わった名前の読み方をする彼女は、昼休みの時間中ずっと教室の入りを凝視していた。

彼女は、長い髪をしており前髪をそろえている。凜とした顔立ちをしている彼女は、学校の制服を着ていても、剣道少女という文字を顔に貼り付けてあるような雰囲気放っていた。

「一美さん。遅れてしまって申し訳ありません……」

一美は、そう言いながらおどおどして入ってきた当一を見かけると、当一の方へと歩いていった。

次の彼女の言葉が想像できている当一は、引きつった顔をしながら、彼女の事を見た。

「一体いままで、どこで何をしていた？」

当一が弁解の言葉を出す前に、一言一句が当一の予想と間違いない言葉を放った一美は、睨んで当一を見上げた。背は一美の方が少し低いくらいだ。それでもこの年代の女の子の中では高いほうであり、当一の鼻の先に一美の目がやってくる。

「こつちだつて大変だつたんだよ……すぐ横で木が倒れたり、目の前でいきなり地面が盛り上がった……」

「あれか……あれなら私も通学の途中で見たが、あれがすぐ横で起きたのか？」

「ああ……すぐ横だつた」

「怪我はないか……？」

そうすると、一美は当一を睨む目から、急に心配をするような優しい目になっていった。彼女のそういうところも、当一にとっては苦手であつた。

まるで自分の母親のように自分の事を心配するのだ。自分が風邪

をひけば家が遠いにもかかわらず、必ず看病にやってくる。だが、彼女が風邪をひいて、当一が彼女の看病をしに行くと、彼女は風邪がうつるといけないと言って、当一の事を追いつ返すのだ。本当に、自分の母親のような態度である。

その彼女は、少し涙がたまってるんだ瞳をしている。

「ああ……お陰様で怪我はまったくくない」

「そうか……よかった」

いつもその言葉を聞くと、何か自分が悪い事をしたような気がしてくる。いつも凜とした容姿の彼女が、不安で泣き濡れる顔に変わってしまうのだ。当一にはそれが耐えられない。

当一の心を痛める顔をやめた一美は、すぐに元に凜とした顔に戻った。

「なら話の続きだ。今まで何をしていたんだ？」

当一は観念して正直に答える。そしたら、予想通りの結末が待っていた。

レイゲネン 2

「ちよつとは手加減しろつての……」

一美のしごきを受けた当一は、見事に腕に痣を作っていた。

一美は見た目どおりの剣道少女で、しごきというのも剣道の練習である。彼女は遠慮なく打ち込んでくるため、いつもしごきが終わる頃には腕が痛みで上がらなくなってしまふ。

今日の地獄の特訓を耐え切った当一は、傷む腕で自転車に乗りながら家に向っていた。

当一にとつて、これはよくある事である。帰ったら、冷水で痣を冷やしておかないと後で酷くなる。もしそれを怠ると、腕が腫れあがつてしまい、明日それを見た一美をまた心配させてしまうのだ。

家に着いた当一は、玄関を通ると洗面所に向つて腕を冷やした。いつも持ち歩いているハンカチに水を浸して痣に当てる。そこに母親の声がかかった。

「当一。お客さんをお前の部屋で待たせているから、すぐに行つてあげなさい」

客などと言われても、心当たりなど居ない。誰かと約束でもしていただろうか？ そう疑問に思いながらも自分の部屋に入った。

「お邪魔しています」

自分の部屋に居たのは、朝のごたごたで自分の前に姿を現した、戦士の姿だった。彼女は、礼儀正しく一礼をして、当一を出迎えたのだ。

ここにるのがさも当然という様子で待っていたのを見て、当一は言葉を失った。

「いきなりで状況が飲み込めないのは分かります。一つずつ説明をしましょう」

口をばくばくさせながら、言葉をしゃべれずにいる当一に向つて、彼女は話し始めた。

「まず、私はこの世界の人間ではありません……」

彼女はある事情により、異世界からこの世界にやってきたのだという。その事情というのは、どうやら、当一の力なしでは解決のできない事だという事らしい。彼女がそこまで話したところで、当一は彼女の話を止めた。

「待てよ！ そっちの事情で、何で俺が動かなきゃならないんだ？」

「それはこれからお話いたします」

そして彼女は説明を続ける。当一は気付いていなかったが、彼女の額に怒りを表す青筋を浮かんでいた。

その世界では、今王が居ない状態なのだという。国王が死去し、次の王を決めるためにあるしきたりを行わなければならないというのだ。

「そのしきたりっていうのは何なんだ？」

「はい。これから説明いたします」

当一の質問に、彼女は表面上は丁寧に答えた。だが、当一の気付かないところで、彼女の額に青筋が増えていく。

それは王の座を巡った争奪戦なのだという。王の候補者は、異世界の人間とタッグを組んで、他の候補者と戦わなければならない。

戦いの方法は異世界の人間を倒せば勝ちというものだ。この世界の人間は、この戦いにおいてはジェズル（権杖）と呼ばれ、折られれば権力を失うという意味を持っているのだという。

「ちよつと待て！ じゃあ俺は殺されちまうんじゃないか！」

「話は最後まで聞いてください。ジェズルの皆様の安全は確保されています」

その返事をする時、彼女は額の青筋を増やしただけではなく顔を引きつらせた。それでも彼女は表向きには丁寧な話を続ける。

セイフティリングというものがあり、それはそれを身に着けている人間の事を守るのだという。だが、セイフティリングの耐久力にも限界があり、攻撃を守り続ければ壊れてしまう。

「そのセイフティリングが壊れた瞬間が、ジェズルの破壊の瞬間と

みなされます。ですから、ジェズルの皆様は命を落とすという事はまずありません」

「だが、俺にその戦いに参加する理由が……」

当一がそう言うと、彼女の額の青筋が音を立てて切れた。

「あああああ！ ごちゃごちゃうるさいわね！ とにかくついてきなさい。だから話すよりも、実際に見たほうが早いわよ！」

彼女が態度を豹変させた。そして、当一は自分の足が床の中に沈んでいくのを見て、さらに驚く事になった。

いつのまにか、足元には光で書かれた魔方阵が出来上がっていたのだ。まるで泥の中に沈んでいくように、当一の体は魔方阵の中に飲み込まれていき、姿を消していった。

「起きた？」

それが。当一が目を覚まして始めに聞いた声である。目を開けると、見知らぬ場所にいた。

ここは小高い丘のようである。眼下にはいっばいに海のような草原が広がり、その草原の中に浮く木の葉のように存在する、壁に囲まれた町が見えた。

青空にはいわし雲が浮かび、涼しく過ごしやすい風が吹いた。

「どう？ いい景色でしょう？」

どう見ても、ここは日本のようには見えない。まるで、外国の戦いの時代の姿に見えた。

その景色を不思議に思い、当一は呆然として見入っていた。

そこに横から声かけられる。

「い……い……け……き……でしょう！ 返事くらいしなさいよ！」

横からそう声をかけてきたのは、さつき自分の部屋の中にいた戦士のかつこうをした女の子だ。

「いい景色も何も……ここはどこなんだ？」

その当一の返事に、その子はむっとした顔を作った。

「私たちの住む世界。名前はレイグネン……」

当一は、さっきこの子が言った言葉を思い出した。彼女は当一達の世界の人間ではない。そして、ここが彼女達の世界という事だろ
う。

「ついてきなさい」

彼女は、当一が呆然として頭を抱える時間も与えてくれはしない
ようだ。そのまま歩いていつてしまう。

「待てよ！」

当一がひきとめようとしても歩みを緩めずにそのまま歩き続けた。
仕方なく、当一は彼女の事を追いながら話を続ける。

「名前をまだ聞いていなかったな。俺は当一って言うんだ」

「シエール」

彼女は短く答えた。シエールは、それから当一の方を一度も振り
返らずに、早足で歩き続けた。

それからシエールは、何も無い道をひたすらに歩き続けた。両横
は何も無い草原で、石が取り除かれて草が抜かれている、わたちの
跡が残っている土を盛って舗装のされた道をひたすらに歩いている
のだ。

「なあ……どこまで行くんだ？」

当一がそう聞いてもシエールは返事一つ無しで歩き続ける。ずっ
とこの調子である。一言も会話をせず、行き先も分からずに、当一
はシエールの後についていつているのだ。

最初は丁寧な態度を取っていたが、いまはこのような素っ気無い
態度を取られている。

「もしかして、怒っているのか？」

「怒ってなんかない」

当一の質問にシエールは否定の返事をした。だが、こういう返事
が返ってくる時は決まって相手は怒っているものだ。

「俺が何かしたのか？ 最初はあるに丁寧な態度取っていたじゃ
ないか」

「あれは、私の誇りだからよ。騎士道は私の行動の規範なの」
シュヴァリエ

「あのレディファーストとか手袋を投げて決闘するやつか？」

「それとは違うわ。騎士道っていうのは、強くあり、優しくあり、正しくあり、勇ましくあり、そういった、強い心を持ったための気構えの事よ。」

レディファーストっていうのは、社交界での女性に対する礼節だし、手袋を投げるのは、ただの決闘の合図よ」

シエールは、突然当一の行動を手で制した。それで足を止めた当一。

腰に刺してあった剣を抜き、街道の先へと切っ先を向けた。目の鋭さは、敵を射抜くようなものになり、横からそれを見ている当一も冷たさを感じる。

シエールは道の先に見える人影を見ている。小さな影と大きな影が一つずつ。女の子と男であろうというのが分かった。

その人影はこちらに気付くと、女の子は自分達に背を向け、男の手を引いて走り出した。

「逃がすか！」

シエールは、その人影を追っていった。それに当一も続いていく。

レイグネン 3

シエールの足は速い。当一からどんどん離れていき、前を走る人影との距離をどんどん詰めていく。

「卑怯者！ 正々堂々と勝負しなさい！」

そう言いながら相手の事を追っていくシエール。人影は、何度も後ろを確認しながら逃げている。まるで、何か怖いものから逃げているかのようである。

それを見ると、当一にはどう見てもシエールの方が悪者のように見えた。これが、いったいどのような状況なのかは分からないが、シエールの行動には、彼女のシュヴァリエの要素である、優しさや、正しさ、といったような物は見当たらない。

シエールは、その人影に追いつき、男の方に向けて剣を振り下ろした。斬撃はバリアが生まれて弾かれる。

女の子の方の人影は、男を先に行かせて自分がシエールと相対した。シエールに向けて剣をかまえて立ちほだかる。

当一からは、シエール達が親指くらいの大きさにしか見えていないが、シエールが女の子をあっさりとおしているのは遠目でも分かった。

シエールが剣を横に振ると女の子の剣は弾きとばされて、返す刀で剣の腹を女の子のこめかみに叩きつけた。まるで、蹴り飛ばした小石のように飛ばされて、道の外れの草の生い茂る路傍に倒れた女の子には目もくれず、シエールは先を走る男の方に向かって行った。男に追いついたシエールは、男に剣を叩きつける。それは、またバリアによって弾かれた。だが、シエールはもう一度剣を叩きつける。それを数度繰り返し続けた。

バリアに卵が割れるかのような亀裂が入り、バリアが粉々になっ

て消えていった。

それを確認するとシエールは剣をしまう。バリアが消えた後には、

男の姿はなくなっていた。

事が終わった後、当一はシェールの所に追いついた。

「あの人はどこに……？」

「元の世界に帰っただけよ」

これはさっきの彼女の説明で聞いていた。セイフティリングが壊れたのだろう。ジェズルはそうなると元の世界に帰る事になるのだ。

「これが、王を巡る戦いなのか……？」

これは、シェールから聞いていた通りの事である。この戦いは、ジェズルの潰し合いであり、セイフティリングのバリアが割れば、負けとなるのだ。

「重要なのはここから」

お互いにジェズルを潰し合い、ジェズルが倒された方の負け。これが、彼女らの王を巡る戦いの基本らしい。だが、シェールが言うには、この戦いの本番はこの後にあるのだという。

シェールは来た道を戻る。女の子が気を失っていたのを見て、頬を叩く。

「ん……」

小さく震えてから目を覚ます女の子は、ほっそりした体で幼い顔立ちの残る女の子だった。シェールが着るような装備を着ているものの、それは似合っていない。戦いに向くような女の子には見えな
いのだ。

「あなたはデイーリアっていったわね。いきなり私と当たるなんて運が悪かったじゃない」

「シェール……学年最高位の……」

そう言った後、シェールは得意げな笑顔を当一に向けた。

『どう？ これで分かったでしょう？ 私は結構強いよ』と、言っているのが分かるような笑顔だった。

学年最高位というのがどのような物なのかは当一には分からないが、シェールは数いる候補者達の中でも上の方に存在しているのだらう。

「あなたはジェズルを倒された。それは分かるわよね？」

その子に向けて宣言をするように言う。そして、シエールは当一の方を向いて話を始める。

「この戦いにはルールがあつて、敗者は、勝者の命令に従わなければならぬ。候補者とそのジェズルの言う事なら何でも聞かなきゃならないのね。」

当一。ディーリアに今から好きなことを何でもしてもらいなさい」
「何でも……」

当一の脳裏に浮かぶのは、あられない姿をしている彼女であつた。何をしてもいいと言われると、健康な男の考える事など、大体このようなものであろう。

ほっそりとした体には、しっかりとくびれがあり、鎧の中の胸は思いのほか大きく、触れると壊れてしまいそうな肩を震わせる彼女の顔は、羞恥から赤く染まっている。

そう、妄想の世界に沈んでいた当一だが、シエールの白い目線に気付き、気をとりなおす。

だが、それに気付いたシエールは、別に気にするようでもなかった。

「私を気にする事はないわ。ちょっと離れたところに行っているからその間にやっちゃって」

シエールの言葉は、当一がこれから、やらしい事を行うというのを前提にして言っている言葉だ。だが、当一はそれにこう答える。

「みそこなうな」

シエールを一瞥してそう言うと、当一は女の子の前に立った。

女の子は、不安げな顔をして当一の事を見上げていた。

そこに、ポケットの中からハンカチを出した。シエールが殴って血が滲んでいるこめかみにハンカチを当てる。

それで、不安げな顔をするのをやめて、不思議そうな顔をするようになったディーリアに向けて、当一は言う。

「何も命令なんてしない。君の自由にすればいい」

「何を考えているんだか……」

シエールは、道の先を歩く女の子の影を赤い瞳で見つめながら言った。

彼女は当一の方を何度も振り返って、頭を下げながら実家への帰路についている。シエールの隣の当一は、それに手を振って答えていた。

当一は、女の子には一切手を出さず、彼女を解放する事を選んだのだった。シエールはそれが不満のようである。当一に向けて食ってかかった。

「あんたは何のためにジェズルをやるつもりなの？ 他のみんなは、こういう役得があるからジェズルなんていう、厄介事を引き受けるのよ。自分からその役得を手放すなんて、信じられないわ」

「役得といっても、受け取るのも手放すのも、本人の自由だろう？」
「それはそうだけだね……私が一番気にしているのは、あなたが後になって『ジェズルなんて事をやらされて、一体俺に何の得があるって言うんだ』って言い出す事なのよ。」

適当に美味しい思いをしてもらわないと、後になって困るのはあなたじゃなくて私なのよ」

「それなら、俺がジェズルの役を最後まで引き受ければいいわけだな」

シエールはそう聞くと渋い顔を作った。彼女は、何の役得も無しに当一が動くなどとは考えられないようだ。シエールは、当一に甘い汁の味を覚えてもらいたいのだろう。

「お前のシュヴァリエっていうのは、ああいう子を助けたりはしないのか？ 相手が怖がっているのに、無理矢理戦ったりするのが、お前の騎士道なのか？」

「敵と正々堂々を戦う事の何が悪いの？ むしろ、あの子は逃げ出した。敵に背を向ける事こそ、卑怯者のやる事よ」

「それはお前にとって絶対普遍の真実なのか？ 俺に餌をやりたいから、獲物を逃がしたくなかっただけじゃないのか？」

当然、あの子のジエズルを倒さなければ、当一があの子に命令を下せるという状況にはならなかった。あの子の事を卑怯者など言ったのも、それを隠すための言い訳にすぎないように、当一には聞こえた。

それを聞いて、シエールはそっぽを向いた。彼女は確かに当一に餌をやるために獲物を狩ったのだ。彼女自身それは分かっている事であるため、何も反論する事はできなかった。

「俺はジエズルを続ける……だけど、その理由は美味しい思いをするためじゃなくて、お前の事を止めるためだ」

当一は、そう言っただけでシエールに力のこもった目を向けた。それを横目で受け取るシエールはどこか不満げである。

当一の部屋の床に魔方陣が現れ、その魔方陣から、ステージの奈落から出てくるようにして、シエールと当一が姿を現した。

「今日はこれで終わりよ。また明日も頼むわ」

シエールは、そう言い当一の部屋から出て行くとした。そこに当一が声をかける。

「お前はこれからどうするんだ？」

「そうね……朝襲われたように、いつ他の奴が襲ってくるか分からないわ。この家の近くで、あんたの警護をしやすい場所を見つけてそこで寝起きするつもりよ」

「まだどこに泊まるのか決まってるのか？ それは困るんじゃない？」

「まあ、これくらいの事は自分で何とかするわ。この戦いに参加する時に、その覚悟はしっかりつけてきているから」

そこで部屋のドアが開かれた。

「そういう事なら、うちに泊まっていてもいいわよ」

それは、布団を抱えた当一の母親である。彼女の名前は祥子といい、前々から細かい事は気にしない性格であるというのは、当一も

分かっている事であつた。

「あの……祥子お母様……あなたは今の状況をどのようなものだとお考えですか……」

丁寧語で質問をする当一に、祥子は少し「うーん……」と言って思案をする顔を作った後で答える。

「息子の当一が、家出少女をたぶらかして家に連れ込んだって状況かしら？」

「俺は泣けばいいのか笑えばいいのかわからないんだが……」

不満とも何ともつかない言葉を呟く当一などは気にせずに、祥子は布団を部屋に敷いた。

「うちでは、六時に夕食にする事になっているから、シエールちゃんは今明日からはその時間までには家に帰ってきてね」

シエールは、唐突すぎる話の進み方についていけないようであつた。

祥子は、それでも気にせず用がこれで終わったとばかりに部屋から出て行つた。

後に残されたのは、当一と呆然としたシエールである。

「何か聞きたいことはあるか？」

呆然としたシエールに、当一は声をかける。

レイグネン 4

「あの人は一体何を考えているの……？」

「それは俺にも分からない」

祥子は、昔から細かい事は気にしない性格だった。それについて、当一はいつも驚いたり呆れたりを繰り返している。

「これは細かい事なの？ 鎧姿で剣を持った人間が、家に上がりこんでいるのよ。最初にこの家を探ねて、そのまま中に入れてもらえたのだから不思議だったのに……」

「そのかつこうが変だっというのは自覚しているんだ……」

今回も、色々と問題のありそうな事が目白押しの状態でも、何も気にせずに受け入れているのだ。

「母さんの事は、考えるだけ無駄だと思うぞ」

今の時間は六時である。祥子が、夕食にすると言った時間だ。台所から、祥子の「ごはんを食べにいらっしやーい」という声が聞こえてきた。

「あつかましいんじゃない……」

「気にしたら負けだ」

当一は、いまだに動揺しているシェールを台所にまで連れて行った。

食事の後に風呂に入るのは当一の習慣である。当一は、普段ならゆつくりできるはずの風呂場の時間を、変な汗をかきながら過ごす事になった。

「なあ……いつまでそこにいるつもりなんだ？」

「ずっとよ。いつ敵が襲ってくるか分からないからには、離れずの警護は基本じゃない」

シェールが脱衣所に居るのだ。脱衣所と風呂場をし切る曇りガラスから、彼女が脱衣所で仁王立ちしているのが当一には見えた。

「なんかおちつかないな……」

「がまんなさい」

当一の文句をシエールは一言で切り捨てた。

しぶしぶ風呂場で過ごす当一は、シエールに声をかける。

「お前は風呂には入らないのかよ」

「なっ……何を言っているの！ あんたと一緒にお風呂なんかに入る訳がないじゃない！」

「いや……一緒に入るとは言っていないぞ。俺が出た後の話だ。俺を勝手に変態にするなよ」

「うるさいわね！ こういう状況で言われたら、そう思ってもものじゃないの？」

「そりゃあ悪かったな」

どうも当一は、シエールとの会話がかみ合わないように感じる。

当一は、湯船に浸かりながら彼女がレイグネンでとった行動を思い出した。

彼女は、怯える女の子を追いかけて叩きふした。シュヴァリエを志す彼女がとるべき行動とは思えないが、彼女はそれを「敵に背を向ける相手の方が卑怯」と言っけて切り捨てたのだ。

彼女の行動には当一は嫌なものを感ずる。

彼女は、シュヴァリエに準じた行動を取っていると言っが、それはどうしても言い訳がましく見えて仕方がないのだ。自分に餌を与えるためだけに、女の子を襲ってそれを適当な言い訳で正当化しようとする。

当一は、それを言葉にして彼女に伝えたかった。だが、何と云えばいいのだろうか？ 彼女はそれを正当だと信じて疑わない。自分に都合のいい考えにすぎりついて、何かにつけてそれを正当だと言いつける。彼女の行動は、そのように見えるのだ。だが、そのまま伝えたとことで、彼女は怒るだけに決まっている。

「出るぞ」

当一はそう言っけて湯船からあがった。自分は彼女にそれを伝えた

い。そして、その行動を正して欲しい。おこがましい考えであるとは感じている。だが、自分の芯の部分が、彼女にそれを伝えろと言っているのである。

「え……ちよつと待って……」

思考の中に沈む当一には、シェールがそう言うのが聞こえていなかった。

曇りガラスの張られた扉を開けると、慌てた様子のシェールと目が合った。そして、彼女の視線がどんどん下の方に下がっていった。そして……

「キヤアアアア！ バカ！ ちよつと待ってって言ったのに！」

「出るぞって言ったじゃないか！」

「だから私の言う事も聞きなさいよ！ バカ！ バカ！ 変態！」

「だったらさっさと脱衣所から出て行けよ！」

「こんな物を見せ付けといて、よくもそんな事が言えるわね！」

その声を聞きつけて祥子がやってきた。シェールが一部始終を話すと、当一はそのままの姿で居間に引つ張り出される。

「あの……服を着ていいですか……」

「そのかつこうが好きなんじゃないの？ 当一さん？」

丁寧語で相手に向って話すのは、この家族の間では相手に重要な事を伝える時の信号らしい。

「あなた……物には順序っていう事をご存知？」

「いきなり一つ屋根の下っていうのも、順序を外れていると思うんだ」

「当一さんが連れ込んできた子じゃないのですか。そんな事を言える立場ですか？」

このように、当一も下手に反論をするから話が長引く事になる。

祥子の説教は、平行線のまま、深夜にまで続いた。

「完全に湯冷めした……」

就寝をしようとして布団に入ったものの、当一は布団の中で震え

ながら、灯りを消した部屋で寝ていた。

「あんたが悪いんでしょう。あんな汚いものを見せるから……」

「その話はもういいや」

シエールは当一が布団に入って眠る横で、剣を抱えたまま腰を下ろして壁にもたれかかった状態で居た。

あれからシエールは結局風呂には入らず、ずっと当一の傍にいた。当一の警護のために傍にいたと言ったとおり、片時も離れず、眼光も未だに衰えを見せていなかった。大統領の警護をするSPであってもここまでの事はしないであろう。それを考えると大げさすぎるように感じた。

「お前は寝ないのか？」

「寝ないわよ！ 寝たら何かする気じゃないわよね？」

「お前はさつきといい……俺の事を何だと思っているんだ……」

「露出狂の変態」

「……」

それは流石にあまりにもな返答である。布団にくるまりながらも、当一は奥歯を噛んだ。

「そっちがそう言うなら」

当一はそう言って布団から出て、秋用のコートを着込んだ。

「どこに行く気？」

「ついてからのお楽しみさ」

「わたしもついていくような言い方じゃない」

「俺の警護のためにつかず離れずなんだろう？ 外出中もしっかりと警護をよろしく」

「何様のつもりよ」

そう悪態をつきながらも、シエールは当一が外に出るのについていった。

当一の足は、人の多い駅の方でなく町の外れに向かって行った。車の通る量も少なく、両脇に針葉樹の並ぶ林道を当一達は歩いてい

た。

「ねえ。本当にどこまで行くつもり？」

「ついてからのお楽しみ」

「いいかげん言いなさいよ」

「おあずけもできないのか？ 羨のされていない子だねえ」

「あんたなんかに犬扱いされるいわれはないわよ」

さつきから質問を続けてくるシエールを、当一はのりくらりとかわし、目的の場所に向った。終始、不満そうな顔をしているシエールは、その場所に着くと、

「綺麗ね……」

と言つて、それから言葉を失った。

「だろう」

そこは当一が気に入っている場所である。

林道から、車が落ちないように取り付けられているガードレールの向こう側には、この町自慢の夜の景色が広がっていた。

あの街の中に飛び込んでいけば、無粋な喧騒と派手な装飾でうんざりさせられてしまうだろうが、遠くから見ると、宝石をちりばめられているように見えるのだ。当一はこれを一人にしか教えた事はない。

その教えた事のある一人である一美は、この景色を見た時喜んでくれた。だから、シエールにもこの景色を見て喜んで欲しいと思ったのだ。だが、シエールはこの景色を見てふてくされたようにそっぽを向いた。

「なんだよ、この景色が気に入らないのかよ」

「別に、この景色が気に入らないわけじゃないわ」

そして、シエールは小さな声で続けた。

「私が見せた景色を綺麗って言ってくれなかったじゃない……」

「ん……？ どういう事だ？」

「私がレイグネンで見せた景色は、私のお気に入りの場所だったのよ。結構自信があつたのに、あんたは一言も綺麗なんて言ってくれ

なかったじゃない。それなのに、私はこの景色を綺麗なんて言っちゃって……」

シエールは顔を伏せて言った。恥ずかしがっている顔を見られるのが嫌なのだろう。

「どうせ、覚えていないんでしょうけど……」

最後にシエールはそう付け加えた。

当一が目を覚ました時に、目の前に広がっていた景色である。視界いっぱい草原が広がり、草原に浮かぶようにして存在する壁に囲まれた町は、太陽の光を浴びて、輝いていた。

「あれは……いい景色だった」

当一は思い出してそう言った。

「いいわよ！ 今更フォローを入れるように言わなくても」

「そんなつもりはない。あの景色はどうかのカメラマンが写真に収めるような綺麗な景色だった。これは嘘一つ無い俺の本心だ」

「いいって言っているの！」

そう最後に言ったシエールは、きた道を戻り始めた。

「もうこの用は済んだでしょう！ 帰るわよ！」

言い捨てるようにしてそう言ったシエールは先に歩いて行ってしまふ。

「怒らせたかな……？」

当一は、シエールに聞こえないように呟いて追っていた。

とうのシエールは、当一に見えないところで口元を綻ばせた。あの景色をほめてもらえて嬉しかった。

だが、それを言葉にして当一に伝えるのははばかれた。

レイゲネン 5

「ちっ……あいつはいちどやると決めたらとことんやるのよね……」
彼女の名前はリーシアといい、今朝、当一の事を襲った魔導師である。

彼女の国の魔法の形態は単純で、エレメント（四属性）に基づいた魔法を、リーシアは学んでいる。

リーシアは風の魔法を今は使っていた。その風の力を使って相手の位置を探り、今は二人の会話を盗み聞きしていた。

今リーシアがいるのは民家の一室であるが、床に魔法陣が敷いてあり、これで自分の魔法の力の補助をしているのだ。

隙を見て、シエールのジエズルである当一に襲撃をしかけようとして、チャンスを狙っていた。だが、シエールはリーシアの襲撃を恐れて寝ずのばんをしているのである。隙など見つけれようもなかった。

リーシアは、人を疑いすぎて鋭くなった目を閉じ、どうしても幼さの消えない丸みのある顎に手を当てて考え出した。

魔術のために背中まで伸ばした紫色の髪は後ろで束ねられている。もみあげから伸ばした髪を指で弄びながら、少しの間黙考をする。

「今日はもう寝るか……」

これはただ諦めたわけではない。

たしかに、今の当一につきつきりではんをするシエールには付け入る隙がない。だが、それだって長く続くわけではない。集中力がいつまで続くか分からないし、疲れたってたまってくるはずだ。

そうやって、弱ったところに襲撃をしかけるという方針に切り替えただけだ。

彼女は、隠れて相手に襲い掛かる事が得意である。そのためなら水や泥を被る事だっていいとわしない。

「正々堂々なんて、守っていても無駄なだけよ。シュヴァリエなん

か、潰れてしまえばいいわ」

魔法陣を片付け、長い髪にくしを通して髪を頭の上で束ねながら、リーシアは聞こえるはずがないのを分かった上で、シェールに向けて呟いた。

昔の友人 1

当一は、学校に行くために家を出る。自転車を置いてある玄関横の車庫まで移動しようとしてるところに、剣が風を切る音を聞いた。
ヒュン……ヒュン……

小気味いい音を聞き、それにつられて自分の家の庭にまで行ってみると、シエールが庭で素振りをしていた。

「何の用？」

シエールは当一に視線も向けず、素振りの手も止めずに言った。
「危ないから近づかないで」

拒絶の意思を体全体で表現している彼女。

「昨日の事をまだ怒っているのか？」

「何も怒ってなんかいないわよ」

「昨日は結局一睡もしてないんだろう？」

「あんたが気にする事じゃないわ」

当一は、次に何と声をかけていいか分からない。どのような言葉を投げかけても拒絶の意思の籠った言葉で叩き落される感覚だ。

「あんたの通っている学校の場所は分かっているし、あんたとは鍛え方が違うの。私の心配なんて必要ないわ」

次の行動に出ようとしても釘を刺される。

「そうか……体に気をつけるな」

「心配なんかないと言ったはずよ」

またしても、言葉を叩き落された。

彼女は心に壁を作っている。その原因は、あの出来事のみではないと思える。

当一は、シエールにどうしてやる事ができるだろうか？

このような様子では、この先彼女の体はもたないであろう。当一にはそれが心配だった。

今日は問題なく通学をする事ができた。

昨日の夜は寝入ったのが深夜も遅くなった頃だったので、基本的に睡眠時間が足りない。当一は、眠気から教室で大きくあくびをした。

「こら、たるんでいるぞ」

そこに一美の叱咤が入る。一美は、まだ最初の授業が始まる前だというのに、いつも通りに当一には厳しくあたった。

普段なら厄介なだけの一美の言葉である。

「なあ一美。今日は帰りに稽古をつけてくれないか？」

だが、今日の当一はそれを厄介だと思うどころか、一美にそう言い出したのだ。きょんとした一美は聞き返す。

「どういう風の吹き回しなんだ？」

「なに。いきなり必要になったんだ。それだけだよ」

異世界での戦いに巻き込まれたので、力を付けておきたいなどと言うわけにもいかず、当一は微妙な言い方で答えた。だが、一美はそれをさほど気にしなかったようだ。

「なんか、稽古をつけてくれと言うわりには、あまりやる気というものが感じられないんだが？」

「それはいつも通りだろう」

当一は、いつもは嫌々やっているのである。それなのに、自分からやってくれと言ってくるのならば、それは大きな進歩だろう。

自分から稽古をつけてくれと言ってくるのが一美には嬉しかった。「今までみたいに手加減はしないぞ。自分からやってくれと言いついたのだからな」

「いままでも、手加減をしていたとも思えないがな……」

痛みは引いたものの、まだ当一の腕には青あざが残っている。昨日もそれだけの荒稽古をしていたのである。これが手加減されたものだとはいえなかった。

「今までの特訓が極楽浄土のように思えるような、本当の地獄を見せてやるさ」

そして、放課後に稽古をする事に決まった。

当一は昼休みに校庭の隅にある木のところにやってきた。

「おい！ 降りてきたらどうだ！」

シエールが木の枝に座っているのだ。声をかけても反応が見えない。

石を拾ってシエールに向けて投げつけた。

目を閉じていて、起きているかどうかも分からなかったシエールだが、目を閉じたまま当一が投げた石をキャッチした。

初めて面倒そうにして目を開き、横目で当一の事を見ながら言う。
「気にしないでいいのよ。あんたは、いつも通りに生活をしていればいいんだから」

今の当一はあの魔術師に狙われている。身の安全を考えたら、当一は学校に出ずに家でおとなしくしておいたほうがいい。

シエールはその当一をつかず離れずの距離で監視をして、襲撃者から当一を守っているのだ。

シエールは石を放り捨て、また目を閉じた。体を木の枝に預ける。
「その代わり、レイグネンでは私の邪魔はしない事」

あなたの身の安全は保障する。その代わりにレイグネンでは自分の言う事をしっかり聞くこと。

シエールは、当一にそう契約を持ちかけてきている。

ジェズルの特権を受け取らない当一に、代わりとして出している交換条件のようなものであると彼女は考えているのだろう。

「睡眠なんてのは、数分の間うとうとするくらいで十分なのよ」

「お前は野生動物か……」

『うつさい、うつさい……』といった感じで手をひらひら振りながら、木の枝に腰を落ち着けたシエール。

当一は、シエールの前から去っていった。

「何をやっている当一！ もうすぐ授業が始まるんだぞ！」

まだ、予鈴も鳴っていないというのに、一美が教室の前から言うてきた。

「大声で言わないでくれよ恥ずかしい……」

一美が相変わらず当一に対して世話を焼くのは、この学校では周知の事実になっている。クラスメイトからもその事でよく冷やかされるため、こういった多くの人の目に触れるような事は、当一にとっては止めてほしいものである。

入り口を通り、げた箱から上履きを取り出そうとしている時だ。

当一の真横にシェールが飛び降りてきた。

カン！

当一がシェールの方を向くよりも早く、金属と金属がぶつかるするどい音が周囲に響く。

叩き飛ばされたナイフが当一の目と鼻の先の場所に刺さり、それで初めてあの魔術師がナイフを投げてきたのだと分かった。

ナイフを叩き落したシェールは、魔術師に向けて一気に間合いを詰めていった。

シェールの袈裟切りを、体を傾けて紙一重でかわす魔術師。

その様子は、映画のシーンのように鮮やかで、この世で起こった事ではないような感覚を覚える姿だった。

魔術師はバックステップで距離を取る。それを、シェールはトゥプステップで追っていく。

シェールの攻撃を、魔術師は杖で受け止めたり、ぎりぎりでかわしたりしながら、しのいでいた。

二人は無言で身を絞るような戦闘をする。

魔術師は、シェールから逃げながら、当一の方へと向かってきた。武術には多少の覚えがある当一である。魔術師を倒す絶好の機会であると思った。

拳を握り締め、腰だめにかまえて魔術師まで走りよる。

「バカッ！ やめなさい！」

シエールが言う。

魔術師は当一の方を向き、足を地面にしっかりと付ける。両手で杖を持って当一に向けて突き出し、当一の腹にめり込ませた。

「そいつは杖術を使えるのよ！」

シエールが言う。だが、もう遅かった。魔術師は次の攻撃に移り始める。

当一は、腹を殴られて体をくの字に曲げる。そこに、魔術師は脳天に杖を振り下ろすためにマジックワンドを振り上げた。

天井に向けて大きく振り上げられた杖は、シエールが剣で叩き飛ばす。

魔術師はそれから杖を拾い、学校の入り口から外へと消えていった。

腹を殴られ、痛みでうずくまっている当一。それを呆れた視線で見下ろすシエールは言った。

「あんたなんか太刀打ちできる相手じゃないの。鍛え方が違うんだから」

当一は、シエールの事を助けるつもりで魔術師に食って掛かった。だが、まったく太刀打ちできない。

シエールは一睡もせずに、当一の事を守っている。だが、そんな事は無駄な行為であると思った。そこまでして無理をする事はないと思った。シエールにどこかで腰を落着けて休んでもらおうと思った。

だが、そのシエールの助けが無かったら自分は今死んでいただろう。

当一は、自分の考えの浅はかさ、そして自分のふがいなさに唇をかんだ。

「まあ、これで貸し一つになるわね」

シエールは、当一の事を見下ろしながら言う。顔には何も表情は無い。当一はこれだけ悔しがっているというのに、まったくそれを

気にとめていないのだ。

「これに懲りたら、素直に私の言う事をちゃんと聞いて。いいわね」
騒ぎを聞きつけたのだらう。何人かの人が走ってくる足音が聞こえてくる。

シエールは人に姿を見られないように、その場から去っていった。

放課後になり、この学校の武道場では剣道部の練習が始まる。

竹刀を振って練習をしている剣道部の部員達とは離れたところに、当一と一美の特訓スペースを作られていた。

一美の言った言葉ははったりではなかった。

今までの練習が手加減のされたものだと思ひ知らされた後、いつも以上に体を打たれまくり、走らされた当一は、ぐったりして武道場の床に倒れた。

「すこしきつすぎたか？」

一美の言葉に、当一は一言も返す事ができなかった。疲れで頭が回らなかったし、口を開くのも面倒なくらいに体が疲れていたのだ。その当一の額に、濡れたタオルが当てられた。

袴をまくって足にもかけられたし、散々に一美が打ち込んだ腕にも濡れたタオルが当てられた。

「ぬるくなったら言ってくれ。取り替えるから」

「ありがとう。一美」

「いやっ……礼を言う事じゃない！ 運動をした後には体を冷やしておかないと……」

額に当てられたタオルは目まで覆っているので、一美の顔を見る事が当一にはできなかったが、一味ははずかしそうにして顔を赤らめていた。

その一美は言う。

「お前が私に頼み事をしてくれるっていうのは嬉しいな。お前が私の事を必要としてくれてるっていうのが、なんか心地よい」

「大げさだぞ」

一美の、取り方によれば愛の告白とも取れる言葉に、当一はそうやって返した。

一美は一体どのような気持ちでそう言ったのだろうか？ 当一に自分の気持ちを気付いてほしくて言ったのかもしれない。だが一美は、当一の無粋な返事に笑顔で返した。

「そうかもな」

いつもは凜とした彼女の見せる、はにかんだ笑顔は、それを向けた当人にはタオルが邪魔をして届かない。

昔の友人 2

学校から帰ると、シエールが部屋で待ちかまえていた。気合の入った様子で部屋に入った当一を睨みつける姿から、今日もレイグネンに行くのだろうと推測できる。

「準備はできているぞ」

当一は、自分で買った竹刀を持ってそう言った。

今こそ一美の特訓の成果が試される時だ。そう思った当一は、がらにもなく気合の入った顔をしていた。

だが、シエールはそれに眉根を寄せた。そして、当一の持つ竹刀を指差して言う。

「それは何？」

「今日も戦う事になるんだろう？ だから武器を持ってきた」

眉根を寄せたままのシエールは言う。

「それ、どこかに置いてきて」

「何でだよ！」

「ジェズルの役割は逃げ回る事よ。そんなもの、逃げる事の邪魔になるだけじゃない」

「そんな事はない！ 今日だって特訓をしてきたんだ！ 絶対に役に立ってみせる！」

「あなた達のやっていた、『子供のお遊び』は私も見ていたわ。あんな特訓じゃものの役にも立たないのよ」

シエールはそう言うのと、腰の剣を一瞬で抜き、竹刀に向けて剣を振った。

シエールの一撃は、竹刀を叩き割るためのものだったのだろう。剣線が当一の持った竹刀に一直線に向かっていた。

だが当一はそれに反応して竹刀を使ってシエールの剣を受け止めた。

シエールの攻撃をそのまま受けたら、竹刀は砕けていた。だが、

剣に熟達した者が体で覚えている場所である、竹刀の強い部分の、根元の部分で攻撃を受ける事でシェールの攻撃を防いだのであった。「役に立っただろう？」

当一は自信に満ちた笑みを浮かべてシェールに言った。

「一回受ける事ができただけじゃない」

シェールは無然としてそう言ったが、第二撃が飛んでくる様子は無い。口にはしないが、これで、竹刀を持っていく許可が出たのだろう。

「それじゃあ行くわよ」

シェールが指を鳴らすと、部屋の床に魔法陣が現れた。

二人は、その魔法陣に飲み込まれていく。

二人が降り立ったのは、昨日戦った街道であつた。

「今度は目を回さないで来れたわね」

鼻で笑いながら当一に向けてシェールは語りかけた。

「馬鹿にするんじゃない」

二人の間には険悪な雰囲気がある。

だが、その事を本人達は感じているものの、その空気を取り払おうと考えていない。

二人とも相手に、敵意に似た視線を向け合いながらの会話をする。

「この辺に敵はいないわね。町の方に行きましょう」

「町にいると人ごみにまぎれる事になるだろう？ 人ごみに隠れて敵が攻撃をしてくる可能性があるんじゃないか？」

「あなたの役目は『逃げ回る事』だっていうのは教えたでしょう？

何をどうするかは、私が全部決めるわ」

そう言い、シェールは当一に『ついて来て』と言って遠くに見える町に向けて歩いていった。

町は昔のヨーロッパの風景に似ているだろう。だが、建物の形に似通った所はあるものの、建物の材質が、当一でも見た事の無い光

を反射するものであった。

それに、少数であるが、丸い形をしたドーム型の建物も存在し、それにいたっては完全に未来の建物のものである。

病院の床のような無機質な光を反射する建物の数々は、中世ヨーロッパ的な印象を付けると共に、近未来的なイメージもあるように見えた。

今、当一達が歩いているのは、多くの露店の並ぶ商店街の通りである。

ゴザをひいて、その上に並べられている露天があれば、屋台のようなものも引いてきて、その上に商品を並べているものもある。

そこに売られている野菜や果物も当一の世界に似たものがあるのと同時に、この世界でしか見たことのないものもあった。

硬い殻の中に、ザクロのように小さな実が詰まっている果物。中に入っている実はみずみずしく、一粒一粒がマスカットの皮を剥かれたもののように緑色に光っていた。

それを見ると、当一は自分がまったく別の世界にいるという事を痛感させられる。

「町にきた目的は？」

当一は、シエールに聞く。ぶっきらぼうで露骨に嫌な感情の込められた言い方で言った。

「敵を探す。いなければ次の町よ」

シエールも当一に合わせるようにぶっきらぼうに返事を返した。

シエールは人の多く集まる所に来て、敵を探しているのだ。見つからなければ次の町。これを繰り返すつもりらしい。

シエールは宿をとり、当一はそこでシエールが帰ってくるまで待っているように言われた。

当一も、さすがに歩き疲れていたためシエールのとった宿でおとなしくしている事にした。

その宿とは、中が小奇麗になつてはいるが、内装は木の板を張つて作られた壁一枚でできており、隙間から隣の部屋の様子が窺えるようになってすらいる。この世界の、壁の薄い安宿のようなものであろう。当一は、椅子が一つも無いその部屋で窓の近くに置いてあるベッドに腰掛けていた。

当一は、宿から出て行くシエールを部屋の窓から見送った。

「あいつは俺の事をどう思っているんだろう……？」

シエールは、当一の事をどう思っているのだろうか？ 『あなたの役目は逃げ回る事』この言葉から、彼女は当一と一緒に戦う事を望んでいるようには聞こえない。

なら、何であろうか？ ジェズルというのは、『権杖』の事らしい。権力を持つ事を象徴する道具であり、これが折られれば負けるのだ。

「折られなければそれでいい……くらいかな」

当一の事を足枷のように思っているのだろう。

彼女にとっては、自分はいてもいなくてもいい存在なのだろう。

当一はただのジェズルであればいい。仮にジェズルになった人間が当一でなかったとしても、ジェズルに対する態度は変わらない。

当一は、彼女の事を止めるためにこの戦いに参加した。シエールがあの子にやったような事がそこらじゅうで繰り返されているのだ。当一はそれを止めたかった。

だが、その目的を達する前に足踏みをしているような気がする。

どうすれば、彼女は自分を仲間として見てくれるだろうか？

「強くなる……」

当一はひざの上に置いてある竹刀を強く握り締めて言った。自分が強くなれば、シエールは当一が自分と同列の人間であると考えるだろう。そうすれば、当一の言う事を、シエールも聞くかもしれない。

今の当一にはそれくらいの事しか思い浮かばない。

トン トン……

そこに、宿のドアを叩く音が聞こえた。

「誰ですか？」

当一はドアの向かいにいる人間の耳に聞こえるように大きな声でそう聞いた。

シエールに言われている。ドアを不用意に開けてはならないと。もしかしたら敵の刺客かもしれないからと……

「私は魔法屋です。王権争いに参加されているジェズルの方とお見受けします。この世界にやって来たばかりの人には魔法は珍しいでしょう？　せつかくこの世界にやって来たのだから、記念に魔法の一つでも買っけていきませんか？」

魔法……当一にとっては渡りに船のような話だ。魔法といえば、火の玉をだしたり、氷の刃を出したりする事のできるものである。それがあれば、一足飛びで強くなる事ができるだろう。

当一は何の疑いも無しに、そのドアを開けた。

人がほとんど通らない大通りから外れた道を選んで通っているため、道は暗いし幅も狭い。魔法の技術で作られた素材で作られた建物の壁は、日の当たらず、掃除もろくにされない路地裏の壁であるにもかかわらず、変わらぬ光沢を持ったままである。

だが、人というのはどの世界でも変わらないもの。壁は綺麗でも、石畳を敷かれている地面には、乾いてカラカラになった果物の皮や、空のビンなどが散乱している。

当一の世界と同じように、汚い裏路地の道そのものの姿だ。

シエールは敵のジェズルの反応を追っていた。

ジェズルの反応は、参加者同士なら感じあう事が出来るようになっている。参加者には、他の参加者のジェズルの場所が、大体分かるようになっていてる。

「また消えた……」

シエールにはこの町のどこかに敵のジェズルがいる事が分かっている。だが、そのジェズルの反応が付いたり消えたり、明滅を繰り返

返しているため、詳しい位置までは絞り込めないでいたのだ。

「魔法を使つてかく乱でもしているのかな……」

魔法使いタイプの参加者であれば、それくらいの事はできる。参加者は、色々な武術を学んでいる者が参加しているのだ。シエールは剣術を学んでいるし、弓術を使うほかの参加者も知っている。今回の相手は魔術を使うのだろう。

だが、隠しているようで完全に隠れていない。とうてい、強い力を持った者の隠し方であるとは思えない。

今回の戦いは、先のデীরリアとの戦いに似たような戦いになるだろうと思われる。自分が未熟な相手を狩る、一方的な戦いだ。

それでは、あのジェズルがまた何かを言い出すかもしれない。

当一はこの戦いがどんなものを分かっている。このような事はそこらじゅうで行われているのだ。当一がぐだぐだ言い出すのに、いちいちかまってもいられないのである。

歩いていたシエールは背後に気配を感じ、足を止めた。

シエールは後ろを振り返り、剣を、自分の後ろを歩く人影に向けてかまえた。

「まったく……隙がないわね。そういう所は相変わらずじゃない」

その人影であるリーシアは、フードを外して不敵な笑みをシエールに向けた。

「なんで、あんたがここにいるのよ？」

シエールがリーシアに質問をするのを、リーシアはくすくす笑って聞いた。不敵な笑い方である。

シエールは考える。

あのジェズルの反応は、リーシアのジェズルのものだというのは間違いが無いだろう。他のジェズルの反応は無い。

だが、なぜここにリーシアがいるのだろうか？ ジェズルを一人にしてしまうと、危険であるため、基本的に候補者はジェズルと行動を共にする。シエールはリーシアがジェズルと共にいるものだと考えていたのだ。

「宿屋に用があつてね。その帰りよ」

「宿屋……あんたっ！」

シエールが顔を強張らせて叫ぶのを見て、面白い物を見たかのように顔をにやつかせたリーシアが、すぐ隣の建物の屋根を見上げた。「あいつ……ドアを開けるなと言ったのに……」

その建物の屋根には、リーシアの使い魔である大鷲が、当一の事をくわえているところがあつた。当一は、薬か魔法で眠らされているのか、ぐったりとして動かない状態だ。

「町の西側に行くに見える、あの高台がいいわね。そこで、明日の正午あたりに待ち合わせをしましょう？」

リーシアは一言も言わないが、これは決闘の申し込みである。シエールはそれを聞いて頷いた。

「セイフティリングは破壊しないの？」

そして、リーシアに質問をする。リーシアはまた不敵にくすくすと笑った。

「私がこんな事をする理由は、あなただって分かっているんじゃないの？」

リーシアは魔法で背中に羽を作って空へと飛んでいった。そして、当一の事を抱えて飛んでいく。リーシアの使い魔も、それを追って飛んでいく。

唇を噛み締めながら宿屋に帰ったシエールは、鎧を脱ぎ捨ててシヤワーを浴びに宿の風呂場に行った。

頭の中は過去の苦い思い出でいっぱいになり、ぐちゃぐちゃだ。それに今回の失敗の反省もある。

今回、リーシアに当一がさらわれたのは、彼女の策にはまったからだ。

リーシアは、わざとジェズルの反応をさらけだしていた。隠すような素振りをしていたのは、おそらくシエールがジェズルの所に向かうのに時間がかかるようにだろう。

これは、シェールの事をさそっていたのだ。それに、のこのこと乗っていった自分は、当一が邪魔になるなどと、余計な事を考えて彼を宿屋に残した。

敵のジェズルの反応を見る事ができるのは自分だけではない。相手も同様である。そして、自分のジェズルの反応を、自分で感じる事もできない。

ジェズルに危険が迫っても、自分では分からないのだ。

リーシアは自分のジェズルを遠いところに置き、単独で行動を取ってガラ空きの当一を狙ったのだ。当一を自分から離してしまったのは、完全に自分のミスである。そんな事をする必要は無かった。当一も連れて、ジェズルの反応の所へ行けばよかったのだ。

「リーシア……まだ私の事を恨んでいるの……？」

そして、次に頭の中を巡ったのは、幼馴染であったリーシアとの確執の原因である。あれは、自分が悪い事ではないとシェールは考える。だが、リーシアにとっては違うのであろう。

リーシアが自分の事を憎む理由が、シェールには理解ができなかった。あれは、どちらかといえば、リーシアに非があるとすら、シェールは思っている。

水を弾くシェールの肌が温まった事を感じると、宿屋に備え付けられている寝巻きを着て、心労からくる疲れで体をふらふらさせているシェールは、粗末なつくりであるが、しっかりと手入れをされているベッドに潜っていた。

布団を被ったシェールは、唇を噛み締めながらベッドに溺れていく。

昔の友人 3

「大したおもてなしもできなくて悪いわね」

リーシアは、捕らえた当一の前に顔を出した。ここは洞窟の中ようだ。当一は縄で縛られた体をよじったが、それで縄が解ける様子は無い。光源は火の付いたロウソクを取り付けられた燭台一つである。

「何か欲しいものがあつたらいつでも言つてちょうだい。あんまり大したものはそろえていないけどね」

そう言つて、リーシアは当一の前から姿を消そうとした。だが、当一はそれ呼び止める。

「なんでこんな事をするんだ？ ジェズルを倒せばそれで勝ちなんじゃないのか？」

この戦いは当一のセイフティリングを壊せば勝ちになる戦いだ。当一を捕らえてシェールを待ち伏せる必要なんて無いはずである。

「ただ勝つだけじゃだめなのよ。それじゃあ心が晴れないの」

リーシアは不敵な笑みを、憎悪を浮かべた恐ろしい笑顔に変えた。「私とあの子の間に、なにがあつたのかを聞いているって事かしら？」

リーシアとシェールの間に深い確執がある。当一はそれを知りたいと思つた。

こうして無様にも敵に捕まつてしまった身であるが、自分は彼女の仲間である。彼女の過去を知りたいと思つのも当然であろう。

当一が頷くと、リーシアは話し始める。

「明日からはレイグネンに来れないのだからね。土産話にでもしてくれば嬉しいわ」

私、リーシア・ドーラーの運命はその瞬間からねじれてしまった。

それを見てしまったのは不幸だったのかもしれない。

三年前、私は幼馴染のシエールと一緒に自分の師匠の決闘を物陰から盗み見ていた。

「スターク師匠。がんばってください」

私の横には目を輝かせて自分の剣術の師の勇姿を見るシエールの姿があった。そして、私もシエールと同じような目をして自分の師を見つめていただろう。

二人の師匠がいるのは、町の外れにある高台である。高台の様子を、少しはなれた場所にある林から、木々の間に隠れ、魔法の望遠鏡を使った私とシエールが見ていたのだ。

お互いの師は、若い頃に冒険を共にした仲なのだという。剣士のスタークと魔術師のレーズと言えば、少しは知られる名であったようだ。壮年となり、冒険者を引退した後、三年後に王の候補者になる事をすでに運命付けられた私達に、武術を教えてくれているのだ。自分達の目の前に浮かぶ、化粧台の鏡ほどのサイズの映像の中にスタークとレーズが堂々とした姿を見せている。

決闘は二対二で戦うはずだった。

だが、対戦相手は手下と見える男を何十人も連れて現れてきたのだ。

それから行われた戦いは決闘などと呼べるようなものではない。何十人も人間で、師匠たちを囲い込んでのリンチである。私とシエールの二人は、その様を呆然として見ている事しかできなかった。

町に帰ると、見た事をあらいざらいに話した。自分の親から始まり、友人知人から、裁判所にも届けを出した。だが、私達の主張は受け入れられなかった。

『リーシア・ドローラー並びにシエール・グスタークは、今回決闘で亡くなった二人と師弟関係にあるため、剣士スタークと魔術師レーズの事を弁護するために嘘を言っている可能性がある。』

対戦相手であるゼル並びにヴィッツの証言から、二人が決闘の場

に居なかったことが証明されている。それに対して、魔法の望遠鏡で見ていたという事であるが、それを証明する手立ては無い」

裁判所の決定はこの通りである。証拠不十分で釈放というやつだ。師匠を殺したゼルとヴィッツの二人が、したり顔で元の生活に戻っていくのを、私はシエールと共に苦々しい顔で見送った。

それから私はあまり外に出なくなった。敬愛していた師匠があんな不当な殺され方をして、それで自分は何もできなかった。シエールとも会わなくなった。二人が会うのは、いままでは合同練習をする時が多かった。二人の師匠が顔なじみだという事から合同練習を繰り返していたのだ。

それがなくなってから会う機会が一気に減ってしまったのである。シエールはどうしているだろうか？ 自分と同じようにふさぎこんだままなのだろうか？ 自分と同じ境遇になった彼女の事を心配する気持ちが生まれるものの、体に力が入らず指一本動かすのも面倒であった。

自分がどんどん泥沼の中に沈んでいくような感覚である。深く深く沈みこんでしまうほど、この泥沼から抜け出す事は不可能であるのは分かっている。だが、気力が湧かず力が出ない。

それが何日もの間続き、これではいけないと思った親が、暇を見て私を外に連れ出すようになった。

そして、また私の運命がねじれる瞬間がやってくる。

そこは、とある貴族の荘園の一つ。観光を生業にしているところのため、人が多いものの、まったく閉塞感を感じない気持ちのいい場所だ。

遠くでは牛を飼っている牧場が見え、ここから見える繁華街にはその牧場の牛から搾ったミルクが売られている。

今私が居るのは、中心に噴水の設置されている、整地をされた公園である。だが、公園の真ん中の方に行く気は起きず、隅の目立た

ないところに置いてあるベンチを見つけて、そこで空を見上げていた。

そこにあの男がやってきた。

「お嬢さん。隣をよろしいかな？」

憎たらしく爽やかな笑顔を向けてやってきたその男は、師匠を殺した男の片割れのヴィッツであった。

私は突然の事に驚いて声をあげられなかった。その間にも、私の了承を得ずにベンチの隣に座ったヴィッツは続けてくる。

「このたびは、僕が君の次の師になる事が決まった」

それを聞いて、私は足元が崩れるような絶望感に襲われた。だが、喉は張り付き、腕にも力が入らない。気力が起きず次にどうすればいいのかも考えるのも面倒だ。

だた、胸に嫌な感覚がふつふつと浮かぶだけである。

だが、ヴィッツの目に見える反応はしなかった。

ヴィッツは話続ける。反応の無い私に、さらに問いかけるようにして言葉を続けた。

「王の候補者の師となると、いくつも役得がある。候補者の親はもちろんそれなりに身分の高い人間だ。そんな人たちとお近づきになる機会にも見舞われる。

もし、君が王の資格を得るような事になったら、王を育て上げた人間っていう称号だって得る事ができる。

君らのような候補者達の指導者ってのは、それだけ美味しい位置なんだよ。

『あんな事』は水面下で行われている策謀の一つにすぎないんだ。君の前の師だったレースだって、どうやって君の師の位置に座ったかなんていうのも、分かったもんじやない。

それに君だって、三年後には否応無しに戦う事になるんだ。いつまでも又ケガラのようにしているわけにもいかないっていうのも分かるだろう？ 今から強くなっておかなくちゃいけないし、そのためには指導者が必要だ」

ヴィッツが言っているのはヴィッツ自身の本音だ。私の父親は現在の王の従兄弟にあたり、国政でも重要な役割に座っている。私の師になるという事は、その父に近づけるという意味もあり、私が王になれば、周りの人間がヴィッツを色メガネで見る事になる。

そして、そのために彼は私の師であるレーズを、汚い方法を使って殺したのだ。そして、その卑怯な行いを『あんな事』と言い切ったのだ。

「それに、君が嫌だと言っても僕が君の師になる事はもう決定したよ。君の親に取り入って、次の師になる事を決めてもらったからね」そして、ヴィッツはそう言葉を続ける。また何か汚い手でも使つて私の師の位置に立ったのだろう。

私は、胸に居座る悪い虫がはじけ飛ぶような感覚を感じた。その時が私の人生がねじれた瞬間だったのだろう。

逆に胸はすっきりしてきた。その瞬間には、新しい自分に生まれ変わったかのような、新鮮な気持ちすらあった。力が入らなかった手にも、活力が湧いてきた。泥の中で身動きが取れないような拘束感から解放された私は、ヴィッツに向かって笑顔を見せた。

「何を言っているんですか？ 私は嫌なんて一言も言っていないですよ？」

私がそう言った時、ヴィッツは身を引いた。私は笑顔を作ったつもりだったが、ヴィッツは私の表情から何か得体の知れないものでも感じたのだろう。

「ご迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

親から躰けられている物腰の柔らかい礼をして、私はヴィッツにむけて言った。

困惑をした表情をしながらも、ヴィッツはその言葉を受け入れた。

当然の事であるが、私はヴィッツを師と認めて教えを乞うつもりなど毛頭無かった。

隙を見て彼の事を殺すつもりだった。そのために近くに置いてお

くのが一番であると考えたのだ。自分の師としてでもいい。とにかく、自分の目の届く所に置いておきたかったのだ。

何度も、彼の様子をうかがった。彼が隙を見せる瞬間を、獣が獲物に飛び掛る瞬間を狙うように、じっとして待ち続けた。

その一環として、彼の指導が終わった後、様子を窺う事にした。

魔法薬の講義終えたヴィッツに、紅茶を出してみると、ヴィッツはそれに一応口をつけた。

だが、全部を飲み干そうとはしない。少し味を確認しただけであった。

魔法薬といえど、致死量というものがある。少しなめた程度で死に至るような薬は無い。味を確認し、舌を湿らせて毒が入っているかどうかを確認する。

これは前の私の師であるレーズが、私に教えたことだ。

ヴィッツは自分に対して不信感を持ち続けているようだ。忍耐強く、そして用心深く、チャンスを待たなければならない。

ヴィッツの指導を受け始めてから一月くらいの時間が経った頃、シエールが私の所に訪ねてきた。

久々にシエールが自分の所にやって来たと聞き、私は久しぶりに再会をできると喜んで、シエールの待つ応接間に行った。

ドアを開けると、私は久しぶりに会う友人に声をかけた。

「シエール……久しぶりね」

感極まった私は、シエールの顔を見ると泣きたくなくなるくらいに嬉しかったが、シエールが私の事を見る目は冷たかった。

当然だが、私はヴィッツの事を殺そうとしている事を誰にも打ち明けてなどはいない。シエールにはそれを打ち明けるつもりだったが、その凍った視線は私の喉から出かかった言葉を喉の途中で止めて、吐き出させてくれなかった。

そして、シエールは口を開いた。

「ヴィッツの師事をつけているそうね……」

シエールは私が師匠を殺したヴィッツの教えを受けているのを知っているようだ。凍った瞳の原因はそれだったのだ。

シエールは、私が自分の師を殺した仇を近くに置いている事が我慢ならないのだろう。その時、私は頭にその事を否定する言葉が浮かんだ。敵討ちのために近くに置いているのだと言おうと思った。だが、少しずつ頭が冷静になっていき、どんどん大きくなっていく冷静な部分がそれを阻んだ。

シエールにもし本当の事を言ったとして、シエールがそれを納得するだろうか？ 彼女は私の行動を卑怯な行動だと思うかもしれない。すでにドロを被っている身である。これ以上汚れて何の問題があるのだろうか？ いままで敵討ちだけを考えてきたのだ。親にも、使用人にも、誰にもこの事は言ってはいない。シエールにだけ教える必要があるのだろうか？

冷たくなっていった私の心は冷静にそう考え、今にもシエールに弁明をしたいという気持ちをどんどん押さえていった。

「師匠がいなくなったのだから、代理はどうしても必要でしょう？」私のその言葉に、シエールは唇を噛んだ。

だが、それ以上私の事を責め立てる気は無いようで、ここに来た用件の事を話し出した。

「私はゼルと決闘をする。あなたにはそれを見ていて欲しいわ」

シエールは師匠達を殺した、もう一人の片割れである、ゼルと決闘をしようというのだ。聞けば、ゼルはシエールの家にシエールの指導者として招き入れられているという。私と同じような状況にあるという事だ。

シエールは私とは違い、ゼルの指南を突っぱね続けているという。『そして、あなたが私に勝ったら、あなたの指南を受けてあげるわ』って言って、決闘をするって言う話に持ち込んでいったのよ。いくら、シエールは前の師の教えを受けているといっても、所詮はまだ訓練生の段階である。冒険者をして名を上げた実績のあるゼルに勝てるとは思えなかった。

「だけど、彼女はこう言った。

「勝てない敵だろうと関係ない。私は私のシュヴァリエにしか従わないの」

私はそう言った彼女から目が離せなかった。

まぶしく見える彼女から、目が離せなかったのだ。

シエールは時間と場所を私に告げたらすぐに帰っていった。

彼女とはつもる話もあったはずである。だが、シエールにとって
は、もうそんなものはどうでもいいのかもしれない。

シエールは口に出して私を責めたりはしないものの、今となって
は、私はシエールの敵の部類の人間なのだろう。寂しい気持ちにな
るが、それはしょうがない事だ。

私には私の戦いがある。そう考える事で、私は自分を納得させた。
陰鬱な気持ちで私は屋敷の廊下を歩く。

そこに声がかけられた。

「リーシア。本人から決闘の話聞いたらしいね」

私を呼び止めたのはヴィッツだった。気分の沈んでいるところに
嫌な奴に声をかけられた。そう思うが、私はそれを顔には出さずに
ヴィッツの言葉に答える。

「はい。そうですが、それがどうしたのでしょうか？」

「どうしたのでしょうか……ね」

これは私にとって小さな出来事であるわけが無い。狙って気にと
めていないように言ったのが、ヴィッツの癪に触ったしかった。

「まあいいさ……ゼルに言われてね。シエールはどんな武術を使う
のか？ 弱点なんかないか？ 君は知らないかい？」

敵情視察だ。シエールの使う剣術、彼女の戦闘スタイル、それら
を私から聞きだすつもりらしい。

私はどう答えるべきか考えた。いくら堕ちたといっても、友人を
売る事などできない。

「剣術の事は、私はさっぱりでしてね……彼女は剣を使って戦う。

それ以外の事は分かりません」

「……前々から思っていたんだがね……君は僕の事をあまりよく思っていないようだね。君の師匠たちを決闘で倒した。それをいまだに不満に思っているのかい？」

私は本音を押し隠して答える。

「レースは弱いから負けた。自分に師事を与えてくださる方は、強い方である方がよろしいに決まっています。レースに勝ったあなたに、何の不満もあるわけがございません」

「それは、僕の事を敬愛してくれているっていう事かい？」

そして、ヴィッツは私の胸をまさぐった。

「僕からもその愛に答えないとね。嬉しいかい？」

まるで、虫が体中を這い回るような不快な感覚を感じた。ヴィッツの手を通して私に嫌なものが送り込まれているように感じる。

その時、私はヴィッツに深い殺意を覚える。だが、すぐに思い直す。殺意を感じているのはいつもの事である。ここは冷静になり、この状況を逆手の取ってやろうと考えた。

「はい。嬉しいです」

そう言って、いまだに私の胸に、蠢くように指を這わせているヴィッツの腕を抱きしめた。

そうすると、ヴィッツは、私の事を、恐ろしいものを見るかのようにした後、私の腕を振り払った。

「まあ、何も分からないというならそれでいいよ」

ヴィッツはそう言って、私の前から立ち去っていく。

昔の友人 4

その直後、私は風呂場に行った。
体が汚れているように感じる。

ヴィッツが触った私の胸に、いまだに虫が這い回っているような感覚が残っていた。何度も石鹸を塗ってこすってもその感覚は消えない。それどころか、その感覚は体全体に浸食をしていくように感じる。

やがて、私はその無駄な行為を止めた。シャワーを頭から浴びながら自分の体が汚れていつている感覚に浸る。

この感覚はずっと消えないだろう。私は、いずれはこの感覚に慣れていくに違いない。

決闘はシエールが勝った。

ぎりぎりの辛勝であり、戦いは常にゼルの優勢で進んでいた。だが、決闘は結果が全てだ。シエールは師匠の敵討ちを果たしたのだ。私は胸のすかない感じでそれを見た。

正直に言つて、シエールが羨ましかった。私には私の敵討ちがある。だが、彼女の表を歩いたまっとうな方法ではない。このように、まっとうな方法で敵討ちを果たした彼女を、私は心の隅では呪ったのだ。

自分には関係ない。私には私の道がある。そう思い、私はその想いを胸にしまった。

虎視眈々と機会を狙い続けるうちに、ヴィッツは紅茶に砂糖を入れる事に気付いた。私はいつも、砂糖は使わない。甘い臭いが紅茶の風味を損ねるのが嫌というのがその理由だ。

私は砂糖の中に白い粉末状の毒を混ぜ、ティータイムの時間を待った。

指導の休憩時間に、使用人の淹れてきた紅茶を二人で飲む。ヴィッツはいつも通りに紅茶に砂糖を入れる。

心臓がバクバクと震える。今まで心待ちにした瞬間がやってきたのだ。シエールはすでに果たした敵討ち。それを実行する時がやってきたのだ。

ヴィッツの動きは普段どおりのものであつたはずだが、それが、やたらと長く感じた。

スプーンを使って紅茶に砂糖を入れる動作。ティーカップを皿ごと持ち上げる動作。口元にカップを持っていく動作。

それらの動作を、視線を自分の紅茶に落としながら横目で見つめた。

計画はあつけなく成功し、ヴィッツは泡を吐いて絶命をした。

突然の事に、その場にいた使用人は慌てふためき、屋敷の人間にこの事を報告した。

私は、その使用人が他の人間にこの事を話すのを止めなかった。知れ渡るのならば知れ渡ればいい。私はこれで目的を果たしたのだ。何も思い残す事はない。

その時。私はこの笑い方を覚えた。見た人間が自分の事を恐ろしがるこの不気味な笑い方を覚えたのだ。

私にどのような罰が下される事になろうとも、それを受けよう。その時はそう考えていた。

それから話は自分の予想通りの方向には向かわなかった。私が犯した罪は秘匿されるように、親が動いたのだ。

私は自室で謹慎を言い渡され、それに素直に従った。それで、外の事情にはうとくなくなった。

自分は一体外ではどのように言われているのだろうか？ そう一瞬思ったが、そんな事はどうでもいいと思い直す。謹慎中は何度もそんな無駄な考えが頭を過ぎったのだ。

数日間自室で謹慎をしていると、父が部屋に入ってきた。

「あの話ともみ消した。お前もあの事は忘れるんだ」

「誰も知らないんですか？ お父様」

「誰も知らないわけではない」

父はそう言い、そそくさと部屋を出て行った。やはり、一部の人間はこの事を知ってしまったようである。シエールも、その一部の人間に入っているだろう。

シエールにはいずれ会う事になる。本来なら私はシエールと顔を合わせたがらないものである。だが、私は狙ってシエールを避けるような事はしなかった。

何を言われてもかまわない。それが本心である

ただ、投げやりな気分になっていただけだ。

その時はすぐにやってきた。貴族の間で行われる、特に中身の無い定例パーティーで顔を合わせる事になったのだ。

シエールは、私の事を見つけると、自分から私のところにやってきた。そして、私に詰め寄ってこういい始めた。

「そんな、こそそした方法しかできなかったの？ それが、あなたにとって最善の方法だったの？ あなたはそれで納得できたの？」

シエールは私の事を責め立てた。私の中に、弱気な心があった。ヴィッツに正面から立ち向かっても勝てないという、思いがあった。その弱気な心が、私をこの卑怯な方法を納得するように後押しをしたのだ。

ゼルに正面から立ち向かって勝ったシエールには、その事が微塵も理解できなかったのだろう。

「あなたには分からないわ……」

「分かりたくも無いわね」

「流石に『そちら側』の人間は言う事が違うわね。私のような、卑しい薄汚れた人間の気持ちなんて、あなたにはどうでもいいのね」
そこまで言うと、シエールは私を刺し貫くような鋭い視線で見るのを止めた。そして、私の事を驚愕しているかのようにであり、そして、恐怖をしているような顔で見つめる。

私はその時、なんとも形容しがたい、恐ろしい笑い方をしていた。私は続けた。

「私のような人間には、こんなやり方しか用意されていないのよ。いくらでも侮蔑すればいいわ。私は汚く汚れているの。あなたのような高潔な道を歩む事はできないのよ」

シエールは高潔な道を歩き、私は汚れた道を歩く。この差には、体の芯に刻み込まれている運命のようなものであると感じた。彼女の芯にある高潔な運命を、私は恨んで憎んだ。

そして、その時始めて、私はシエールの事を粉々に壊してやりたいと、自分が思っている事に気付いたのだ。

「この話をどう受け取るうがあなたの勝手よ。どう思ったところで、何もできないだろうけどね」

坦々とこの話をしたリーシアは、すぐに当一に背を向けた。そして、早足で当一の目の前から去っていく。まるで、逃げるような足取りであった。

「逃げるなよ」

当一に言われて、リーシアはピタリと足を止めた。

「逃げるですって……」

そう言っただけ振り返ったリーシアの顔は、先ほどまでの憎悪を浮かべたままであった。ただ、口元から笑みが消えている。

「逃げるような足取りじゃないか。俺から何か言われるのが怖いのか？」

「遠吠えをしたいなら、好きにしたらいいわ」

「なら、多少うるさくてもかまわないな」

そう言っただけ、リーシアは当一に体を向けた。

「お前はシエールがうらやましいんだ。彼女の持つ力強い心を、お前も欲しいと思っている」

リーシアはそれを黙って聞いていた。憎悪を浮かべた顔を相変わ

らずだ。

「だけど手に入れる事なんて絶対にできない。だからせめて、シェールの心を崩してやりたいと思っている。手に入らないなら壊してしまおうっていうわけだ。醜い嫉妬だな」

当一が言い切ると、リーシアは怒りに任せて床に転がる当一を蹴り飛ばそうとした。だが、セイフティリングのバリアに阻まれてその蹴りは届かなかった。

「凶星をつかれて取り乱すなよ。クールなイメージが台無しだぜ」ニヤリと不敵に笑う当一。

舌打ちをしたリーシアは当一に背を向けた。そして、当一の前から立ち去りながら言う。

「勝てばいいのよ」

「お前はシェールには勝てないさ」

それに対して、皮肉げな当一の返事がかえってきた。

昔の友人 5

ここは高台というよりも、小山と言った方が正しいだろう。三角の形をした土の盛り上がり、木が覆うように茂る。

だが、ここに来る人は多いのか、頂上に向かうために道があり、石が詰まって階段が作られている。

そして、頂上であるここは整地をされていて、整地をしている場所と手付かずの場所が、魔法の材質でできた柵で区切られていた。シエールは決闘の時間通りにその場所にやってきた。

「今のうちに命乞いをしておく？」

シエールが決闘の場にやってきたとき、すでにそこに着いて待っていたリーシアはくすくす笑う。シエールに挑戦的な言葉を投げかけた。

「私は悪には屈しないわ」

この状況では虚勢にしか聞こえない。当一は魔法の球体の中に閉じ込められていた。リーシアの後ろにその姿がある。

「私のスイッチ一つであの球の中に毒ガスが充満するわ。私を怒らせないようにする事ね」

そう言い、リーシアはマジックワンドを振った。スイッチと言っても、魔術的な印を切る事を言うのだろう。

「私の事を倒すために、無関係の人を殺すつもり？」

「無関係とも言えないんじゃないかしら？ 彼はあなたのジェズルなんですよ？」

そう言うてくすくす笑うリーシア。シエールはそれを見て奥歯を噛んだ。

「何をさせようっていうの？」

「あなたの華麗な剣技を、拝見させてもらおうかしら？」

そう言い、リーシアはモンスターを召喚してシエールにけしかけた。

「だああああああ！」

シエールは、その掛け声と共にリーシアの召喚した狼を切り捨てた。

これで、たおしたモンスターは三十を越える数になる。返り血を浴びたシエールは、疲れて顔を青ざめさせながらも、強い意志を見せる表情を崩さなかった。

「次は……どうすればいいの……」

肩で息をしながら、シエールは鋭い視線をリーシアに向けながら絶え絶えで言う。

それを見たリーシアの目には、どんどん恨みつらみを宿した暗い眼差しが浮かんでいった。

「シエール……いつまで足掻くつもり？」

聞こえているかどうか分からないシエールに聞く。返事は、すぐに返ってきた。リーシアにとっては最悪の返事だ。

「この命尽き果てるまで」

リーシアはそれを聞いて、奥歯を噛んだ。

このような苦境の中でも、シエールは自分の中にある輝きを絶やさない。陳腐な言葉であるからこそ、それが昔から語り継がれているおとぎ話の伝説の騎士のような高潔な精神を持つ魂の光を表す。

シュヴァリエを掲げるシエールにぴったりの言葉であると思える。それがリーシアには悔しくてならない。シエールが一言でも弱音を吐けば、リーシアは救われる。シエールのシュヴァリエの輝きを持つ精神を、ほんの少しでもいいから曲げてやりたい。そう思って、リーシアは何度もモンスターと戦わせているのだ。

だが、いくら戦ってもシエールは折れない。決して折れない心の芯を持っているのだ。

「やめろよ……」

当一の口から言葉がこぼれた。

「もう止めてやれよ！ もう分かっただろう！ 何があるうと、シ

エールには勝てないんだ！ もう諦める！」

「諦めるですって……」

リーシアは当一の方を見た。顔には今までで一番深い憎悪が刻まれていた。今のリーシアは、絶望感にさいなまれているのだろう。何をやっても、自分はシエールには勝てない。戦いを挑んでも、自分が汚れるだけで、いまだに高潔な彼女の芯には傷一つ付ける事ができていない。

だからこそ、心に溜まったネバネバしたヘドロのような復讐心は消えない。

「私の執念深さをなめないで。三十回やっても無理なら四十回続けるだけよ。泥を被っても無理なら、ヘドロでも汚泥でも被ってやるわ。でなければ、今まで体が腐るまでドロの中に浸り続けた意味がないのよ！」

そう言い、次の狼を召喚した。それをシエールにけしかける。

「分からず屋が！」

当一が叫ぶ。だがそんなものには何の意味も無かった。

シエールはその狼と戦闘を開始した。それを見た当一は、シエールの痛々しい姿を見せつけられるのが我慢ならなかった。いてもたってもいられなくなった。

当一は球の中で暴れ出した。

球の中から、殴って球を割ろうとする。それを横目で見ていたりシアは、すぐにシエールと狼の戦いに目を戻した。

あの魔法の球は、人の力で割れるようなものではない。いくらでも暴れるといい。そう思っていた。

「リーシア……お前はシエールには勝てない。俺にも勝てないようじゃ無理に決まってるよな」

その言葉を聞いて、当一の方を見たリーシアは、球に亀裂ができているのを見た。

その亀裂を広げるために、当一が正拳突きを放っていた。これは、一美に教わった事の一つだ。正拳突きの練習を、腕が上がらなくな

るまでやらされていた。右を打ったら左を打つ。この繰り返しである。

この繰り返しだが、リーシアの作った魔法の球に亀裂を作っていたのだ。

「余計な事を……」

リーシアがマジックワンドを使って印を切った。そうすると、当一の足元から黒い煙が上がってきた。これがリーシアの言っていた毒ガスであろう。吸うと喉が焼けるように痛くなり、煙に触れた皮膚も燃えるように熱くなる。だが、一呼吸で死にいたるようなものではないようである。当一は、喉の痛みも気にせず大きく息を吸い込んだ。

「はあっ！」

気合と共に放たれた当一の正拳が、リーシアの作った魔法の球の中から叩き割った。

それと共に、狼を叩き伏せたシェールは、当一に向けてあるものを投げつけた。

「ものの役に立つところを見せてみなさい！」

それは、当一が宿屋に置きっぱなしにしていた竹刀であった。腰に釣っていた鞘と一緒に持っていたのだ。

それを受け取った当一は、リーシアに向けて、竹刀をかまえた。

「形勢逆転だな」

当一は、リーシアに向けてそう言った。当一とシェールに挟まれる形になったリーシアは、交互にシェールと当一を見た。

リーシアは顔に貼り付けていた不敵な笑みを消していた。

「……悪いんだけどやっぱり当一は下がってくれる？」

シェールが不意にそう言った。リーシアを二人で挟んだ状態で、二人は会話を続ける。

「まだ俺が足手まといだつていうのか？」

「そんな事を言うつもりはないわ。だけど、リーシアは私の敵だから」

シエールは一人で戦いたいのだ。元は親友であり、今は敵として自分の前に立ちふさがる、深い確執を持つ相手を、自分の手で倒したいのである。

「それもシュヴァリエの精神かしら？ 敵とは一対一で戦わなければならぬの？」

「シュヴァリエなんて関係ないわ。あなたは私が倒さなきゃならぬいの」

満身創痍でシエールはリーシアに剣を向けた。だが、それはリーシアにとって有利な条件だというわけではない。リーシアも、召喚魔法を連続で使って精神力をほとんど使ってしまった。低級魔法を数回使える程度の力しか残っていない。

精神力は、時間があれば少しずつ回復する。時間を与えてはならないと考え、シエールはリーシアに向けて突進をしていた。

その突進に合わせてリーシアが魔法を使った。氷で作られた壁が現れ、シエールとリーシアの間を阻んだ。

だが、シエールは突進の勢いを落とさずに、氷の壁に体当たりをしていった。

氷の壁はシエールの体当たりで粉々に崩れ、リーシアからは、氷の破片と一緒にシエールが飛び出してくる様が確認できた。

シエールは、リーシアに向けて剣を振り上げる。そこで、リーシアは次の魔法を使った。

リーシアが次の魔法を使うと、当一を閉じ込めていたような球がリーシアを包んだ。シエールの斬撃は、その球に阻まれてはね返される。

シエールはかまえを変え、剣を突き出した。

斬撃は、はね返されたが、シエールの突きは球にふかぶかと刺さり、リーシアの顔の真横を通った剣が、リーシアの髪を散らした。

それにもかまわず、リーシアは次の魔法を唱える。

貫通力を持った雷が、真っ直ぐにシエールを襲った。その勢いで、後ろに飛ばされたシエールだが、すぐに立ち上がってリーシアに向

かつて突っ込んだ。

リーシアは使い魔のワシを使って飛び上がっていった。ワシはシエールの剣の届かない高さまで飛び上がり、シエールに背中を見せて、飛び去っていこうとする。

「簡単な魔法なら、私だって使えるのよ！」

シエールは魔法を唱えた。

土がいきなり隆起して、土囊のようになった。これは、最初にリーシアが当一を襲ったときに使った魔法である。

シエールはアースウォールを踏み台にして飛び上がり、逃げるリーシアのワシを剣で叩き落した。

ワシは地面に落下し、リーシアも地面に叩き落された。

そして、叩き落されたリーシアに剣が突きつけられる。

「降参しなさい」

剣を突きつけたシエールが、リーシアにそう宣告した。

リーシアは、自分のジェズルを当一の事を連れ込んだ洞窟に隠れさせていた。リーシアのジェズルは、リーシアが負けた事を知るとセイフティリングを素直に明け渡した。

「これで、私はあなたの言いなりにならなきゃいけなくなったわけね」

リーシアの皮肉とも取れる言葉を、シエールは、無言で聞きながらセイフティリングを握りつぶした。

リーシアのジェズルの体が光に包まれ、当一達の世界へと帰っていった。

リーシアは自分のジェズルが元の世界に帰ったのを見送った後、シエールに向かって聞いた。

「私をどうするつもり？」

シエールは顔をしかめて頭をかいた。

これだけの因縁のある相手である。シエールとしても扱いに困るところであろう。元は親友である。だが、今となっては自分の事を

心から憎んでいる敵だ。

シエールの心境としては、切りたくもあり切りたくもなしといったところだろう。

シエールは一瞬だけ当一に助けを求めるような視線を送った。だが、すぐに目を逸らし自分の弱気を振り払うようにして首を振った。一瞬だが、シエールは当一に助けを求めようとした。当一はそれを感じ、自分が思ったとおりの事を言う。

「リーシアは俺たちと一緒に戦おう」

当一はそう言った。リーシアは呆然とした顔で当一の事を見た。シエールは当一の言葉に異をとねえる。

「あんたっ！ 私たちが今どんな関係なのか少しは分かっているでしょう！」

「幼馴染であり、同じ学び舎で学んだ仲間なんだろう？」

当一は、いたって真面目な顔で言った。確かにそれは事実だが、ここまでの事を知っていてその言葉が出てくるというのは、シエールには嘯いているようにしか聞こえなかった。

リーシアがそこで言う。

「ありがとうございます」

リーシアはシエールの前に進み出て、まるで騎士が王に向けてするようになしてかしくいた。

「私の命をあなた様に捧げますわ。いかようにでもお使い下さい」
シエールは面喰らったようにする。リーシアは、ずっと頭を垂れていた。

昔の友人 6

レイグネンから帰ると、開口一番にシエールが言い出した。

「何があなたに命をささげますよ！ 背中を刺そうとしているだけにしか思えないわ！」

「もう負けた後になってまで、そんな往生際の悪いことをしようとは思わないわ。それに、戦いから身を引くより、自分に勝った相手に従ったほうがいいっていうのが、参加者の基本思想でしょう？」

この戦いは王の座をあらそうためのものだ。

この戦いの優勝者が王になれば、従者だってそれなりの地位につけるといふものである。

自分は資格を失ったのだから、コバンザメのようになっておこぼれに預かるのが一番いいのである。

はたから見れば全うな行動である。リーシアはニコリと笑って言い出した。

「すぐに信じてくれとは言わない。あなたの命令には従うわ。言ってくれば、紅茶でも淹れてきましょうか？」

「あんたは師匠を紅茶で毒殺したでしょう？」

シエールはきびすを返して部屋から出て行った。

「あれは怒ってますよ。良かったのですか？」

リーシアは当一に向けて聞いた。

「いきなりしゃべり方が変わったな」

リーシアは、さっきまでは、汚い言葉こそ使わないが、皮肉と嘲りを常に纏わせるようなしゃべり方をしていたはずだ。

こっちの世界にもどってから、いきなり丁寧な言葉使いになった。「そんな事は大した事ではないでしょうに……」

当一の言葉を聞いて、リーシアは嘆息をしたが、それでもどこか上品な振る舞いである。

リーシアは、ニコリと笑った。憎悪を浮かべたような恐ろしい笑

顔しか見せてこなかった彼女が、そんな笑い方をしているのを見ると、なんだか似合わないような気がしてくる。

「当一様。お怪我を見せてください」

そう言い、リーシアはローブの中から薬とおもしきものを取り出した。

それから当一を椅子に座らせて、当一の患部の様子を見るリーシア。毒を吸った喉の様子を調べ、毒ガスで一番ダメージを受けるだろうと思われる目を診て、体にできた切り傷に薬を塗っていく。

「毒が使えると言う事は、薬が使えるという事でもあります」

そう言い、リーシアは当一の傷に処置を施していった。

「シエールの事をどう思いますか？」

リーシアは当一に聞いてきた。

「真面目くさくて、人の言う事を聞かない奴だな」

「石頭でしょう？」

リーシアは懐かしそうにしながら言い出した。

「昔からそうなのです。だから友達も少なかったですし、しょっちゅう危ない事だつてやっていました……」

『なんか、ほおっておけないのです』そう言いながら、リーシアは持ってきた紅茶をすすった。

「なぜ私を仲間にしようなどと思ったのですか？ 自分で言うものではないと思いますが、私はあなたに対して、手ひどい仕打ちをしたものだと思っていますが？」

リーシアは宿にいる当一に、自分が魔法屋だと偽ってドアを開けさせた。その後、薬を嗅がせて部屋から連れ出した。その後も洞窟の中に縄で縛って転がしておいたのだ。

「そんな事どうでもいいさ」

当一は、リーシアから顔を外した。窓から見える外の様子は、茜色の太陽が町を赤く染めている、夕焼け空の景色である。

リーシアに向けて直接言うのは少しばかり恥ずかしいことである。

顔を直視しながらそれを言う事が嫌だった当一は、鮮やかな赤い景色を見ながら言った。

「お前は、シエールの事が羨ましいんだろう？」

「……そうなのでしょね……」

リーシアは、彼女の曲がらない心と不屈の精神が欲しかった。それさえあれば、ヴィッツを毒殺するなどという方法を使わずに正面からぶつかっていったであろう。

リーシアは、確かに成功した。だが、結果としてこれで良かったのだろうか？　とも思うのだ。負けると分かった上で彼に正面から挑みにかかって、それで、予想通りに負ける事になったほうが、今よりもましな結末であったのではないかと思うのだ。

リーシアは腐ってしまった。はいつくばるようにして生き、殺人の罪という名の汚れを被った。そして、幼馴染のシエールの事を憎み、彼女の心を叩き折る事ばかりを考えたのである。

憧れる人の力になりたい。そして、彼女の事を憎んでしまった罪滅ぼしをしたい。リーシアは心の奥底でそれを望んでいるのかもしれない。当一はそう思った。

それは、リーシア本人でも気付くことのできなかった心の奥底にある気持ちなのかもしれない。もしかしたら、そんな気持ちは無いのかもしれない。だが、当一は信じてあいつたのだ。リーシアは自分を腐っていると云ったが、完全に腐りきっているとも思いたくなかったのだ。

「お前はシエールのために働くのが一番なんじゃないか？」

その言葉は、リーシアに死ぬまで忘れることが出来ないだろうと思うほどの強い衝撃を与えたのだ。

「ありがとうございます……」

リーシアは、外の景色を眺める当一の横顔を見ながら、そう言った。

リーシアは泣き出してしまいそうなくらいに嬉しかった。その時、当一の事を見つめるリーシアの視線は、少しだけ熱を帯びていた。

リーシアは例によって、祥子にこの家で生活をする許可をあつさりともらい、当一とリーシアで一部屋シェールと祥子で同じ部屋で寝る事になった。

「シェールは私の事を信用できないようですね。当然といえば当然ですけど」

リーシアは、寝巻き姿で床に敷いた布団を被って寝ていた。当一はベッドで寝ている。

当一の部屋の天井を見ながら、リーシアは言った。

「あれからずっとあの調子ですね」

シェールは当一ともリーシアとも口をきこうとしない。

「どう思ってる？」

当一はベッドで寝ながら返事を返した。シェールに冷たい態度を取られるのは、彼女にとってこたえるはずであると考えての質問だ。「悲しいと思います。ですが、こうなるのはしょうがないという事だって当然分かっています」

諦めに近い感覚だろう。彼女は、シェールに嫌われるのは当然だと思っている。

「抗うという事を知らないのか？」

彼女は無理な事を無理だとすぐに決め付けてしまうところがある。だから、グイッツに復讐をする時、毒殺を選んだ。シェールと仲を元に戻したいのだというのにそれを諦めてしまい、彼女を憎む事を選んてしまった。

「それが、私が汚れてしまった理由なのでしょう。抗う事をせず、楽な事ばかりを選んで自分を貶め続けてきたのです」

「それが分かっているなら、これからそうすればいいんじゃないか？」

「簡単に言いますね……当一さんは、いままで失敗をした事くらいあるでしょう？ そのたびに反省をして、また失敗をして反省をする。皆、その繰り返しを続けているのではないのではないですか

？」

「確かに……」

「人間はすぐに別の人間には変わりません。自分に嘘をついて生きている人間は、死ぬまで自分に嘘をついて生きていきます。まっすぐに生きている人間は、それを死ぬ瞬間まで貫き通す事でしょう」

「それが抗う事をしないという事なんだが……」

リーシアはそのままシェールに憎まれ口を叩いて生きていくつもりなのだろう。

それが、諦めが良すぎるというのだ。シェールに自分の心をぶつけるべきだと当一は思う。

だが、リーシアには彼女の考え方がある。彼女が選んだ道なのだ。彼女が望んだわけではないが、自分から選んだ道を、簡単に変える事なんてできるわけがないだろう。

それは当一も分かっている。だが、当一は諦めの悪い男だ。何があっても、リーシアの事は沈み込んでいる泥沼から這い出させようと思う。

「自分の体が汚れているって言うてたな」

当一はベッドから起きだした。タンスの中から、自分のジャケットを二つ取り出し、一つをリーシアに寄こす。

布団の上で、上半身だけを起こした状態で、ジャケットを受け取りながら、『これはどういう事ですか？』といった表情で当一を見上げるリーシアに向けて、当一が言った。

「綺麗なものを見れば、体の汚れも取れるんじゃないか？」

当一は、彼女を元気付けるために、あの林道からの景色を見せるつもりなのだ。

当一とリーシアは夜の街を大鷲に乗って飛んでいた。

「歩いていくよりこの方が早いですよ」

大鷲の背中に乗っている当一は、下からリーシアの声が聞こえるのを聞いた。リーシアは大鷲の足を掴んでぶら下がっているのだ。

「俺がそっちに行こうか？ 女の子は背中に乗ってくれりやいいだろっ？」

「この子にぶら下がるのにはコツがいるんです。下手をすると振り落とされますからこのままで」

ここからでも夜景は見える。車のライトや夜でも動いているビルの光が見え、それを見たリーシアはため息を漏らした。

「昼間は味気ない景色に見えましたが、夜になるとこのようになるのですか」

「この綺麗な景色を見るのに、一番のポイントがあるんだ」
「楽しみですね」

大鷲は当一の指示をした場所に向かって行った。

シエールを連れてきた林道に来た二人は、二人で町の景色を眺めた。

「心が洗われるような景色ですね」

「身も心も綺麗になっていくだろう？」

当一は、リーシアに向けてにやりと笑って言った。

リーシアは、それに失笑にも似た含みのある笑みを作って答える。

「一度、体に染み付いた汚れは簡単には落ちませんよ」

リーシアは、頑固にも、自分の汚れは絶対に落ちないと思っているらしい。当一はそれが分かった上で不敵な笑みを浮かべてリーシアの事を見た。

「俺は諦めないぞ」

リーシアが、それを小首をかしげて聞いたのを見て、当一はさらに続けて言った。

「お前は自分が思っているほど汚れてなんかいない。自分が汚れているなんて考えの方が間違っているんだ」

当一は、おもむろにリーシアの手を取った。

「綺麗な手をしているじゃないか。この手のどこが汚れているというんだ？」

そして、当一は、リーシアの手の甲にキスをした。あまりの事にリーシアは顔を赤くする。当一はそれを、にやりと不敵な笑みを浮かべてキスをしながら見上げた。

それから、リーシアは当一の視線から逃げるようにして目を景色のほうに向ける。二人はそれから一言も会話をしなかった。

むしゃくしゃして眠れない。隣で祥子が寝息を立てている部屋。布団から起き上がったシェールは、近くにあった上着を羽織って部屋から出て行った。

シェールが台所に行くと、紅茶が置いてあった。もうすでに冷めてしまい、ぬるくなっている。

それと共に書置きが置いてあるのを見て、シェールは中身を読んだ。みた。

これからよろしくねシェール

私の事を信じてくれなくてもいい

だけど、私はずっとあなたに事を助けていくわ

人間が考えている事なんて一枚岩じゃない

あなたの事を壊そうとした私も私だけど、あなたの事を助けたい
と思っているのも私なの

石頭のあなたには理解できないかしら？

私はあなたのそばにいればそれで満足よ

それだけは伝えておくわ

追伸

当一ってなかなかいい男ね。私が口説いちゃってもいいかしら？

「好きにするといい」

手紙の最後の一文のみに対して答えを言ったシェールは、ティーカップを手にとってリーシアの淹れた紅茶をすすった。

「あいかわらず、これだけは上手い」
石頭のシェールは、書置きを丁寧に折り置んだ。

幕間

戦闘が始まった初日。ラタはジェズルと契約し、早速レイグネンまでやってきて街道を歩いていていた。

目の前に歩く人影を見つける。

「ラタ・ヴェンターです！ 参加者ですね」

宣戦布告のために声をかけたラタ。

「あなたの名前を聞いておきましょう」

ラタは道の先に見える人影に向けて聞いた。ジェズルの反応をたどり、街道で他の候補者を発見したのだ。

「ノエリア・マーファンですわ」

剣を抜いたラタは、剣の切っ先を相手に向けた。

「いきます！」

そう言い、体を前傾にして突撃の体制に入ったところに、ノエリアはいきなりラタに向けてかしずいた。

「負けを認めます！」

ラタは、剣をしまう。

「どういった魂胆ですか？」

距離をとったまま、ラタはノエリアに向けて聞いた。

ノエリアは、元はある参加者の支援をするために法術を学んでいたのだという。

「私は奴隷としてあの家に売られました」

その家ではメイドとして奉公すると同時に、その家の子供をこの戦いでサポートのために法術を学んだのだという。

「ですが、私は彼女のために戦うのというのがどうしてもできませんでした。私には私のやりたい事があったのです」

彼女の主人と、意見の食い違いがあったのだという。

「ですが、私の力は一人で戦うためのものではありません。ですか

ら、誰かに力を貸して、その人に代わりに私の望みを叶えてもらおうと思ったのです」

「私に寄生をするつもりですか？」

「共生です」

ラタがノエリアに向けて言った言葉に対し、ノエリアは強気になつて言い返した。

彼女は、ラタに抗うだけの力は持っていない。ここで、ラタが剣を抜き直してノエリアに攻撃を仕掛けたら成すすべは無いのだ。

強気に出なければ何も得られないのである。

ノエリアは心臓をバクバクと鳴らした。今すぐにも彼女の顔色を伺ってみたいと思う。だが、その態度は弱気な態度に見えてしまっただろう。

かすしいた姿勢のまま、ノエリアは緊張をしながらラタの返事を待った。

「あなたの望みとは何ですか？」

「全ての奴隷の解放と、全ての人の平等です」

ラタはノエリアの言葉を聞いた。ラタの返事は間をおかないですぐに返ってくる。

「私は情には流されません……まずは、あなたの实力を見せてもらいましょう」

ラタは彼女を一つ返事で仲間にする気など無い。

ノエリアは自分との関係を共生であると言った。それが偽りでなければ、ノエリアはそれなりの力を有していなければならない。そうでなければ共生とは言えないのだ。

「何をすればよろしいでしょうか？」

ノエリアは決意を込めた視線をラタに向けた。

それは輝かしいものだ。彼女の意気や、心の強さが伝わってくるようであった。もしかしたら、ラタでなければその目を見るだけで彼女の事を認めたかもしれない。

だが、ラタはそれでは動かない。自分の信念のために、そんなも

のに心を動かされるわけにはいかないのだ。

「あなたも参加者ならば感じるはずです」

ラタが言う。周囲に一つのジェズルの反応が見えた。

「その参加者を倒してください」

「しかし……私の力是一对一に向くものではなく……」

「どうせ、相手は学校出です」

この戦いに向けて、学校が作られている。この戦いの参加者の中でも、多くの者はその学校で腕を磨いてこの戦いに参加しているのだという。

「私達はその学校出よりも何倍も上の英才教育を受けているんです。本当の敵はそういった『本気』で戦いに参加をしている者達です」
だがラタはその学校には通っていない。

家で、何人もの専属の教師を付けられ、学校の人間よりも何倍もの練習を積んでいる。

それについてはシエルやリーシアも同じである。

そして、参加者の隣に立って一緒に戦うために教育を受けてきたノエリアも同様だろう。

「法術が戦闘に向かないのは百の承知です。ですが、それでもある程度の力を持っていなければ私も認めません」

ラタがノエリアに宣告をした。ノエリアは固唾を飲む。

ラタは街に向かっていった。それに続いてノエリアも行く。

ノエリアは、参加者がどのような敵かを想像した。街の中の反応はジェズルのものである。参加者の事など分かりはしない。

「すぐに力を見せてみせますわ」

ラタにそう言った。ラタはノエリアの事を一度振り向いて頷いた。ノエリアは、今すぐにでも敵と戦うつもりでいる。だが、ラタの向かう先がジェズルの方向とは少しずれていた。

それを疑問に感じながらも、何の説明もなしに足を進めるラタに

ついていく。そうすると、ラタはレストランに入っていった。

「あの……すぐに敵と戦うのではないのですか？」

「腹が減っては戦はできません」

ノエリアに、戦いの前の腹ごしらえをさせようというのだろう。

「好きな物を頼んでください。お金は私が払います」

一つのテーブル席に二人で座った後、ラタはノエリアにメニューを渡し、ノエリアの様子をうかがった。

（これもテストのうちでございますか……）

ノエリアは固唾を飲む。

実際の戦いを行う前にノエリアの食べるものを確認しようというのだろう。

ある程度、戦いに必要な栄養素というのは決まっている。

「チキンライスとコーヒーを……」

ノエリアは店員にそう頼む。

戦いにスタミナをつける時には炭水化物。頭を働かせるための糖分にカフェインである。

ノエリアはそう考えてこの二つを注文した。

これは果たして正解なのだろうか？ ノエリアはラタの様子を見た。

ラタの様子は変わらない。

（大変な人を選んでしまったかもしれせんわ……）

ノエリアはピリピリした空気を感ずる。ラタの無言のテストは宣言もなしに始められた。

だが、戦いに身をおくというのはこういう事なのかもしれない。いつ敵に襲われるか分からない。どういう方法で襲ってくるかも分からない。

ノエリアは戦いに参加して初めてこの戦いの厳しさを知った。テストという形で自分に牙をむいたラタが、冷たい目で見つめている。コーヒーがノエリアの前に出された。

調味料の中にある砂糖をいつも自分が使う量と比べて多めに入れた。

まったく味を感じないコーヒーが喉を通る。

熱いコーヒーを何度にも分けて飲むのを、ラタはずっと冷たい視線で見ている。

少し経ってからチキンライスが目の前に出される。

このチキンライスも、まったく味を感じる事ができなかった。

「すみませんね。いくらなんでもこちらも生意気な事をしましたか」

ノエリアが全て食べ終えレストランから出ると、ラタが言った。

「チキンライスで炭水化物を摂り、コーヒーでカフェインを摂る。

基礎知識は十分あるようです」

ノエリアは小さく息を吐いた。ラタに気付かれてはならないと思って小さくしたのだが、これは安堵のため息である。

ラタの言いようでは、基礎知識のテストは合格という事だろう。

あの家では、戦いに必要な基礎知識は教師に叩き込まれた。

無理矢理覚えさせられた知識であるが、今ばかりは、それに感謝をしなければならぬ。

「それでは、すぐに戦いにいきますか？」

ラタはノエリアに聞いた。

「一時間くらい後にしますわ」

これも、あの家で教わったことだ。食後にすぐに運動をしても、消化不良を起こしてしまって体に悪い。大体一時間経ってから動くのがいい。

その後、ジエズルを抱えた参加者を見つけ、一緒に街の外に出た。今は、その女の子とノエリアが戦闘の方向に向かい合っている状態だ。

城壁で囲まれた街から出て、街道から少し外れた場所にいる。足元には枯れ草と落ち葉が敷き詰められている。

街の北側であるここは、日当たりが悪く足元がしけっていて、少し歩けば広葉樹の森も見える。すぐ横に高い城壁がそびえ立っていた。

「メイディーさんでございますね」

相手の参加者は女の子だった。顔には見覚えがあり、名前も覚えていた。

「何で……どこで知ったの？」

「学校に通ってれば、成績の記録が残ります。その記録は私達『貴族出』の人間に閲覧をされます」

驚いて聞いてきたメイディーに、近くにあった苔がびつしりと生えている岩に座ったラタは無表情で答えた。

「これだから『貴族』は……」

歯をかみ締めるメイディー。

『貴族出』で学校に通っているのはシエールくらいだった。自分の師匠の師事をつっぱね、自分から学校に入ってしまったのだ。

シエールははずば抜けた成績を残して卒業をしていた。それが、いかに英才教育を受けた人間とそうでない人間の差であるのか、見本ともいえるだろう。

「戦ってください」

ラタは言う。唇をかみ締めたメイディーはノエリアに向かっていった。

エンジェルスピア

ノエリアは魔法を使う。

剣を使って戦うメイディーは、空から降り落ちてくる光の矢を叩き落すために剣を振った。

メイディーの足が滑った。剣の軌道は逸れ、エンジェルスピアはメイディーに命中する。

「ここに誘い込まれたのが分かったでしょう。足元が濡れた落ち葉

で敷き詰められていて不安定。魔法で遠巻きに攻撃を続けられますよ」

ラタがメイディーに向けて言う。

「本当に『貴族』っていうのは卑怯ね！ シェールだって……」

「勝つために最大限の努力をしているだけです。この知識も、力も、その努力あつてのもの」

メイディーの言葉をラタが止める。メイディーに次の光の矢が向かっていった。

「十分な力を持っていますね」

メイディーを倒し、メイディーの連れていたジェズルのセイフテリングを破壊したラタは、ノエリアに向けて言う。

「これからもよろしく願います」

ラタは、ノエリアに向けて、手を差し出した。

エスカッション

壁の材質を見ると、そこそこ高級な宿であるようだ。白い壁はきれいに掃除をされている。新品のように白いシーツの敷かれたベッドが二つ置いてある場所である。

「ラタ様。何なりとご命令をお申し付け下さい」

そう言ったのは、ノエリアという名の褐色の肌を持つ銀色の髪をしているメイド服を着た少女だ。王に謁見をするかのように、膝を突いて自分がラタと呼んだ少女にかしずいていた。

「遠くに二つの反応があり、うち一つが消えました。それを次の相手とします」

抑揚の無い声で言ったのは、がちがちの重鎧を着た少女である。

ヘルムは外しているため、黒い前髪を切りそろえており、艶やかな長い髪を鎧の上にたらしめている姿が見える。

「新しいが入ってくるって事か？」

そこに、男がドアを開けて入ってきた。いやらしい笑みを浮かべた男である。ラタが表情を変えずに男に声をかけた。

「秋成。勝手に入ってこないで下さい」

秋成と呼ばれた男は鎖を持っていた。それは、女の子を繋ぐ首輪に繋がっている。

これは、珍しい事ではない。この戦いで負ければ、相手の言いなりにならなければならないのだ。このような境遇に陥るものも少ないのだ。

秋成は鎖を引っ張る。そうすると、じゃらりという音がして、女の子が秋成に引き寄せられていく。無遠慮に女の子の肩に腕を回した秋成は、ラタに向けて言った。

「今度はもっと活発な娘がいい。おとなしいのもいいが、少しは張り合いも欲しいからな」

「あなたの趣味など聞いていません」

そう言い、ラタは秋成から顔をそらした。

「あなたの部屋は他に用意したではないですか。早く部屋に戻ってください」

「なんだその言い草は？ 俺はジェズルをやめてやってもいいんだぞ」

「その言葉は聞き飽きました。特権を手放す気が無いのは分かっているんです。そんな脅しをしても、私は動きませんよ」

ラタは、秋成から顔をそらしたままそう会話をした。秋成は舌打ちをしてから女の子の鎖を引いて、部屋に戻っていった。

次の日、レイグネンに着いたシエールとリーシアと当一は、遠くにジェズルの反応があるのを感じ、それを頼って石畳の街道を歩いていた。シエールを先頭にして、後ろにリーシアと当一がついて歩いてくる形で歩いている。

石畳の街道の両脇には背の高い草が生えている。枯れかけて茶色く染まっているその草は、風にたなびいてさわさわと音をたてていた。

いまだにシエールは二人と一言も口をきこうとせず、シエールがリーシアに当一の護衛として近くにいるようにと、指示を出したのが最後である。

向かいから、無造作に人影が現れた。その人影は大柄に見えたが、その原因は全身に着ている分厚い鉄板を繋ぎ合わせたような鎧である。

顔を確認できないくらい遠くで、足を止めたその人影は、シエール達に向けて声を張り上げた。

「ラタ・ヴェンターです！ これよりあなた達のジェズルを狙います！」

「宣戦布告ね！」

シエールはラタの大声に大声で返した。ラタの声は特徴的な声であった。大声を出しているのであるが、どこか平坦で勢いや力を感じ

じる事のできない透明な声である。

その直後にシエール達に向けて突進をしてきた。

その突進は早いとは感じないが、遠くからそれを見るだけで重量感を感じるようなものである。例えるとしたら象の突進のようなものだろう。

シエールは当一とリーシアを下がらせると、ラタに向けて剣をかまえた。その様子を見て、ラタは突進をしながらシエールに言い放った。

「一対一で戦うというのも、シュヴァリエの精神ですか？ あなたは昔からまったく変わっていませんねシエール」

その言葉が終わると共に、シエールの元にたどり着いたラタは、大きく剣を振り上げた。

「あなたも突進しか能が無いのは相変わらずじゃないの」

サイドステップをしてラタの剣が振り下ろされるのをかわしたシエールは、頭から突っ込んできたラタの横に回りこみ背中に斬撃を叩き込んだ。

シエールの斬撃は鎧に叩きつけられ、鉄の潰れる嫌な音がして、

ラタは苦悶の表情を作った。

そこに横から魔法がかけられた。それは体のダメージを回復する魔法だ。これでラタは体の痛みが抜けた。

ラタはすぐに体を起こしてぶ厚い剣をシエールに向けて振り上げるように切りつけた。

その攻撃は、速さは無いが正確である。シエールは斬撃にぎりぎりで反応をして、すんでのところかわし、ラタから距離をとった。「草むらの中にうかつに入ると、虫に食われるわよ」

リーシアは草むらのなかに向けて魔法を放った。無数の光る魔法の槍が、草をなぎ倒しながら草むらの中に打ち込まれた。

「法術師ね……」

法術とは、つまるところの神聖魔術だ。後方からの支援を得意と

して、傷の回復や味方の強化ができるのだ。

「ノエリア・マーファンですわ」

「丁寧ね。こちらでも自己紹介は必要かしら？」

リーシアはシェールに並ぶようにして前に出て言った。それにはラタが答える。

「必要ありません。石頭のシェール・グスタークに師匠殺しのリーシア・ドロー」

シェールとリーシアは、それを聞いて怒りで目を細めた。ラタはノエリアに、先にここから立ち去るように言う。ノエリアは、向き直って街道を走っていく。

残ったラタは、抑揚を感じない透明な声で言う。

「今回は挨拶です。次は狙っていきます」

それだけを言うと、ラタは向き直ってまた象のような勢いで街道を戻っていった。

その日のレイグネンの探索では、他の候補者との遭遇は無かった。そのため、何の成果もなしに三人は当一の家に帰ってきた。

「まあ、こういう日もあるわよ。私はお風呂に入ってくるわ。二人はいつもみたいに仲良くしていてね」

リーシアと当一は、あれから一緒にいる事が多い。シェールはその事を野次って言った。

「意地を張っていないでそっちから頼んできたら？ 『仲間に入れてください』って」

リーシアの嫌味に鼻を鳴らしたシェールは、黙って部屋を出て行った。

「本当に石頭ね」

そう言ってくすくす笑ったリーシアは、当一に視線を向けた。

「何か聞きたいことがある？」

当一は、レイグネンで出会ったラタが二人の事を知っているのが気になっていた。リーシアに聞くと、短く嘆息して答える。

「ああ……そりゃ、有名にもなるわ。師匠に決闘を申し込んで倒したり、師匠を毒殺したり……」

そして、リーシアは部屋を出て行く。

「長話になるから、紅茶の用意をしてくるわ」

そして、リーシアは紅茶を淹れて戻ってきた。

「いい葉っぱが無いわね。祥子さんに頼めないかしら？」

紅茶をすすりながらリーシアはそう言った。今は、当一の部屋のローテーブルを二人で挟んで、向かい合って座っている状態だ。舌をしめらせる程度に紅茶を飲んだリーシアは、本題に移る。

「この戦いの詳細を、あなたにも話しておくわ」

この王を巡る戦いは、レイグネンでは伝統的な行事なのだという。王が崩御をすると、この戦いが開催される事が決まる。

崩御をした年に生まれた子供を次の王にするというしきたりがあり、シエールもリーシアも、さつき戦ったラタとノエリアもその年の生まれなのだという。

「王の崩御の後、一時的に国政は王の一族が請け負うことになるわ」生まれた時から、王になる可能性を持たれた子供達は、それぞれがそれぞれの家で英才教育を施され、王の器にふさわしい人間へと育てられる。

庶民の子供であろうと、この戦いに参加をする権利はあるが、子供一人に何人もの教師をつけて育てるような事ができる庶民などはそうそういない。この戦いの参加者は、ほとんどが貴族や豪商の子供達であるという。

全国から集まった子供達は、一人ずつジェズルを与えられてこの戦闘に参加する。

「ジェズルは完全に無作為に選ばれるわ。こつちの世界の人間の中からね」

この戦いではジェズルはセイフティリングで守られているものの、勢い余って殺されてしまうジェズルも多い。なので、死んでも後腐

れの無い他所の世界の人間を選ぶのだという。

「こつちの世界の人間にとっては迷惑な話だ……」

「その分美味しい事もある……っていうこつちの言い訳だけど。あなたはそういう事はしないからね……」

そして、十五年たつて王の卵の子供達が成人を迎えると、この戦いが開かれる。

「そういう事だっというんなら……こんな戦いはまったくの無駄じゃないのか？」

「どうして？」

「王を決める戦いだというけど、王の座なんて、こつちの世界では親から子に引き継がれるもんだ。こんな血なまぐさい事をして取り合いをする意味があるのか？」

「昔はレイグネンでもそうだったわ。王は親から子に引き継がれる。だけど、同じ一族が王の座を独占すると、腐敗が起こるの。そして、何の苦勞も知らずに 王の座に座った王が、無知のままに国政を行う。そんな時代が続き、革命が起こった」

「そして、この制度が生まれたんだな……」

「腕っ節には権力や家の財産なんて関係ないからね。王の座はみんな欲しがる。普通の方法なら権力を持った家が手にしてしまうの。それでは、一つの家系が王の座を独占してしまう。」

言つてしまえば、王の座に座る人間なんて誰でもいいのよ。一つの家系が長い間持ち続けているのは問題だけだ」

「殴り合いの喧嘩で取り合つたつて変わらないと……」

「そういう事よ」

この戦いについて、当一は大体分かつた。

「どう？ 酷い話だと思う？」

「俺はそうは思わないな……」

この制度は、良いものか悪い物かなどという事は、当一には分らない。普通ならば悪い物であると考えるべきであろう。

だが、こつちの世界にはこうという言葉がある、良政は続いて二代

まで。

どの国でも、最初の王は人々から賞賛される。そして、二代目は最初の王の指導があり、知識と良識を引き継ぐ。だが、三代目になると暴君になる。

最初の王は、大きな功績を残した人物だ。だからこそ、皆が自分達の上の立つ事を認めるような偉大な人物しかなれないのである。

だが、その子供と孫はそれだけの功績をあげる事も無く王の座に座ったのだ。そうなってしまうのは自然な流れなのだろう。

だから、このように戦いという苦難を乗り越えた人間を、王にするというのは、間違った考えとは思えなかった。

当一は、リーシアにその事を話した。

「あなた……意外と博識なのね」

目から鱗が落ちたかのような顔をしてリーシアは唸る。

「まあ、実際にバトルロワイアルをやらされる方からすれば、たまったものじゃないんだけどね」

紅茶を飲み干し、ローテーブルに置いた後、リーシアは続けて質問をした。

「あなたは、エスカッションになれるの？」

「エスカッションっていうのは何だ？」

「あら、なれないのね……」そう残念そうに言うリーシアは、続けて言った。

「ジェズルの中には、モンスターになる事のできる者がいるの。グリフォンとか……ギガスとか……」

「そんなものにはなれないな……」

当一は、あまり深くエスカッションの事を聞こうとは思わなかった。そんなものを信じる事ができなかったというのもある。ジェズルはこの世界の人間の中から選ばれるのだ。この世界にモンスターになる事のできる人間などいないはずである。

リーシアにとっても、あまり興味のある話題でも無かったようである。

「元々、眉唾ものの話だし、そう期待をしてもいなかったわよ」と言っ
て、新しい紅茶を淹れるために席を立った。

エスカッション 2

朝の空気はすがすがしく、秋の季節ともなれば、肌を切る空気の寒さが布団の中を心地よいと感じさせてくれる。

当一は、隣に布団を敷いて寝息をたてているリーシアと一緒に部屋で寝ていた。

今日が休日である当一は、心地よい布団の中で、まどろみの中に沈んでいる。時計の針が十時を回る頃になると、『いつまで寝ているの?』と言つて祥子が起こしに来るのがいつものパターンである。部屋のドアがノックされる音が聞こえてきた。

コン コン

(これで起きなきゃならないか……)

そう考えて、当一はベッドから身を起こした。

「ちよつとついてきてもらつわよ」

そこに、ドアを通してかけられてきた声は、祥子のものではなくシエールのものであった。それを聞くと、当一は布団をかぶった。

「俺は何もしていないぞ」

「何でなのよ! 私は警察か何かに見えるの!」

「ちよつと前に警察から同じような事を言われてな……」

「あんたは一体何をしたつていうのよ……」

「冤罪なんだよ、異世界の喧嘩に巻き込まれたのが運のつき」

シエールがドアを開ける音が聞こえてきた。

くだらない事を言い合いながらも、当一はシエールとは目を合わせないように頭から布団を被っている。やってきたのが祥子でなくシエールだというのなら、ごねければ布団の中から引きずり出される事はないだろうと考えたのだ。

「立てこもり決定だ。俺はここから絶対に出ないからな。無罪が証明されるまで!」

布団の中から出ようとしない当一に、シエールは渋面を作った。

そこに、

「無罪も何も、あなたには何の容疑もかけられていませんよ……当
—さん」

祥子がやってきてそう言った。丁寧な言葉使いをしているが、その言葉を聞くと耳がぴりぴりするような感覚を感じて、胸が恐怖によつて強烈な圧迫感に苛まれる。

「様子様……教えていただいてありがとうございます……それは、無罪を証明される事よりも喜ばしい事です……」

布団の中から顔を出した当一は、祥子から発する強烈な圧迫感を感じながらそう言った。

「当一さん。シェールちゃんはこれから買い物に行きますから案内をしてあげなさい。こんなおばさんの着ているものと同じものなんて、いつまでも着せていてはかわいそうですからね」

シェールは鎧を脱ぎ捨てて洋服を着ている。祥子が着ているのを見たことがあるものであった。

「おねがいしますよ」

祥子はそう言うと、リーシアの方に視線を向けた。

「リーシアちゃんも、そろそろ起きましょね」

そう言われると、リーシアは体をビクツとふるわせた後に跳ね起きた。一体何があったんだ？　といわんばかりに辺りを見回し始める。

ただの主婦が発しているとは、とうてい考えられないような強烈な威圧感を、リーシアも感じたのだろう。

「リーシアちゃん。布団は片付けておいってくださいね」

「え……はい」

リーシアは、状況をよく分かっていない様子で返事をした。

当一とシェールは、近くにあるデパートに向かって行った。リーシアは留守番だ。

デパートは駅の前にあり、人の通りの多い駅前の道を歩く事にな

る。

シエールは、人ごみの中で当一から数歩後ろの場所を歩いていた。休みの駅前には、歩いている人が多く、他の通行人と肩がぶつかりそうになる事もあるほどである。慣れている当一は、すすいすい人の間を抜けていく事ができるのだが、シエールは他の人と何度もぶつかっていた。

「もつと近くに来いよ。はぐれるぞ」

少し離れた位置からついてくるシエールに、当一はそう言った。少し離れるとすぐに人の波に飲まれて姿が見えなくなってしまう。

シエールは、それでも当一の後についてくるようにして歩いていた。

「並んで歩かなきゃいけないの？」

「はぐれなくなければそうしろ」

「死んでも嫌だからね！」

「まったく……」

並んで歩くことくらい、そこまで気にするような事ではないと当一は思った。当一は、よく一美と買い物をしたりする。その時、並んで歩いていくのが常であったのだ。

一美は、自分からすすんで当一の隣に立った。そのため、こういつた事で困る事はなかった。

「シエール！　今どこにいるんだ？」

ついに、シエールは当一とはぐれ、人ごみの中に消えてしまった。辺りを見回してもシエールの姿は見えない。

「ここよ！　ここ！」

人ごみの中からシエールの手があがった。

当一は、人ごみの中からあがった手を掴んでシエールを自分の方に引き寄せた。

「って……勝手に人の手を掴んでいるんじゃないわよ！」

シエールは顔を赤くして当一に言うが、当一はそれに返事を返した。

「お前が勝手に動き回るからだ」
当一はシェールの手を握ったままデパートに向かった。

デパートの中に入ると、歩道ほど人がいるわけではなかった。一階は食料品売り場になっている。目当ての場所は三階だ。当一は、シェールの手を引いてデパートの中を歩いていた。

ここは三階建てのデパートだ。当一の幼い頃に開かれたこのデパートは、真新しくはないが、いくつものテナントがあり、活気のある様子であった。

「そろそろ離してよ！」

そう言われて当一が手を離すと、シェールは自分の手を、確認しだした。まるで、手に何かが付いていないか確認しているようなくさだ。

「俺の手は汚いつてか？」

「そついうつもりじゃないわよ……」

はつきりしない返事を返すシェールとのやりとりはそれまでにしで、当一は奥に進んでいった。

「待ちなさいよトイチン」

（トイチン……？）

シェールが言った、聞きなれない言葉を聞いた当一だが、それはあまり気にする事無く奥へと進む。

一美は、友人達とデパートに買い物に来ていた。この近辺にある大きなデパートはここだけであるため、付近の人間は買い物にここを利用するのだ。

今日は、このデパートに新しいアイスの店が出来たのだというので、どういう店かを確かめに来ているのだ。

「ん……？ あれは？」

「あー。一美の彼氏じゃん」

一美がこのデパートに来ている当一達を見つけ、その様子を見た

一美の友人が茶々をいれた。

一美はそれを聞いて顔を赤くしたが、特に反論はしなかった。

「顔が赤くなってるよー。いつもは凜々しい一美ちゃんも、恋する乙女モードに突入？」

それを見て友人一同は、いやらしく顔をにやつかせた。一美が見たのは、当一がシエールと一緒に歩いている姿である。

「あいつは一体何をしているんだ……」

一美はそう呟いた。

当一が、一美の知らない女の子と当一が歩いているのだ。

「……私には関係のない話か……」

小さな声で、自分に言い聞かせるように言った。さっきは友人に彼氏などと呼ばれてちゃかされたが、一美は当一とはそこまでの関係ではないと考えている。

幼い頃からいつも一緒だった仲である。大きくなったら結婚をしようなどという定番の約束までし合った仲だ。

一美は当一が他の女の子と一緒に歩いているところを見てしまうと、胸がざわざわと騒いでしまう。

（どうしても気になる……）

気にしないようにと考えても、一美の視線はどうしても当一達の方を向いてしまうのだ。

「行っちゃいなよ」

「別にっ！ 当一の事なんか気になっていない！」

「そういう言葉が出てくるって時点だねえ」

そう言って、友人一同は、しめしを合わせたようにくすくす笑う。顔を赤くしている一美は言葉につまった。それに、チャンスとばかりに友人達は示しを合わせたようにして一美に背を向けた。

「それじゃ、結果報告だけよろしくねー」

「ちよっ……そんな！」

そして、一美の事をおいてけぼりにして、友人達は去っていった。

（なぜだ……正面から行けばいいのになんで私はこんなこそそこそしているんだ……？）

一美は、物陰から隠れながら二人の様子を窺っていた。

（二人に声をかけて『知り合いか？』と聞けばいいだけじゃないか……）

胸にもややしたものがたまっているのだが、どうすればこのもやもやが晴れるのかが分からない。一美は、当一の事が気になっている。なぜだかわからないが、これだけは彼女自身自覚している事である。

（あの子もか……？）

また一人当一に近づいていく女の子が見えた。

「ごきげんようですね。シエル様にそのジェズル様」

当一とシエールの前に立つてそう言ったのは、メイド服を着た銀髪の褐色の肌を持つ女の子だ。ノエリアである。

「挨拶など不要だと言っているでしょうに」

そして、それに続いて長い黒髪の女の子も現れた。ラタの印象は、初めて見たときは、背格好をよく見る事ができなかったが、最初のイメージとは違い、体はスレンダーで背はシエルやリーシアよりも低いかもしれないくらいだ。

服装は上下ジャージ姿である。

「緊張感がないわね」

ふと、シエルは言った。

宣戦布告をした相手同士が相対しているのだ。本当ならば、ここですら緊迫した空気が流れるはずであろう。

「あんたのだらしないかつこうを見てみると、なんか冷めてくるわ」

「何の事を言っているのでしょうか？」

「あんたの上下ジャージの事よ。みつともないにも程があるわ」

「利便性を追求した結果です。伸縮性と吸湿性を持った、もっとも機能的な衣服であると私は考えています」

ラタは、少しだけ自慢げな様子で言った。

「今日も、ジャージをいくつも買い込むためにここに来たのです」
そう言うラタは片手に三個ずつ、合計六個。ノエリアも手に同じだけの数の紙袋を持っていた。

「その中身は全部あなたのジャージなの？」

シエールは、ラタが自慢げに話すのを見て、あきれた様子で言った。

「全部自分のものではありません。赤いものはノエリアの分です」
「わっ……私の分でございますか！……ありがとうございますわ……」

ノエリアは顔では笑っているが、こめかみのあたりが引きつっている。ラタはそれにまったく気付いていないようであった。

「いえいえ……お礼を言われる事ではありません」

いつもの淡々とした声で答えたのだ。

シエールと当一は、それを冷めた目で見た。そして、シエールが口を開く。

「いいわ。あなたの事はジャージ怪獣ズボラーと呼ぶ事にするわ」

「唐突に何ですか！」

「私は知り合った人間全員に可愛いニックネームをつける事にしてるのよ。あんたもニックネームはジャージ怪獣ズボラーに決定」

「何が可愛いニックネームですか！ 悪意しか感じません！」

珍しく声を荒げてラタが言い返した。

「リーシアにはリンリンという名前をつけてあげたわ。こんなにいい名前をつけてあげたのに、『私はパンダかつ！』って言って真っ向から拒否されたけど……」

シエールとラタが話しているところに、当一が聞きに入る。

「っていうか、レイグネンにもパンダっているのか？」

「シセンシヨーという場所に生息している珍しい動物よ」

「四川省がレイグネンにもあるのか……もしかして、それは中国という国の一地方の名前なのか？」

「アメリカ王国の一地方の名前だけど？」

「むっちゃ飛んだ！ アメリカが王国になっちゃったよ！」

「アメリカっていうのは略語でね。本当の名前はグレートブリテン
および……」

「その略はイギリスじゃないのか！ どう略すればアメリカになるんだよ！」

レイグネンの地名は、意外と奥が深いらしい。

シエールは、ノエリアの事を見ながら顎に手を当てた。

それを見てノエリアは身構える。当一が見ても、ラタが見ても、
シエールがノエリアのニックネームを考えているのは明白である。
そして、シエールは口を開いた。

「あなたはドジッ娘メイドね」

「私のどこにドジッ娘の要素があるというのですか！ 私に対する
侮辱ですわ！」

「きつと今朝、ラタの頭にお茶をぶっかけているわね」

「そんな事をしているものですか！」

「今日は何枚のお皿を割ってしまったのかしら？」

それにラタが口を挟む。

「昨日、わたしのお茶碗をうっかり落として割ってしまいました」

「ラタ様まで！ 今、その話はやめてくださいまし！」

ノエリアは、羞恥と怒りで赤くなつた顔をして、目線をシエール
達に向けた。だが、その眼光がさし貫いているのは、シエールでは
なく当一であつた。

「覚えていなさい！ あなたのジェズルをコテンパンにしてやりま
すわ！」

「こいつだったら、煮るなり焼くなり好きにしていいいわよ」

「シエール！ お前が言うか！」

「トイちゃんも、そうかつかしいの」

「トイちゃんって何だ！ 俺のニックネームか！」

そして、もうすでに当一のニックネームは決まっていたらしい。

その様子を物陰から盗み見ていた一美は、呆然とした顔を作っていた。胸のもやもやは増すばかりで胸からあふれ出てきそうなくらいである。

「あいつ……いつのまにあんなに女の子ばかりと仲良くなったんだ……？」

当一は、女友達など多くないと考えていた。だから、あんなに多くの女の子に囲まれているという姿が、一美にはまったく信じられなかったのだ。

だが、冷静に一美は考えた。会話を聞く限りでは恋人同士だという感じはしない。

「もうちょっと……時間があるかも……」

気持ちの整理をつけるのが今は先決だと考え、一美は、今はこの場から離れていった。

幕間

リーシアは、祥子にたのまれた薬の材料を探すために、近くにあった山の中へと行った。

レイグネンだろうと、人が生き植物は生い茂る。別の世界といえど、基本的な部分は同じだ。

草だって、レイグネンと同じ成分を含むものだってあるはずである。基本的に、候補者は戦闘のための限られた時間しかレイグネンに居る事ができない。この世界で、薬の材料になりそうなものを探しておくのは必要である。

リーシアは、木々が生い茂る中を、祥子から借りた服を着て歩いていた。

林道を通りながら路傍に生えている草を確認しながら歩く。薬になりそうな種類の草は、見れば大体分かるものだ。めばしいものを摘んで、一つづつ小分けして持って帰る。

使えるかどうかは、帰ってから確かめる。屋根裏部屋を改装する時に見つけた薬草の本を見ると、近くの山にも使えそうな草はけっこう生えているものであるのが分かる。

「一人で生活っていうのはこういう事なのね……」

レイグネンでは、薬草は商人が勝手に持つてくるものであった。その中から欲しいものだけを選び、後は家の者が商人に金を支払う手はずになっていたのだ。

この世界にきて、今まで当たり前だった事がまったく当たり前でなくなってしまう。

貴族の令嬢の身分から、初めての世界に放り出されて一人だけで生活をして、心身共に強くなっていくというのも、その戦いの意義の一つであるのだ。

知らない世界に放り出されるという事はこういう事である。今まで家庭教師に叩き込まれた、料理や数学などの知識が、いかに大切

なものであるかが、身に染みて分かってきた。

「魔術師なんだから体力トレーニングなんて無駄とか……本当にないわ……」

魔術を志す者として、毎日のようにレーズから筋力トレーニングを課せられていた。

レイグネンにいた頃は、無駄な事だと考えたが、あのトレーニングが無ければ、自分は、山登り一つでくたくたになって、薬草を探すところではなくなっていただろう。

今は亡き師に感謝をしつつ、山の中を散策し続けた。

そこで広い場所に出た。明らかに整地をされた場所だ。

子供が遊ぶくらいのスペースがあり、この辺と地質とは明らかに違う砂の敷かれている場所だ。その砂地は今でも整理を続けられているらしく、草などは生えていなかった。

その場所の隅っこで、女の子が座っていた。

「どうしたの？ こんなところに」

リーシアはその女の子に挨拶をする。リーシアに顔を向けた女の子は、あちらからも挨拶をしてきた。

「それはこっちのセリフだ。ここは私の家の山なんだぞ」

「あら、失礼したわね。山に草を採りに来たのだけど、あなたの家の山なんてしらなかったわ」

リーシアが摘んだ薬草を見せるが、女の子は興味なさげにしている。

「なんだ？ 草なんか集めてどうする気なんだ？」

質問のような口調だが、返事を求めているわけでもないらしく、浮かない顔をした彼女は、顔をふせた。

「好きに採ってくれるといい」

『これで話は終わり』といった感じで言った、それからは自分の殻に閉じこもるようにして体を丸める。

リーシアは、その彼女に近づいていった。彼女のつらそうな姿を

見て、助けてあげたくなつたのだ。多分、自分ならば彼女の力になれるだろうと考えた。

「生理痛にはこれが効くわよ」

「違う！」

リーシアが差し出した錠剤を、その女の子はすばやく叩き落した。

「お前は薬なんか作れるのか？」

「ええ。たしなみ程度だけどね」

あれから二人は、それとなく会話を始めていた。

それから、リーシアは、その女の子の隣に座った。話をしてみると意外と気が合ったというもある。

「さつきは辛そうにしていたけど、どうしたの？ カゼ薬くらいならすぐに作って持っていつてあげるわよ」

そして、気になっていた彼女の様子も事を聞いた。

そうすると、その女の子は「大した事じゃない……」と言って、また顔をふせてしまった。

「恥ずかしがる事じゃないわ。誰だって起こることなんだから……」

「だから、それではないと言っているんだ！ しつこいぞ！」

女の子が声を荒げて言うのを見て、リーシアはくすくすと笑った。からかわれたのに気づいた女の子は、リーシアからそっぽを向いた。

「そこまで言われちゃうとどうしても気になるわね。言えない事なの？」

それから、女の子は小さな声で話し出した。

「お前は好きな人っているか？」

そう言われ、リーシアの頭に最初に浮かぶのは今は亡き師の姿である。悲しげに目をふせたリーシアは言う。

「いたわね……もう会えないけど……」

沈痛な表情になったリーシアを見て息を呑んだ女の子。

女の子はそれから話を続けた。

「その人が自分から離れていってしまうというのはどんな気持ちな

んだ？」

リーシアが師のレーズと離れ離れになってしまったのは突然で、しかも理不尽な理由からであった。

どうしてこんな事になるのか？ そんな事すら考える暇も無く、頭の中がぐちゃぐちゃになったのを覚えている。

「何も考えられなくなるわ。狂ってしまいそうになるほど……」

実際、リーシアは狂った。仇を毒殺までしたのだ。

あの時の感覚は忘れる事ができないくらいであり、今でもふかぶかと自分の心に残っている。おそらく、これから死ぬまでこの胸のできものは消えることが無いだろう。

「狂うのか…… ならこれは恋とかそういうものではないのかもな……」

女の子は、なんとなく彼の事を諦められるような気持ちなのだという。彼は、親しい男の子ではあるが、好きなだと本気で思った事はない。

「あいつの事が好きな娘がいるのだとしたら、かまう事はないのかもしれないな……」

諦めがついた。そういうのもおかしい話かもしれない。最初から本当に好きだったわけではないし、恋人同士であつたわけでもない。自分が勝手に悩んでいるだけだ。悩んでいる理由すらも自分自身が分かっていない。完全に無駄な時間をとっただけである。

女の子は、座っていた石の上から腰を上げた。お尻に付いた砂を払って、山を降りるために歩いていった。

「どうでもいい話につきあってもらって悪かったな。薬草くらいなら好きにとつてくれるといい」

それは、彼女が最後のセリフのつもりで言った言葉だ。

背中から声をかけられなければ、そうなっていたかもしれない。

「あきらめちゃだめよ」

リーシアは本来の彼女がするようにしてニヤリと笑った。自分がこんな事を言うのはおかしい事だとは彼女自身も思う。

「好きなのかどうかなんて考えるのこそが時間の無駄よ。少しでも彼の事が好きだと思ふのなら、彼にもっと近づいていくべきよ。自分の気持ちを確かめるのなんて、そうしながらでもできるでしょう？」

まるで当一のような言いようであると、リーシア自身思った。彼女はどうかやら、当一に影響されてしまったのかもしれない。

彼の諦めの悪さは、自分自身にも感染をしたのだ。

それに、彼女に自分の事を重ねてしまったのもあるのかもしれない。リーシア自身、レースに「好き」と一言を伝える事もできなかったのだ。

彼女にはがんばってほしいと思う。自分が見た、バッドエンドで終わるラブストーリーの主役を、彼女に演じて欲しくはないという気持ちも強かったのだろう。

「無責任な物の言い方だぞ。こっちは気持ちの整理がついたところだっというのに」

「私だって協力してもいいわよ。恋の秘薬の作り方を、今から学んでおくわ」

「薬に頼る気は無い……」

すつきりした直後に、またぐちゃぐちゃに戻ってしまった気持ちを苦笑に混ぜて吐き出した女の子は、重い足取りで山を降りていった。

エスカッション 3

シエールは祥子と一緒に夕飯を作る手伝いをしていた。シエールとリーシア用の私服は先日の買い物で一通りそろい、祥子の部屋にしまっている。

「当一。もうすぐ夕飯ができあがるから、リーシアちゃんを呼んできてちょうだい」

リーシアは天井裏にいるのだという。シエールは、今祥子の料理を手伝っているため、手がはなせない。

天井裏へ行くには埃っぽい階段を登っていく必要があった。天井裏は、普段から物置として使われており、当一の小さな頃にはよく遊びに入ったものだ。

一美と一緒に入り、柱を使って、たけくらべのために柱に傷をつけたはずだった。あれが残っているかどうか確認もしておこう。

当一は、少しだけ懐かしい気持ちになりながら天井裏に繋がる階段のドアを開けた。

階段は綺麗に掃除をされていた。昨日までは、階段を踏みしめると埃が舞うくらいに、ぶ厚い埃が積もっていたはずである。リーシアが掃除をしたのだろう。

「リーシア！ 降りて来い。晩飯の時間だぞ！」

当一がそう言うと同時に、

ドカン！

という轟音が響き、屋根裏部屋が黒い煙で満たされていく。

「人の家の屋根裏部屋で何をやってるんだ！」

当一は屋根裏部屋の中に飛び込んでいき、窓を開けて煙を外に逃がしているリーシアと対面した。

「当一……ごめんなさい。ちょっと調合に失敗してしまつて……」
煙に当てられて咳き込んでいるリーシアは、そう言った。

「調合つてなんだ……？」

「ここを薬の調合に使つていいと言われたのよ。だから、レイグネンから持ち込んでくる事のできない薬を全部自分で作つていた所なの」

「ちなみに……今作つていた薬つていうのは何なんだ？」

「私のローブを洗うための洗剤よ」

「洗剤の調合中にあんな爆発が起こるのか！　どんだけ危険な洗剤なんだよ！」

煙が晴れていき、部屋の全容が明らかになると、当一は目を見張つた。

「きれいになつたな……」

当一の言う通り、埃の積もつていた屋根裏部屋の様子は一変していた。部屋の壁は、昔は木の板を貼り付けてあるだけで、ペンキどころかニスも塗っていない木材がむきだしになっていた。

だが、今はレイグネンで見た光沢を持つ物質に壁が貼りかえられている。

「これを、全部一人でやつたのか？」

「自分の研究室なんだし、自分で改装をしないとね。この柱なんかかなり傷だらけでぼろぼろだったけど、綺麗になつたでしょう？」

そう言つて、リーシアは部屋の柱を見た。それは、当一と一美のたけくらべの跡が残っているはずの柱である。

「落書きや傷なんかがあつたんで磨いて消したわ。そして、壁紙を貼り付けて完成よ」

つまり、一美との思い出の跡も消え去ってしまったという事である。

「なんという思い出ブレイカー……」

一人で落胆する当一であるが、リーシアはそれに小首をかしげただけで特に言及する事はなかった。

リーシアは煤けた体を掃い、話題を変えた。

「夕食の時間なのよね。祥子さんに頼まれた薬も、もうできているからついでに渡しましよう」

そう言い、リーシアはビンに入った黒々としたペースト状の液体を手にとった。見るからに胡散臭く、毒でも入っているんじゃないかと言えるような代物であった。

「それは何の薬なんだ？」

「腰痛の薬よ」

「それを飲むの！」

「腰に塗るのよ」

「バンテリンを買いなさい！」

リーシアは、当一が何でそんなに絶叫をしながら叫んでいるのか分かっていない様子であった。眉根を寄せて当一の事を見る。

だが、それもすぐに止めて、また話題を変えた。

「そういえば、祥子さんがいい葉っぱを買ってくれてるって言うたわ。交渉は上手くいったわよ」

「それはよかったな」

「紅茶の銘柄を聞いてみたんだけど、やっぱりこっちの世界の紅茶の名前はちんぷんかんぷんね。リプトンっていう高級紅茶らしいわ」

「思いつき安物じゃん！」

「アールグレイとかいう安物の紅茶の方が私の好みんだけど、それは、祥子さんが嫌いだっていうから止めておいたわ」

「アールグレイって高級茶の名前じゃなかった！絶対お袋に騙されてるって！」

祥子の行動は、まるで子供に美味しいものの味を覚えさせないようになっているお母さんのようであった。

牡蠣は、子供が食べたなら死ぬと言われて、小さな頃牡蠣を食べさせてもらえなかったのを、当一は思い出した。

祥子は、その当一を横目に美味しそうに牡蠣をほおばっていたのだ。

リーシアは、ヘビのように狡猾で賢しいイメージがあつたが、実は案外騙されやすく純粋なのかもしれない。

「どうしたの？ 先に降りているわよ」

リーシアがそう言つて、先に屋根裏部屋から降りていき、当一はそれに続いていった。

おどろおどろしい黒のローブを着たリーシアの後姿であるが、それが当一には今回の件で少し可愛く見えてしまうのが不思議であつた。

その日のレイグネンでは、三人共張り詰めた雰囲気でした。

土をならしただけの舗装のされた道を歩く三人は、襲撃者の影におびえていたのだ。

「シエール。その話は本当なの？」

「あいつは言つていたわ。『私のジェズルはエスカッションになります』って」

デパートでの事である。

「挨拶が長くなつてしまいましたね」

ドジッ娘メイド呼ばわりをされたノエリアと、『トイちゃん』というニックネームの明かされた当一の二人が揃つてシエールに抗議しようとしていた時、ラタが淡々とした声でそう言つた。

「ノエリア。帰りますよ」

ラタがそう言つと、顔を真っ赤にしていたノエリアは、スイッチが切り替わつたようにしてしずしずしたものの腰でラタの後ろに立つた。

「今日会つたのも、何かの縁です。教えておいてあげましょう。私のジェズルはエスカッションになれます」

シエールは、ラタの言つたそれを聞いて目を見開いた。

信じられない……そんなものがあるはずがない。シエールはそう考える。

「そんな……あれはただの伝説じゃあ……」

シエールが驚いたのを見ても、表情を変えないラタは、何事もないかのようにしてきびすを返した。

「伝説ですか……いいですね。伝説の蘇る瞬間をとくとまのあたりにしてください」

シエール達に背中を向けてそう言ったラタは、そのまま歩き去っていった。

「だとしたら、終わりね……」

「戦う前から諦めてどうするのよ……」

リーシアの弱音を、シエールがたしなめた形だが、二人共声に力が無かった。リーシアだけでなく、シエールも怯えている。

当一には、今の状態がどれだけやばい状態なのかという事は、まったく分からなかった。二人の様子を見れば、それがとんでもないものであるというのは分かる。

そして、道の向かいから人影が現れた。四人分の人影だ。

鎧を着込んだラタに、いつもと同じメイド服姿のノエリア。そして、ラタのジェズルの男とその男に鎖を引かれている女の子である。「そろそろ、その荷物は横に置いてください」

ラタが自分のジェズルに向けてそう言うと、ジェズルは鎖から手を離す。女の子は、それでラタ達から離れていった。ラタ達は当一達の前まで来る。

そして、シエール達に向けて淡々とした声を投げかけた。

「もつとしゃんとなさってください。へっぴり腰の敵を倒しても何の誇りにもなりません」

「戦うのは俺なんだろう？」

ラタが言った言葉に、ジェズルはかぶせるようにして言った。

「秋成はまだ下がっていてください」

秋成は「へいへい……」と言って、後ろに下がっていった。

先に後ろに下がっていた女の子の肩を抱きすくめたのを見て、ラ

タは顔をしかめたが、すぐにシエール達の方を向いた。

「戦う前に聞いておきます。あなたは一体どのような王になりたいのですか？」

「どういう事なの？」

それを聞くと、ラタは小さく嘆息をした。それには、シエールに対する侮蔑の意味がこもっていた。

シエールが眉根を寄せると、それに合わせてラタが続けた。

「私は、『心無き王』になろうと考えております」

シエールが、意味が分からずに首をかしげると、ラタは淡々をしながら続けた。

「王というものは、国の心臓です。それ以上であつてもそれ以下であつてもいけません」

歴史的に見て、王はたびたび暴虐を働く。

ローマの町を火の海に包んだ暴君ネロ。自分の思想に従わない者を次々に処刑した秦の始皇帝。例えを出せばきりが無いほどである。

「それは、王自身が自分の私利私欲に走っておこなったことです。心臓はただ拍動を続けていればいい。余計な考えを挟むと災いを呼ぶのです」

だから、ラタは淡々と政治を取り仕切る王になる事を望んでいるのである。

情や欲に流されず、国の心臓としての役目だけを考える王になる事を望んでいるのであった。

「あなたには、王になってからどうしようかという信念がありません。あなたのような者が王になっても国に災いを呼びます」

「なんですって……」

シエールは、ラタが自分にむけて言った言葉に、歯を噛んでそう答えた。だが、そう答えたただけだ。

シエールは確かに、そんな事まで考えていない。王になる事までしか考えていなかったのだ。ラタのように、その先まで考えてはいない。

「先の事を考えてさえいれば、王になる資格があるっていうの？」

「少なくとも、あなたよりはあります」

ラタは言い切る。

ラタは、次にリーシアの方を見た。

「あなたの力であれば、是非欲しいと思うのですがね」

「あら？ 高く評価してもらっているようで嬉しいわね」

リーシアは口ではそう言い、軽く微笑んだ。シェールと当一にだけ分かる、彼女の怒りの籠った愛想笑いである。

「私のチームに魔術師はまだいません。それに、あなたの目的のためならば手段を選ばないという理念を私は高く買っています。正々堂々と正面から戦う事しかできない愚か者とは違います」

「一応は私の主人よ。愚か者などと言うのは止めて欲しいわね」

リーシアは、目を薄く細めた。それは、彼女の怒りの表情なのだという事は、当一にしか分からない。

「なら、俺の分はあの土色の髪の子か……文句無いぜ」

秋成が最後にシェールを見てそう付け足した。ラタはそれを侮蔑を含んだ視線で一瞥したが、すぐに視線をシェール達に戻す。

「愚かな上に信念を持たない者に、時間を費やす暇はありません。

秋成。一気に勝負を決めましょう」

秋成のセイフティリングが光った。光がどんどん大きくなり、秋成を包み込む。

姿が見えなくなったところで、中から巨大な姿が現れた。

ごつごつした体は日の光を浴びて、虹色の光を反射する。透き通った体は人型で、ゴーレムのような形をしていた。

「私のエスカッション。ダイヤモンド（金剛石の人形）です」
ラタが珍しくも口の端を吊り上げて得意げな顔を作った。

エスカッション 4

ダイヤモンドドールは、ゆっくりとシェール達に向かって行つた。歩きたびに、ドスン！という音がして、道に大きな足跡を作る。それが、まるで相手を追い詰めるのを楽しんでいるようにして、シェール達に近づいている。

秋成の体は、シェールの三倍はある、その巨体に向けて、シェールとリーシアは武器を向けた。

「どうしようかしら……シェール様。ご指示を」

「うっさい。勝手に動きなさい」

途方も無い話である。

敵が大きすぎて、どう戦えばよいのか分からない。二人共次にどのような行動を取ればいいのか分からないのだ。ダイヤモンドドールは、ゆっくりとシェール達に向かって行つた。

ダイヤモンドドールは距離を詰めていき、シェール達はそれに合わせて下がる。シェールが手を出せないのを見て、ダイヤモンドドールは、まるでしたなめずりをしているようにゆっくりとシェール達に向けて歩いていった。

いきなりシェールが走つた。ダイヤモンドゴーレムの足元に立ち、剣を叩きつける。

カンッ

乾いた音がして、剣が弾かれた。硬いダイヤモンドに、いくら斬撃を当てたところで弾かれるだけである。

シェールだって、それは分かっている。だが、他にどうしようもない。無駄だと分かっているにも剣を振るしかない。意味を成さない行動を、繰り返すしかないという事実、氣力を削がれながらも、シェールはもう一度剣を振り上げた。

「私の事を忘れていませんか？」

距離をとって助走をつけ、振り上げた剣をシェールに向けたラタが言う。

目前に迫っているラタに対して、シェールは、後ろに下がるでもなく攻撃を避けるでもなくトップステップで前に出て体当たりをした。

シェールの肩が、ラタの鳩尾に当たる。だが、ラタはシェールの体当たりではびくともしなかった。

ラタは懐に入り込んだシェールの腹に、膝蹴りを打ちこみ、剣の柄をシェールの脳天に叩き込んだ。

意識を刈り取られそうになったシェールは、なんとか意識をとどめ、今度はバックステップで距離をとった。

「何者にも背を向けずに戦うという考えについては賞賛しましょう。ですが、あなたはエスカッションに勝てると思いますか？」

ラタはシェールに向けて宣告をした。

「敵に背を向けるのは卑怯者のやる事よ」

「愚直すぎます」

ラタは、戦いの最中で小さく嘆息をした。戦いの最中でなければ、それこそ、大きいため息を吐いていた事だろう。

「もついいです……秋成。やってしまってください」

「ああ。これでやっとこいつは俺のものになるわけだな」

「誰が、あんたなんかの……」

ダイヤモンドールの表情はまったく変わらない。だが、シェールには、今の秋成が卑下た笑みを浮かべているように見えた。

「少し躰は必要だろう。どっちが主人か、今のうちから叩いて分かせないとな」

秋成は、シェールに向けて、野太い腕を振り下ろした。シェールはそれを呆然とした顔で見つめた。まるで死を覚悟しているかのような顔であると、それまでの戦いを傍観していた当一は見た。

（王になる事はできない。そして、あんな奴のものになるくらいな

ら……」

シエールの頭には、その考えがよぎっていた。シエールは死を望んでいた。だから、自分を一撃で押しつぶす豪腕が自分に向かってきても、よけようとしなかった。

「諦めるんじゃない！」

当一の声と同時にダンヤモンドールの腕が止まる。

秋成の腕がシエールを押しつぶす直前に、当一がシエールをかばうために割って入っていた。セイフティリングの効果で辛くも腕を止めたものの、今にも粉々に砕け散りそうな姿のバリアがシエールの目に写る。

「お前に王になる資格があるかどうかなんて関係あるのか！」

「でも……」

「抗え！」

当一は、さらに続ける。

「何で諦めているんだよ！ ラタにあつてお前に無いものがあるなんて関係ないだろう！ 欲しい物があるんなら、たとえ何をしたって手に入れて見せる！」

信念だ？ 方針だ？ そんな物は関係ないんだよ！ 持っていないなら、今日の夜にでも考えればいいだろう！ 自分の全力を出しもしないうちに諦めるなんて、俺が許さない！」

シエールは、当一の言葉が無表情で聞いていた。それを見て当一は舌打ちをした。彼女の心に言葉が届いているかどうか、まったく分からなかったのだ。

「諦めて当然だ。俺が敵なんだからな」

秋成の声がする。当一は、秋成がまた拳をふりあげるのを見た。次の秋成の拳はぼろぼろのセイフティリングでは防げない。それでも、当一は逃げなかった。

彼女をまもりたい。その一念が彼をその場に止めていたのだ。

シエールの目には、それが異世界で起こっている出来事のように見えた。

自分の手の届かない場所に手を伸ばそうとしている当一。かてっこない巨体に向けて貧弱な竹刀を向ける姿が、まるで、ドラゴンに立ち向かう英雄の姿に見えたのだ。

そう考えてしまった自分をすぐに恥じた。

(当一は私より弱いのに……)

剣を交えれば絶対にシエールが勝つ。そのはずだというのに、自分が手を伸ばしても絶対に届かない輝かしい存在に、彼を重ねてしまったのだ。

その想いがふつつつとした怒りに変わっていく。

「ふざけんじやないわよおおおおお！」

シエールは咆哮を上げた。それは誰に対するものだったのだろうか？ 叱咤をした当一に対するものだったのか？ それとも、勝ち誇った秋成に対するものだったのか？ それとも、弱気になっていた自分に対するものだったのか？

シエールが声をあげると、当一のセイフティリングが光り出した。それは当一の体をつつむほど大きくなり、そして、その光の中から巨体が現れた。

トカゲのように腹ばいになって歩く姿。トカゲの姿をしていながらも、綺麗な色をしており、清涼な青みをたたえる体には、まるで剣のような突起がヤマアラシのように生えている。

太い首に持ち上げられたドラゴン特有の厳つい顔があった。

「これは……ドラゴンオブソードマウンテン(剣山の竜)」

リーシアが言う。彼女が読書をしていた時に見た、その昔の英雄に退治をされたという伝説の魔獣の姿である。

『キエエエエエエエエエエエ』

耳を切り裂くような奇声を上げたドラゴンオブソードマウンテンは、秋成に向かって突進をした。

その突進をもろに受けた秋成は、ドラゴンオブソードマウンテンに押し倒された。

仰向けに倒れたダイヤモンドドールにのしかかったドラゴンオブ

ソードマウンテン。

厳つい顔に浮かぶ鋭い瞳が、ギロリと、秋成の事を見下ろした。
ドラゴンオブソードマウンテンは、秋成の喉下に一本一本が刀のようになっている歯を突きたてた。

キンッ キンッ

だが、秋成に付き立てられた牙は、折れ飛んだ。

ドラゴンオブソードマウンテンは、噛み付くのを諦め、頭を秋成にたたきつけた。

額から角のように伸びている刃は折れ飛んだ。だが、刃の飛んだ頭の、単純な頭突きの威力で、秋成の体にひび割れを作った。

「秋成！ 撤退します！」

ドラゴンオブソードマウンテンに向けて、突進をしているラタが言う。

「はあああああああ！」

ラタが、ドラゴンオブソードマウンテンの横腹に体当たりをする
と、ドラゴンオブソードマウンテンは秋成の上から押しつけられた
ドーン……と、大岩が倒れたような轟音が響き、土埃を上げてドラゴンオブソードマウンテンが倒れる。

その機会を逃さず、立ち上がった秋成は背を向ける。走って一步
一步地面を踏みしめるたびに轟音をあげながらシエール達から逃げ
ていき、ラタ達も姿を消していった。

ドラゴンオブソードマウンテンは、それを追いはしない。

『キエエエエエエエエエエエエエエエッエ』

空に向けて、奇声にも似た大声を上げたのだった。

竜と人形

当一はあれから元の姿に戻り、レイグネンから元の世界へと戻っていた。

ドラゴンオブソードマウンテンから元に戻っても、当一の体には別に何も異常が見られない。意識のしっかりしていた当一は、シェールとリーシアの会議に参加をする事になった。

三人で一つのローテーブルを囲み、一人一つの紅茶を並べてのかっこうで、リーシアが昔に本で調べたという話を聞く事になった。

「紋章という意味でのエスカッションというのは、騎士や貴族の意思や信念を形にしたものなの」

エスカッションというのは日本でいうところの家紋である。どの動物を使うか？ どの種類の花を使うか？ それで、その家系の間が総合して持つ考えや信念を表しているのだ。

ゴーレムなら守護。そしてドラゴンなら大きな力を現している。

「エスカッションは、その者の心と信念の表れである。強い心を持つ者がエスカッションを得る事ができる。私はその一文を見たとき失笑したわ」

心だの、信念だの、そんな全時代的な考えをずらずら並べ立てられている本なんてまったく信用していなかった。だが、エスカッションの事をじかに見ると、まさにその通りに思えてくる。

「ラタは、『心無き王』になりたいと言っていたわ。ラタには彼女なりの信念があったの。エスカッションを手にする強い心を持っていた」

だから、ラタはエスカッションを持つことができたのだと、リーシアは言う。

「シェールはたまたまエスカッションを使えただけよ。自由に使えるようになるには、彼女のような強い心が必要なの」

シェールは無言でそれを聞く。唇をかみしめ、悔しげにしている

様子だった。

昨日はそのまま結論が出ずに終わった。

当一は、今日も一美に特訓をするように願い出ていた。いつもとは違い、気の入らない特訓をしている一美に、少し疑問を持ちながらも、当一は今日の特訓をこなしていた。

特訓が終わった時の事である。

一通り体を動かして、終わりの時間もいつもより早かった。道着姿で特訓をしていた当一は、少しの間休んでから制服に着替えて帰る事になる。

学校の武道館の隅で休んでいると、飲み物を持ってきた一美は、おもむろに当一の足を掴んだ。

「お前は一体、どこでそんなに歩いてきたんだ？」

レイグネンでは、綺麗な舗装とはいえない街道を歩きづめであったのだ。足の裏にはマメや水ぶくれがいくつもできていて痛々しい様子であった。

「別に……最近夜の散歩にはまっただけだよ」

「あの女の子達と一緒にか？」

当一は、ぎよつとして一美の方を見た。

一美は、シエル達の事を知っている。

「そろそろ足を下ろしてくれないか？」

当一は一美に言った。一美がシエル達の事を知っているのなら、別に話してもいいかもしれない。

ただ、『異世界』だの、『王を決める戦い』だのといった荒唐無稽な部分は話さないべきだと思うので、少々抽象的な言い回しになるだろう。

「最初は嫌々だったんだ。訳も分からないうちに巻き込まれた。

だけど、彼女のあぶなっかしさを見ていると放っておけなくなっただよ。彼女は自分を強く見せているようだけど、それは、嘘や言い訳でだましましやり続けているようなものだったんだ。

だけど、今は本当の強さを手に入れなければならない時に来ている。彼女がどんな結果を出すかに興味があるし、ここまで関わっているのだから、抜ける気にならないというのも当然ある」

それが当一の今の考えである。これで全部言っただけだ。

「その子の事が好きなのか？」

一美はやけに無表情で聞いてきた。その様子に何か異変を感じ取った当一だが、包み隠さずに答える。

「ライクの意味なら間違いないんだけど……ラブの意味ならどうかな……」

あいつはがさつだし、いつつもかりきりしているからな。あんまり、真剣なお付き合いは考えられないな」

「そうか……」

一美はそれ以上に何も聞かなかった。

「それじゃあな、いつも教えている処置をしておくように」

「だから処置が必要になるまでやるなつての……」

一美の訓練が終わると、一美と当一はそう言いあった。

腕は真っ赤になり、足もがたがた震えている当一は、ふらふらしながら家に帰っていった。

いまだに道着のままであった一美は、更衣室に行って、道着から制服に着替えていく。

袴を外すと、細く引き締まった足があらわになった。一美は剣道や空手などの武道を一通りやっており、若さから来る白い肌に、引き締まった手足の美しい少女であった。

剣道の時には髪を束ねている。それを解くと、いつもどおりのロングヘアーになり、長い髪がふわりと舞った。

「また……あいつは私の心をかき乱す……」

胸のもやもやをなんとかしたいと考えて当一に聞いた事だったが、答えを聞くと、さらに胸にはもやもやがたまっていた。

当一は、彼女の事を好きだと言った。だが、恋人にはなれないと

言った。

当一は下手な隠し事などはしない奴だ。それが今の彼の本心なのだろう。

だが、当一が彼女の事を語る時の顔は楽しそうだった。それを見ると一美の胸をちくちくと痛んだのだ。

いわゆる、友達以上で恋人未満というやつだろう。小さなきつかけ一つで当一はその子と結ばれる。今はその直前の状態だ。

「あいつは、わざとやっているんじゃないだろうな……」

あの朴念仁がそんな事を狙ってできるわけがない。それは分かっているのだが、一美は恨みがましい言葉を、この場にいない当一に向けた。

ふらふらしながら家に帰ってきた当一。それを出迎えてきたのはリーシアだった。

「あなた、この平和な世界で何と戦っているの……？」

リーシアがそう言いだすのもおかしくない状況。制服に乱れは無いものの、足腰が上手く立たず、顔色も悪くて気力の抜けきっている様子であった。

「巨悪とな。俺はある巨大な組織に狙われているんだ」

「危ない薬でもやっているのかしら？」

当一が嘯くのに、流すようにして答えたリーシア。

「手を貸しましょうか？」

「ああ……頼む」

歩くのも辛そうだった当一に肩を貸したリーシアは、当一をリビングまで運んでいった。

当一をソファーに寝かせた後、足や腕、背中などに湿布薬を貼り、その上に毛布をかけてきた。

「暑いでしょうけど我慢してね。汗が出ると効いてくるから」

まるで、医師のような処置のしかたである。

竜と人形 2

あれから少し時間が経つと、本当に体中から汗がにじみ出てきた。体が芯から温まってくるような感覚に、それに合わせてあふれて来るすがすがしい汗。

「筋肉に刺激を与えちゃダメ。動かないでね」

そう言っつて、毛布を剥ぐと、リーシアは当一の体を拭いて汗をぬぐいとる。

それを数度繰り返すと、当一の体の疲れが抜け、痛みもひいていった。

「もう動いてもいいわよ」

当一がリーシアに言われて起き上がると、自分の体ではないみたいに体が軽い。

「ねえ、ドラゴンオブソードマウンテンになった時って、どんな感じだった？」

リーシアが何の脈絡も無しに聞いてきた。

「あの時は夢中だったから。よく覚えてないんだ……」

当一は、とにかくダイヤモンドドールの事を倒すことを考えて突進をした。後は思いつくままに行動をしただけであつた。

「イメージトレーニングをしておいたほうがいいんじゃないの？」

噛み付いたり、四本足で歩いたり、人間が普段はしないような行動をとる事になるんだからね」

リーシアに言われ、当一はあの時の記憶をたどつてみる。確かに、二本足で立って歩くとは体の使いかたが違った。

「そうだな。腹ばいになって……腕なんて足のような感覚だったし……」

あの時の姿勢を思い出してみる。床の上を這うような形になった当一。

「歩くにはどうしたっけ……」

両手は足だと思って動かす。右手を前の方に出した。

そこに、リーシアが当一の背中に座った。固まって腕を止める当一。

「どうしたの？ 続けてもらっていいわよ」

「なにが続けるだ……これが狙いだっただろう……」

不自由な姿勢で、当一はリーシアの事を見上げる。リーシアの口元はかすかにゆがんでいるのが見えた。

「イメージトレーニングの手伝いよ。敵がこんなふうにして攻撃をしてくるかもしれないでしょう？」

「紅茶を手に持って、優雅に足を組みながら座ってくる攻撃ってなんだよ！ この絵ずらを見るだけでも、完全に負けた後だろう！」

「敗北必至の状態からの逆転劇よ。がんばって」

「何をがんばっていうんだ！」

喚く当一を無視して、リーシアは紅茶のカップを傾けた。当一はなんとかして起きだそうとしてもがくが、ぜんぜん起き上がる事ができない。

「なんだ！ ぜんぜん動けないぞ！」

「私が重いんじゃないわよ。こつそりと重力魔法をかけて、動けないようにしているから」「用意周到だなまったく！」

言われて気づくが、指一本を動かすのにも、何か抵抗のようなものを感じる。重くて動かない体を、考えられる限りに動かして、当一はこの状態から抜け出そうとする。

「ばたばた動くわね」

「うるさい！」

のんきに当一の様子を口にするリーシアを、押しのけようとする当一。

リーシアは、当一が暴れるのを見ていく目を、遠いものに変えていった。

様々な障害や抵抗を押しつけて、目的に向かう姿。レイグネンで見せた彼の姿はシエールにまで影響を与えた。

セイフティウォールに閉じ込められても、暴れて遂にはセイフティウォールを打ち破った。リーシアが毒をまいても、かまわずに彼は抵抗を続けた。

ダイヤモンドドールの巨体に、恐れず立ち向かった。そこで、シエールが覚醒する事によって、ドラゴンオブソードマウンテンに姿を変えてダイヤモンドドールを撃退した。

何か一つでも運命の歯車のかみ合わせが悪ければ、彼は生きてはいなかったのだ。

結果こそよかったものの、当一の行動はいちいち危なっかしいのだ。

（あなたの事は私が守ってあげる）

リーシアは思う。当一は、シエールにとって大切な人だ。ジェズルであるというだけではない。

今まで、彼女の心を動かしてきたし、おそらくこれからも、シエールの事を助けていく事だろう。

だが、これからもこのような危なっかしいことをしてばかりでは、彼にもしもの事があるかもしれない。

「本当……諦めの悪い子なのね」

リーシアは目を細めて当一の頭に手を置いた。

それでも、ばたばたと動いてこの状態から逃れようとする当一を、優しい目で見つめたのだ。

そこで部屋のドアが開かれた。

「あんたたち……仲がいいとは思っていたけど、もうすでにリーシアの尻に敷かれている状態だったの……？」

「上手い事言っただけか！ リーシアをどかすのを手伝ってくれ！」

入ってきたのはシエールであった。当一はリーシアをどかすように言うが、リーシアはにやりと笑って言う。

「シエール。隣はどう？ なかなか座り心地がいいわよ」

リーシアに合わせるようにしてニヤツと笑ったシエールは、リー

シアの隣に座った。

「シエール！ 覚えとけよ！」

喚く当一だが、シエールはまったく聞く耳を持たない。

「つてこら！ 紅茶を受け取っているんじゃない！ 早くどけって言っているんだ！ 二人そろって腰をおちつけるな！」

二人はそろって紅茶を飲み始め、当分は居座るような風体を見せ始めた。

そこに、またドアが開けられる。

祥子が入ってきてのだ。

顔に貼り付いているようないつも通りの笑顔は相変わらずだが、シエールとリーシアは、様子が少し違うのを感じた。

「シエールちゃん、リーシアちゃん、今すぐ当一の上からおどきなさいな」

祥子が言うと、リーシアとシエールは体をビクリと震わせた。

「すぐごと当一の上からどくと、『こちらにいらっしやい』という祥子の言葉に従って、部屋から出て行った。

「ありや、長くなるな……」

当一が言う。肌がピリピリと焼けるような感覚は、当一のほうにも伝わってきた。加えて祥子の話し方から、祥子の怒りの度合いというものがとてもなく深い事が感じ取れる。

別の部屋に連れてこられると、シエールとリーシアは床に正座をさせられた。

「シエールさんにリーシアさん。うちの当一に……だからってわけじゃないですけど。他人の上に座るといふ事がどういふ事かご存知？」

祥子のただならぬ眼力に押されながらも、リーシアが言う。

「あんなものはただのお遊びで……」

「あなた達もそろそろ子供ではないのですから、遊び一つにも節度をわきまえてくださいな」

祥子は話し方は丁寧であるが、高圧的で体の芯が冷えるような威圧感是不変わらない。

「はい……すいません……」

あまりの恐怖で目に涙が浮かぶりシア。シエールもそれに合わせて、祥子の説教を受ける事になった。

「祥子さんもあんなに怒ることないのに……」

「俺に言わせればいい気味だ」

あれから、罰として一階の部屋の掃除を言い渡されたシエール。テレビを見ながらくつろいでいる当一の横で、フローリングの床に雑巾をかけていた。

「リーシアはどうしているんだ？」

「あの件にかこつけて、また薬の増産をしろって言われていたわ」
「なるほど。母さんらしい」

床の掃除を続けるシエールは、ふと手を止めた。

「祥子さんっていい人よね？」

「そうかあ？ 善人に見せてはいるが、腹は真っ黒だぞ」

「人に厳しくできるじゃない」

雑巾がけを続けながら、シエールは言う。

「私は親に怒られた事が一度もないわ」

シエールは、生まれた瞬間からこの戦いに参加をするように運命付けられていた。そして、彼女は何人もの家庭教師が付けられて育てられたのだという。

それで、親はシエールの教育にはまったく口を出してこなかったのだという。

「それじゃダメなのよ。人から何か自分の悪いところを律するように言われないと、人はダメになるの」

だが、自分を律する人間なんていなかった。だから、彼女は自分をシュヴァリエという戒律で縛ったのだ。

「私の師匠……スタークから聞いたのよ」

当一はそれを聞いて思う。リーシアの話で聞いていた、二人の師匠は彼女らに大きな影響を与えているようだ。

リーシアは、レーズに恋をしているようであった。シェールはスタークの事をどう思っているか語ったことは無いが、彼女にとって特別な人であったのは、リーシアと同じようである。

この二人にこれまでの影響を与えて、今でも想いをつのらせる。その二人はいつたいたどのような人間であったのだろうか？ 当一は思いをはせる。

「会ってみたいな……そのスタークとレーズって人に……」
「鏡を見てみるといいわ」

シェールは床の掃除をしながら言う。

「あんたの言う事ってスターク師匠そっくりなのよ」

自分が、昔に彼女が好きだった人間と同じ物を感じると言われているようなものだ。これは、まるで愛の告白のような意味深な言葉ではないだろうか？

当一は驚いてシェールの顔を見た。

シェールの顔色は、まったく変わっていないかった。当一の事をか라かつて、笑みを浮かべている様子は無い。

「返答に困る事を言ってくれるな……」

シェールは、当一の言う言葉の意味が分かっているようで、眉根を寄せたが、意味に気付く様子も無く、掃除を続けたのだった。

「よくできましたね。ご褒美ですよ」

シェールが掃除を終えると、それを待っていた祥子が、シェールにケーキを差し出してきた。

「祥子さんったら、こういうところも大好きよ」

そう言って、ケーキにありつくシェール。

「飴と鞭の使い方をよく心得ているようで……我が親ながら恐ろしい」

「こんな優しい母を怖がるなんて、当一もなんていうひねくれ者な

「んでしょうね」

「よく言うよ」

当一は苦笑をした。祥子の手口はすでにわかっているため、当一は彼女のやりようには簡単にはなびかないようだ。

「部屋の掃除一つでケーキが出てくるんだから、これ以上にこき使ってるリーシアにはどんなものを出すともりなんだろうな？」

「もちろん、ケーキをホールで食べさせてあげるつもりよ」

「それはむしろ嫌がらせだ……」

聞いただけで胸焼けを感じる当一。

リーシアの前にホールのケーキを出したらどのような反応を見せるだろうか？

少し見てみたい気もする当一だった。

竜と人形 3

「あの……『あらあら、うふふ』は悪魔よ……」

リーシアはバカみたいな量の大量発注を受けた。山で採れる薬草を全部使っても作りきれるかどうかわからないほどだ。

背中に自分の体と同じくらいの大きさの籠をかつぎながら、その中に薬草を手当たりしだいに放り込んで山の中を散策していた。

「この山をハゲ山にするつもりかしら……？」

流石にそんな量は必要ないものの、恨みを混めた言い方でぶつくさ言いながら、薬草の採取をしていた。

ここは、前回あの女の子に会った場所だ。

土が敷かれており、その場所の隅には材木が置かれている。

あの時の女の子が、今もそこに座っていた。今日も、先日同様元気が無い様子だ。

「こんにちは。まだ治っていないようじゃない。だからあの時薬を受け取っておけば……」

「だから違うといっているだろう！ いいかげんにしろ！」

リーシアの、挨拶に反応して、女の子は声を荒げた。

くすくすと笑って答えるリーシア。

むっとした顔でそれを見る女の子。小さくため息を吐いた後、言い始めた。

「あの時のアドバイスには感謝してる」

「上手くいったのかしら？」

「一歩踏み出すことはできたと思う……」

今日は、リーシアの事を待っていた。女の子は言い出す。

「だからお礼が言いたかった。あと、もう一つお前に伝えたい事があるんだ」

女の子は座っていたベンチから立ち上がった。体をリーシアの方に向けてから言う。

「お前に後押しをされないと、踏み出す事もできないようじゃダメだ。これからは、私一人であいつに近づいていこうと思う。いままでありがとう」

これは、彼女なりの決心の言葉であるというのはリーシアも感じた。

『そう……上手くいく事を祈っているわ』

ここはそう言って彼女に背を向けるべきシーンであるというのも感じた。だが、リーシアはそうする事ができなかった。

「あなたはあぶなっかしいわね……」

リーシアは口からそう言葉が出た。彼女の態度にシエールに似たものを感じてしまった。

困難や、苦悩に一人で立ち向かっていこうとする姿は、シュヴァリエを根ざすシエールの姿そのものだ。

自分が近づいて、今まさに彼女のために力を貸している、健気な少女そのもののなのだ。

そしてもう一つ、過去の自分と重なってしまった。

リーシアはヴィッツを毒殺するという計画を一人で計画して一人で実行した。誰にも相談をしなかったのだ。

あの時、誰かにこの事を相談していれば何かが変わっただろうか？ 自分がヴィッツに対する殺意を捨てる。または、師匠の敵討ちを自分ひとりで完遂するという意地を捨てる。

それさえできれば、他の違った今があるのかもしれないと思うのだ。

シエールに似ており、なおかつ昔の自分のように、誰にも力を借りないように意地を張っている彼女。

その姿に、危なげな印象を感じたのだ。

「私はいつになってもあなたの味方よ。一人でやらなきゃいけないなんて考えちゃダメ」

女の子は驚いていた。震える体につつむいた顔、固めたはずの決心がゆらぎ、崩れそうになっっている心情を体全体で表現しているよ

うであつた。

「お前は本当に無責任だ！」

大声を出して言った女の子が顔を上げると、涙目になって顔を真っ赤にしていた。

その顔で、リーシアの事を睨みながら、怒鳴るようにして言い始める。

「そう言うなら徹底的に付き合ってもらうからな！ 途中で抜けるなんて許さないぞ！」

「敵に背を向けるなんてのは卑怯者のやる事よ」

リーシアはシェールの言葉を借りて言う。

「すっかり聞いたからな！ 最後まで付き合ってもらうぞ！」

言い終えたら、女の子はベンチに座り込んだ。そして、疲れを一緒に吐き出しているような深いため息をした。

「私はこれから薬の材料を探してくるわ」

彼女はこれからぐちゃぐちゃになってしまった気持ちを整理する必要がある。

リーシアは、木々の間へと歩いて薬草を探しにいった。

（エスカッションを得るには信念を持たねばならない）

リーシアが教えてくれた本の一文。

信念とは何なのか？ ラタと自分の違いは一体何なのか？ 抽象的な事柄に答えを求められている。

数学のように、公式や方程式があるわけじゃない。答えの求め方の分からない事象に立ち向かうのだ。

悩み方すら分からない。空にやみくもに手を伸ばして星を掴もうとするような感覚を感じる。

今シェールは風呂場にいる。

悩みがある時は風呂に入る事になっているシェールである。湯船のお湯をすくって、頭の上からお湯をかぶる。それでいい考えが思い浮かぶなどとは考えていない。だが、シェールはそれを何度も繰り返

返していた。

「何？ 新しいシャワーの浴び方かしら？」

そこに、リーシアがやってきた。いつも通りにくすくす笑いながらの登場である。それはリーシアのいつも通りの行動であるのだが、シエールにはそれが腹立たしく見えた。

「何をしに来たの？」

「お背中をお流ししようかと」

そう言っただけで、リーシアはどことなく優しい笑顔をしていた。だが、シエールはそれに気付きながらも悪態をついて付いて返す。

「背中に硫酸でもかけられそうだな」

「お望みだったら次から用意してくるわ。今回は残念だが普通に洗うだけよ」

リーシアはこの問題に自分で直面しているわけではない。蚊帳の外から、自分の事を眺めているだけの人間である。そう思うとシエールは腹が立ってきた。

リーシアはシエールの背中にタオルを当てた。

猫背で座るシエールの背中に何度もタオルを往復させる。

シエールは、黙ってそれを受け入れていた。何度も背中を往復するタオルの感触が、シエールの体に染みこんでいく。

「ねえ。この世界には騎士王の伝説があつてね……」

「アーサー王物語。あれは、最後には裏切りを受けて失敗しているわ」

「仲間を想う円卓の逸話。人を助けるために一生を捧げた人生。あなたはあんなふうになりたいんじゃないの？」

リーシアは、シエールの体に腕を回した。

「ちよつと！ 何をするのよ！」

いきなり、リーシアに後ろから抱きすくめられ、シエールは驚いて声をあげた。

「できれば、昔みたいに一緒に悩んであげたいわね……あの頃はよ

かったわ。私たちの間には何も壁なんかなくて、あなたと私はまるで二人で一人のつもりだった」

「それを壊したのはあなたじゃないの？」

「それはそうね」

そう言われると、リーシアはシエールの体に回している手を離れた。

「あなたは、一人で悩まなければならぬのよ。きっかけはどうあれ、今のあなたは一人なんだから」

「分かっているわ」

「これが、私にできる協力の全てよ」

そう言葉を残して、リーシアは風呂場から出て行った。

「何が協力よ……」

シエールは、また風呂からすくったお湯を自分の頭にかけて始めた。

「いいですか？」

ラタとノエリアそして秋成は、街道で焚き火を囲みながら話合っていた。

さつき、シエール達のジエズルが不意にエスカッションになり、勝てると思っていた戦いをのがしてしまったところである。

「あちらがエスカッションを持っていたというのは誤算でしたが、これからも彼女達を相手にしていきたいと思います」

「ああ……あの子が俺のもんになるっていう約束は絶対守れよな」

ラタは少し、じとりと目を細めて秋成の事を見た。『別にあなたとの約束を守るためではないです』と、言っているような視線である。

だが、ラタは何も言わずに話を続けた。

「問題になるのは、ダイヤモンドドラゴンオブソードマウンテンの相性です。」

ダイヤモンドドラゴンオブソードマウンテンの刃は効きません。ですが、ドラゴンオブソードマウンテンの筋力は十分に

脅威になります」

先の戦いでは、ダイヤモンドドールは、ドラゴンオブソードマウンテンの飛び掛りで、あっさりと転倒をさせられていた。

そして、ダイヤモンドドールは鉄の塊ではない。硬さはあっても重さはないのだ。

「ドラゴンオブソードマウンテンに遠くに投げ飛ばされて、無防備になった私達が、袋叩きに遭う事は、十分に考えられます。秋成はそれを十分に注意してください」

「わかった……」

それから、ラタは綿密にシエール達と戦う時の作戦を、二人に教え始めた。

竜と人形 3

シエールとリーシアと当一は、当一の部屋でローテーブルを囲んでいた。

「シエール。主人はあなたなのだから、作戦の立案実行は、本来ならばあなたの仕事よ」

「協力してくれるんじゃないかったのかしら？」

「余計な事を言ってしまったかしら？ こんな形でこきつかわれるなんて……」

そうばやくリーシアは、一夜漬けで覚えたパソコンの使い方を頼りに、書類を作って二人に渡していた。

中には、いくつかの事項が書かれていた。敵の取る作戦の予測などである。リーシアは、当一に問いかける。

「一番重要なのは、やっぱりお互いのエスカッションの相性よ。書いてあるとおり、できると思ったら投げ飛ばす事を狙っていった」「分かった」

「こんな方法は使いたくないけど……候補者を倒せば私達の勝ちになるわ」

「二対二ね」

ドラゴンオブソードマウンテンとダイヤモンドドールを戦わせておいて、シエールとリーシアはラタとノエリアに直接戦いを挑むつもりのようなのだ。

出された書類の内容を読み、シエールは紙を置いた。

「どうだったかしら？ ご主人様？」

リーシアはシエールに言った。シエールは、

「いいわ。これでいきましよう」

決意をあらわにした表情で、そう言った。

二組が相對したのはあの街道である。レイグネンにやってきて、

お互いを探しあい二組が出会った場所がそこであった。

ラタは、シェール達を見つけると柄に収められている剣に手をかけた。

「挨拶は無しです」

「待ちなさい」

シェールは当一達から前に進み出た。

「先に昨日の質問の返答をしておくわ」

ラタは、剣から手を離す。

「私は、騎士王になるわ」

「アーサー王ですか……」

「人を助けるために私は王になるの。自分の信念を通し、村を一つ生贄に捧げる事になっても胸を張って歩き続けるの」

「なんという暴君ですか……」

「心なしの政治よりは何倍もましよ」

「黙りなさい暴君」

ラタは、剣に手をかけた。シェール達は、ラタが怒っているのを感じた。

短い付き合いであるが、表情を変えないラタを見て、自分の信念を汚されて怒っているのを感じる事ができるようになったのだ。

当一と秋成は、そろってセイフティリングを光らせた。二体の巨大なエスカッションが、同時に光の中から生まれていく。

「勝負です」

「勝負よ」

シェールとラタの宣戦布告の言葉で、お互いは動き始める。

ラタがシェール達に向けて突進し、ノエリアがそれに続く形である。

「ラタにはブレスフェイス（信仰の祝福）がかかっているわ」

「強化呪文……」

リーシアがいい、シェールが呟くようにそれに答える。ノエリア

の魔法だろう。リーシアはそう言うのと後ろに下がり、シエールが前に出た。

ラタがクレイモアを大きく振りかぶり、シエールに向けて振り下ろした。大きく地面に埋まって、街道を削った。

シエールはそれを右のサイドステップでかわし、ラタの側面にまわった。

シエールは、ラタの側面から突きを放った。手加減はなし、ラタを殺すつもりで眉間を狙ってうった剣は障壁に阻まれる。

「フェイスメイル（信仰の鎧）も……」

ラタは、地面から抜き取ったクレイモアを、振り上げる形でシエールに向けてたたき上げた。

だが、ラタの攻撃は途中でスピードが下がった。いきなり、剣が重くなったように感じ、斬撃の威力が弱くなったのだ。

「デイスペル（解呪）ですか」

リーシアの放った、人や物にかけられた魔法を解く魔術である。

ラタは、それに気付きながらもシエールに向けて剣を向けていった。「バルムンク！」

ノエリアは、新しく魔法を放った。ラタのクレイモアの先から光の線が延びた。攻撃力を持った、光る剣の先は、シエールの事を、真つ二つにするために横になぎ払われる。

「ヘビーウエポン！」

ラタがクレイモアを振り切る前に、リーシアが魔法を放った。シエールとラタの持つ武器の重みがいきなり増し、二人は武器を取り落とした。

ラタの斬撃が一回振り切られる間に、ノエリアとリーシアは前衛の二人を支援するために、熱い魔法合戦をしているのだ。

これは、シエールとリーシア。ラタとノエリアの連携がぴったり合っているからできる戦いである。

お互いの呼吸の齟齬一つで、勝敗の天秤が傾く非常に繊細な戦いなのだ。

二人は、自分の剣を拾い上げ、バックステップで距離を取り合った。

シエールはリーシアの前にたどり着くと、剣をかまえなおす。

「助かったわね。私があそこで助けなければ、あなたは輪切りになっていたわ」

「ちゃんと避けたわよ」

ラタ達を見ると、ノエリアがラタにプレスフェイスとフェイスメイルをかけなおしていた。

「ぼさつとしない！」

シエールがそう言うと、リーシアは無数の光の槍をラタ達に向けて放った。

魔法支援ありの剣士同士の戦いの見本のような戦いである。

ドラゴンオブソードマウンテンと、ダイヤモンドドルは、互いに低い姿勢で睨みあっていた。お互いの作戦の内容は同じである。当一も秋成も、相手のエスカッションを足止めする事を言われているのだ。

ダイヤモンドドルは、片膝を突いた姿勢であり、ドラゴンオブソードマウンテンは、腹ばいになって地に伏せた状態だ。

ドラゴンオブソードマウンテンは、蜘蛛のような動きでダイヤモンドドルに向けて移動した。腹を引きずりながらダイヤモンドドルに向かっていく。

ゆつくりと、肉食獣が敵に忍び寄るときのような、鋭く、重く、威圧的な雰囲気を持つにじりり方だ。

ダイヤモンドドルは、拳を振り上げた。それは、近づいてくるドラゴンオブソードマウンテンの頭を狙って振り下ろされた。

ドラゴンオブソードマウンテンは、ダイヤモンドドルの拳をもろに受けた。

脳天に攻撃を受けたドラゴンオブソードマウンテンだが、攻撃を食らっても目が死んでいない。地面すれすれまで頭を下げたドラゴ

ンオブソードマウンテンは、ギロリとした視線でダイヤモンドールを見上げた。

膝立ちをしていたダイヤモンドールの足元に、ドラゴンオブソードマウンテンは、無理矢理潜り込んだ。

「しまっ……」

秋成はそう声をあげる。だが、時すでに遅くダイヤモンドールはすくい上げられるようにして投げ飛ばされていた。

ラタは、ノエリアの支援をかけ終えられ、シェール達に向けて突撃をしていた。

「あなたの突撃は見切ったわ！」

そう言い、シェールはサイドステップでラタの突撃の軌道から移動した。

そして、ラタの突撃の軌道とタイミングを計って剣を振り下ろす。だが、ラタが突撃のスピードを上げたため、シェールの剣は空を切った。

「リーシア！」

シェールは声をあげる。ラタが突撃をしかけた先には、リーシアがいたのだ。

リーシアは呪文を唱え、土を隆起させる。ラタと自分との間に、土囊のような壁を作ったのだ。

「こんなもの」

そう言い、ラタはさらに加速をした。肩から土囊にぶつかっていき、土囊を粉碎した。

粉碎された土囊の後ろから見えたのは、巨大な火の玉を作り出しているリーシアだった。

ボルケイカノン

火山の大砲と名づけられたその魔法は、ラタにかけられたフェイ

スメイルの効果を一貫して、ラタの事を一気に跳ね飛ばした。

ラタはすぐに立ち上がり、またリーシアに向けて突進をする。

リーシアは、土嚢を作り出してそれを阻んだ。そして、ラタはまたそれを体当たりで崩す。

そして、粉碎された土嚢の後ろには、また火の玉を抱えたリーシアがいた。

ラタはかまわず剣を振り上げる。

今度の火の玉は小さい。リーシアの魔法はまだ完成していなかった。リーシアは、魔法を完成させるのを諦め、完成していない火の玉に使われている魔力を暴発させた。

これは、マジックバンという技術で、魔法を作り上げるために貯めている魔力を爆発の力に変える方法である。

自分で起こした爆発の衝撃に吹っ飛ばされたリーシアは、足で地面の上に引きずられたような跡を作りながらも着地をした。

その爆発の衝撃をもとめず、ラタは煙の中から突っ込んできた。

「ぬるいです」

ラタの攻撃は、リーシアの脇腹に当たった。リーシアは体を折り曲げて悶絶をする。

シエールは、リーシアの援護に入らず足をノエリアに向けた。

シエールは、ノエリアに向けて剣を振るった。

フェイスメイルの効果で、シエールの剣ははじかれた。だが、シエールはもう一度剣を振り上げる。

ノエリアはその間に魔法を唱え始めた。

「エンジェルスピア！」

空から、光の槍が一本落ちてきて、シエールに向かって行った。

シエールは、それを気にもせず剣を振り下ろすが、その攻撃はフェイスメイルに阻まれる。

そして、光の槍がシエールに届く寸前。

「はあああああああ！」

シエールが叫び、シエールから放たれた波動がエンジェルスピアを打ち消した。

ソウルフラッシュという気合を使つて魔法を打ち消す方法である。シエールは、ノエリアの前から飛びのいた。

『なぜ、自分から距離を取った？』

そう考えているのが分かる、驚いた顔をノエリアが作った。

その直後に、ドラゴンオブソードマウンテンが、角を突き出してノエリアに突撃をしたのだ。

ノエリアのフェイスメールの効果は一気に消し飛び、ノエリアは吹き飛ばされていた。

竜と人形 4

シエールはドラゴンオブソードマウンテンに吹き飛ばされたノエリアを追っていった。

「手加減をしたでしょう！」

当一にそう言ったシエールは、剣をにかけてノエリアまで向かっていく。

当一は、確かに手加減をした。ドラゴンオブソードマウンテンの力で全力でぶつかっていったら、ノエリアの事を殺してしまうかもしれないと思って、力をセーブしたのだ。

吹き飛ばされたノエリアは、小石のように飛ばされたものの、大きなダメージはないようで、立ち上がって戦意のこもった目をシエール達に向けた。

シエールはそれを追っていく。だが、

「させません」

リーシアの事を倒したラタが、シエールに向けて突撃をしてきたのだ。シエールはラタに応戦をするために振り返った。

そこに、フェイスメールとブレスフェイスがラタにかけられる。

「しまつ……」

ラタの攻撃の威力を考え、シエールは後ろへと飛んだ。

ラタは、かまわずに攻撃を振り切る。

ラタの攻撃は空を切ったが、攻撃の余波だけで、シエールは吹き飛ばされた。ラタが叩いた地面が、大きく抉れ、土砂が辺りに散乱していく。

当一は、ノエリアに向けて動いた。だが、

「よくも人の事をふつとばしてくれたな」

秋成がそう言う。ダイヤモンドドールに、シッポを踏まれて動けなかった。

ドラゴンオブソードマウンテンの背中に、ダイヤモンドドールの

拳が叩き込まれ、背中から生えている剣山が折れ飛んでいった。当一は、体を反転させてダイヤモンドドルに頭から突っ込んでいった。ダイヤモンドドルは横転する。

「これは……やばいわね」

一度距離を取り合った二組は、手傷を負ったリーシアをかばうシエル達とそれを囲むラタ達にわかれた。

シエルは飛び散った小石を受けて全身に切り傷を作っていた。リーシアはラタの一撃を受けて口の端から血をたらしている。もしかしたら内臓を傷つけられたのかもしれない。そして、当一は、背中に生える剣山を破壊されて、背中から生えた剣が、ほとんど折られている状態であった。

一つの判断ミス。敵との行動の遅れ。ためらい一つ。彼女らが窮地に立っているのは、そういった些細な原因だ。

だが、戦いというものは、そんな些細な原因で決まってしまうものの。

全員傷を負っているものの、それほど致命的なものではない。だがその、リーシアのダメージが問題である。

まだ立てる。魔法もつてる。動き回れる。だが、少しの不利から切り込まれていくのが戦いというものだ。

一発逆転などはない。将棋のように、一手ずつ確実に追い込まれていく感覚は、実際に戦いというものを知らなければ分からないだろう。

今はまだ小さな綻び。それが敗北への道標になっていくのだ。

「あきらめるな」

当一は言った。

「あいつの体はダイヤだ……」

ダイヤモンドは固い。だが、硬すぎるあまり、衝撃を外に逃がせないという弱点も持っている。鉄ならば、へこんだり曲がったりする事で衝撃を逃がすが、ダイヤモンドは、それができないため、ぱ

つくりと割れてしまうものだ。

「見た目には変化は無いように見えるが、ダメージはたまっている。攻撃を続けなければ……」

「当一様は本当に博識でございますこと」

「分かったわ」

ラタ達とにらみ合いながら、三人はそう会話をした。

全員の心は決まっている。口に出さなくとも、それが三人には分かる。他の二人が、同じ事を考えているのが、分かるのだ。

リーシアとシエールは、ドラゴンオブソードマウンテンの背中に飛び乗った。

「ギガースソード！」

リーシアが魔法を唱えると、シエールの武器に、石がいくつも張り付いていった。シエールの武器は、まるで蛮族の使う巨大な棍棒のような姿になったのだ。

「ストーンスキン！」

次にリーシアがそう魔法を唱えると、リーシアの体に石が張り付いていった。人型をした石の塊になったリーシアは、両目を閉じた。

「いいんだな？」

「ええ……ひとおもいにやっちゃってちょうだい」

当一は、大きく首を回し、リーシアの事をダイヤモンドドールに向けて投げ飛ばした。

ダイヤモンドドールには炎や水の魔法は効かない。重量のある攻撃を思いっきりぶつけるのが一番の方法なのだ。

リーシアは、石の塊となって、ダイヤモンドドールに投げつけられていった。リーシアが核となっている石の塊は、カタパルトで飛ばされたような威力で、ダイヤモンドドールにぶつかっていった。

「ぐっ……」

それを受けて秋成はうめいた。この攻撃は効いている。

次に当一は、リーシアがあたった場所を狙って頭から突っ込んで

いった。

これは、前の戦いでも秋成の体にひび割れを作った攻撃である。強烈な衝撃に、秋成の体はまたも吹っ飛ばされた。

「最後は私よ！」

シエールは、どこかい剣を大きく振りかぶり、当一の背中を足場にして高く飛び上がった。

これは、唯一の一発逆転の方法だ。

この戦いはジェズルである秋成を倒さなければならない。

ラタ達はシエール達を囲んだ。一見すればシエール達の危機だが、それは兵力分散をしているというようにも取れる。三人で秋成に襲いかかれば、離れた場所にいるラタとノエリアは助けには行けない。数秒の間、秋成と三対一の形が取れる。その数秒は、シエール達にとつては最大チャンスだ。

最後のシエールの攻撃である。これでダイヤモンドルを倒す事ができなければ、手傷を負ったリーシアと、いつ倒れるかわからない当一ではもう打つ手は無い。

シエールの頭には、いくつもの想いがかけめぐった。

当一と出会い、まだ数日しか経っていないが、自分は自分でも分かるくらいに成長をしたと思う。

当一はシエールに、あきらめない事の大切さを教えてくれた。

口で言ってしまうえば、陳腐な言葉に聞こえるだろう。だが、陳腐であるからこそ、とても大事な事でもあるのだ。

リーシアとの関係は、もう崩れてしまい元に戻らないものであると思っていた。

だが、当一は二人の関係を修復しようとしてくれている。実際、二人は少しずつ昔のような関係に戻ってきていると思う。

そして当一は、ダイヤモンドルと戦う事になり、戦意を喪失していた時自分の事をしかってくれた。あれがなければ、私はあそこで死を選んでいただろう。

今の私があるのは当一のお陰だ。今だって、当一の考えた作戦を、

力を合わせて実行している。

「ありがとう当一……」

シエールは、当一に聞こえるはずがないのを分かった上でそう呟いた。

「あんたの期待は裏切らないわ!」

シエールは剣を振り上げる。その時に感じる重量は並の武器とは比較にならないものだ。

手首が重量を支えきれずに軋むのが分かる。肩も肘も、限界を超えた負担がかかり、外れそうな感覚を覚える。

斬劇の衝撃は、全て足にかかる。攻撃を打ち切ったら足の関節には絶大な負担がかかる。もしかしたら、外れるかもしれない。

それでもシエールは、全力でギガースソードを叩きつけた。リーシアと当一の攻撃で出来上がったひび割れを目掛けて剣を振り下ろすと、まるで、ガラスが砕けるようにして、ダイヤモンドドールは粉々になっていったのだ。

満身創痍であったシエールとリーシアたちを運んでいくのは当一の役目になった。

シエールは片方の足を引きずって歩いていた。リーシアも歩けるが体が震えている。

その姿を見かねた当一は、リーシアとシエールを、片方ずつの肩でかついでいるのだ。

「変なところを触るんじゃないわよ……」

「それだけの憎まれ口が叩けるのなら上等だ」

「私ならどこを触ったっていいわよ。当一様のお好きなように……」

「リーシアは、もっと自分を大事にな……」

当一は、リーシアの言葉を軽く流して言った。だが、それに激しく反応したのはシエールだった。

「何よ! リンリンがそう言うんだったら私だってどこをさわってもいいわよ!」

「リンリンと呼ぶなあ！　そして、何でこんな話題で張り合っているのよ！」

「耳元で大声を出すな！」

「トイちゃんも！　こんな奴の事を触るんだったら私の事を触りなさい！」

「トイちゃんと呼ぶな！」

「なんで、そんなに触らせたいの！　言い出した私が恥ずかしくなってきたじゃない！」

三人の口論が軌道に乗ってきたところ、それを止める声がかかった。

「私達の処遇を決めてもらいたいですね」

戦いに勝ったシェールは、ラタとノエリアに何でも命令を出す事ができる。

シェールの言葉しだいで、ラタ達の運命は決まるのだ。

「あなたはとうしたい？」

シェールはそう言い、それを聞いたラタは、少しだけ目を丸めた。これは、彼女の驚いている表情なのだろう。

「聞かれるとは思っていませんでした……」

「あなたが家に帰りたいって言えばそうしてもらうし、私について戦いたいっていうならそうしてもらおうわ」

「そうですか……」

ラタは少し黙考を始めた。

「お前だったら、『私のために死ぬまで身を粉にして働きなさい！』って言うと思ったのにな」

当一が、わざとらしくにやりと笑い、茶々を入れながら言った。シェールは、それに答えるようににやりと笑って当一に答えた。

「みそこなうな」

それは、一度当一がシェールに向けて言った言葉である。

「ここでオウム返しをするか」

リーシアは首をかしげ、他の三人も、同様に意味が分からないと

いった顔を作る。最後に二人は、不敵な笑みを向け合った。

エピローグ

当一の部屋には六人で戻った。

「私達は別で戻ったほうが良かったのではないですか？」

「そうですね。この世界での住居くらいならば、私達はなんとかしますわ」

六人というのは、ラタとノエリア。そして、彼女らが秋成にあてがっていた女の子の三人を合わせた数である。

「そんな事は気にする必要ないわ」

ラタとノエリアの言葉を、シエールは一蹴する。

ラタはシエールの配下に加わる事を申し出てきた。ラタが配下に加わるという事は、ノエリアも秋成の囲っていた女の子も一緒に配下に加わるという事である。

そして、それら全員を当一の家で住ませようというのは、普通ならば無茶な話であろう。

「それじゃあ、部屋割りを考えないといけないわね」

当一の部屋に、ノックもせずに入ってきた祥子が、いきなり三人増えたのをまったく気にしない様子で言い出した。

「突然失礼します。私の名前は……」

「ベッドがいかしら？ それとも布団の方がいい？」

ラタが自己紹介を始めようとすると、それを無視して祥子は話を始めた。

「え……布団をお願いします……」

ラタがそう言うと、祥子は「それじゃあここで待っていてね」と言って、部屋から出て行った。

「これは一体どういう事なんですか？」

ラタが当一に向けて聞いたなら、当一はお決まりのセリフで返すのだ。

「気にしたら負けだ」

次の日の昼下がり、当一は学校に行っていて留守にしている。当一の家のリビングには、上下ジャージの姿でソファーに寝転んでだらしているラタの姿があった。

そこに、シエールが祥子に部屋の掃除を頼まれて、たまたまリビングに入ってきた。

「出たわね。ジャージ怪獣ズボラー」

シエールがラタのだらしない姿を見て、ラタにそう言った。

「がおー」

ラタは、シエールに顔すら向けずに力の無い声でそう答える。

「私は絶対に動きませんからね」と、言っているのが態度で分かる様子であった。理路整然としているレイグネンでの彼女だけ見ると、凛々しく見えるものだろうが、普段はこうもダラダラしているのである。

「開き直っているんじゃないわよ……」

呆れた祥子のシエール。ラタがソファーで寝ているのにもかまわず、部屋に掃除機をかけはじめた。

ブオー。と、大きな音を鳴らせて掃除機が動く。かなりうるさいはずなのだが、ラタはそれを気にしている様子も無く、むしろまどろみの中に沈んでいくようだった。

そこに、声かけられる。

「ラタちゃん。暇なら庭の草むしりでもやってくれないかしら？」

今にも寝てしまいそうな半目をしていたラタの目がいきなりおもいつきり開かれた。

祥子の強大なプレッシャーをラタはその時初めて感じた。

「これでよろしいのですの？」

「それよ。ありがとう」

その頃、天井裏ではリーシアが薬の調合をしており、ノエリアがそれを手伝っている所だった。

『何か手伝えることはございませんか?』と聞いてきた、主人とは対照的に勤勉なメイドの手を借りながらビーカーの中身をかき混ぜているところだ。

「きゃっ」

ノエリアの声が聞こえ、ガラスの割れる音も聞こえてきた。

リーシアが振り返ると、床に転んでいるノエリアの姿がある。当然ながら、ノエリアに運んでくるように言いつけた薬は床にぶちまけられていた。

「……………」

ラタがいつもしているような半眼をして、そのうえ呆れが明らかに入っている視線で、起き上がるノエリアの事を見たリーシア。

「何ですか! その冷たい視線はっ!」

「……別に……」

「言いたい事があるなら言えばよろしいのではないですか!」『ドジツ娘メイドがまたやった……』などと思っているのでございましょう!」

「ちよつと違うわね……」『ドジツ娘メイドをこんな所で披露しても誰も喜ばないわよ。もっと場所を選びなさい』って思っているわ」

「好きでやっているわけではありませんわ!」

怒って顔を赤くしているノエリアが、いくら抗議をしても、リーシアは特に気にする様子を見せなかった。

ノエリアの言葉に何も返さずに、リーシアがそのまま調査を続けたのを見て、ノエリアはカチンと来たようだ。

「客寄せは心得ているようで……ぜひにも極意を教えてくださいたいものです。パンダのリンリンさん」

「リンリンと呼ぶな!」

今度はリーシアが顔を赤くして怒り出した。

それに、口元をニヤリとさせた後に続けるノエリア。

「いい名前だと思いますわよ。媚を売って、みんなのアイドルぶっていればいい客寄せパンダにはお似合いの名前ですわ」

「私がいつ客寄せをしたっていいのかしら？」

リーシアも、今の言葉でカチンときたようだ。

リーシアの顔は、まるで笑っているようにひきつり、痙攣をしているようにしてピクピクと顔の筋肉を動かしている。

これは、一部のエリートの怒っている顔であるというのはノエリアの知るところだ。

それを見て、ノエリアはにやりと笑って続けた。

「当一様に対して、ぎりぎりの発言をしたり、過去話でシャワーシオンを用意したり……病みつ娘として登場をしておきながら、すぐにデレたりなんて、あざといとしか言い様がありませんわ」

「メイドに言われたくないわ！ あなただって……ドジツ娘メイドのどの部分にあざとく無い成分が含まれているというのよ！」

二人の終わりが無いような口論であるが、それは鶴の一声で止められる。

「リーシアちゃんにノエリアちゃん。やかましいですから静かにしてくださいねー」

祥子の声である。正体不明のプレッシャーを持った声を聞くだけで、二人の顔から一気に血の気が引いていった。

「すいませんでした！」

二人は声をそろえた。

当一が学校から帰ると、タラが庭のくさむしりをしている所だった。

「無茶苦茶似合うな……」

当一が言った。上下ジャージで、むぎわら帽子を被りながら、黙々と作業をしているのだ。

これは草むしりをするうえでの完全装備と言っている。

「がおー」

当一を見つけたラタが、当一に向けて言った。怪獣のポーズでもいっただろうか？ 両手を顔の辺りまで上げて、爪を見せ付ける

ようなポーズをした。

「新しい挨拶か？」

「私はジャージ怪獣ズボラーだ」

ラタはそう言うと、当一にとびかかった。ラタはタックルで当一の腰に飛びつき、当一の上にのしかかったのだ。

「食ってやるー」

間の抜けた声で言うと、ラタが当一の耳に噛み付いた。

「私に食われたくなければ、草むしりを手伝うのだー」

力の抜けた声で言うが、やはりラタも参加者の一人である。しっかりと捕縛術でも習っているようで、当一がもがいてもラタを押しのがることが出来なかった。

「そういう事か！ 手伝うからやめろ！」
観念をして当一がそう言う。

そして、当一とラタが並んで草むしりを始めた。

「当一。帰っていたの」

その姿を見かけて、声をかけたシェールは不幸だったのかもしれない。当一とラタは目配せをし合い、二人で怪獣のポーズをする。

「がおー」

「がおー」

ラタと当一が、そろって言った。

「私達は怪獣ズボラーズだー」

当一がそう言った。

それに合わせてラタがシェールに飛びかかっていく。

「いきなり何なのよ！」

ラタの飛び掛りをかわしたシェールだが、跳んだ先で、当一に背中から組みつかれた。

「よくやりました。当一」

そこにラタも飛び掛る。

「私に噛み付かれたものは傷口からウイルスが体内に送り込まれて、

我らの仲間になるのである」

「そういう事だ。シエールもこれで仲間入りだ」

ラタと当一が言う。

「何を言って……ひゃあ！ そこはやめて！」

ラタがシエールの首元に指を這わせると、シエールの反応がいきなり顕著になっていく。

「リーシアから聞きましたよ。あなたの弱点は首元なんですよね」

「あのバカあ！ 余計な事しか言わないわねえ！」

シエールが暴れるのを押さえつけながら、ラタは遠慮なくシエールの弱い部分を弄んだ。

いくら暴れても、二人に押さえつけられれば、なすすべも無く。

シエールは熱のこもった悲鳴をあげる。

「分かったわよ！ 草むしりを手伝えばいいんでしょう！」

シエールが言うのと、ラタの手はピタリと止まる。

熱い息を繰り返しながらのシエールは、一度地面の上に座り込んだ。

「だけど……少し待って。やらなきゃいけないことがあるから」

呼吸を整え、シエールは立ち上がる。すぐに家の中に入っていく
て屋根裏部屋を目指した。

「リーシアアアアア！」

屋根裏部屋に上がりこむと、リーシアを目掛けて飛びついた。

「何！ 何で靴下を脱がすの！」

リーシアはシエールに押し倒され、靴下を脱がされた。

「あんたのせいで！ あんたのせいで！ 私はあんなめにいい！」

そして、シエールはリーシアの足の裏で指を動かす。

「キャッ！ 何があつたのよ！ ヒャン！ やめなさいって！」

「うるさい！ しつかり食らいなさい！」

それからシエールはリーシアの足の裏を存分に弄んだ。

シエールとリーシアの声は外まで聞こえてきていた。

二人がもみ合つて暴れる姿が、聞くだけで想像できるようである。

『いやあああああ~~~~~!』

リーシアが発しているとは思えない、女の子らしい悲鳴。

「当……………」

ラタはその状況を見て、いつもの無表情をしていた。だが、悪いことをしたとは思っているらしく、微妙に口元を結んでいる。

「ちなみに、ノエリアは脇腹が弱いです」

「それを俺に教えてどうしようっていうんだ!」

そして、三人で草むしりを始める。三人になると作業もはかどり、順調にくさむしりは進んでいった。

「こんなもんでいいでしょう」

シエールが言うと、当一とラタも草むしりをやめた。庭はだいぶ綺麗になっている。

「二人共ありがとうございます」

ラタがそう言うと、家の中へ入っていった。

「そろそろ六時です」

ラタが続けて言ったのは、夕食の時間を知らせる言葉だった。

「ラタちゃんにシエールちゃんに当一も、ご飯を食べにいらつしいい」

中から祥子の声も聞こえ、全員が団欒の場所へと集まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1437q/>

シェールのシュヴァリエ

2011年3月22日00時55分発行